法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

動接縁としての建築 ： 深谷通信所跡地再生

戸佐, 佑輔 / TOSA, Yusuke

(発行年 / Year)
2008-03-24
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2008-03-24
(学位名 / Degree Name)
修士(工学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)

P377.5
M35-2
2007-35

2007 Master Thesis

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Hosei University
Master Course of Architecture Engineering
06R5334 Yusuke Tosa

2007年度　修士設計

動接縁としての建築
-深谷通信所跡地再生-

主査：　渡辺 真理 教授
副査：佐々木 睦朗 教授
副査：　富永 譲 教授

法政大学大学院
工学研究科 建設工学専攻
06R5334 戸佐 佑輔

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Outline

-動接縁としての建築-

接縁とは二つの環境条件の接触面のことである。私達の住む都市にも当然、このような接触面は数えきれない程存在している。単純に考えてみると、その接触面が多ければ多いほど、より多様な環境があるということになる。都市の中で最も多様な環境がある場というのは、都市の中で最も自由な場ではないだろうか。私が考えるにその場所こそ、都市公園である。都市公園は都市の様々な価値を投影し、年齢や人種を問わずに誰もが訪れる場所の一つである。

平成17年10月、横浜市内米軍施設総面積528haの約8割にあたる、約419haの返還が決まった。これによって横浜市には広大な規模の空地(ヴォイド)が発生する。私はこの広大なヴォイドを敷地として設定し、都市公園としての未来を考えることにした。また、設計主旨として先ほど述べた接縁という概念をテーマとした。

動接縁としての建築とは、異なる環境の接触面に存在する建築であり、歩行空間であり、流れである。この流れに乗ることで誰もが都市の多様な価値に出会うことができるのである。

-Architecture of Shift Edge-

"Edge" is a contact surface of two environmental conditions.Naturally, such a contact surface exists in it, so that it cannot finish counting it to the city in which we live, either.When it thinks simply, the more there are many the contact surfaces, the more it will be said that there is more various environment.The place with the most various environments in the city is the freest place in the city. Perhaps, the place is a public park. A public park is one of the places which everyone visits without reflecting various city worth and asking age and a race.

The return of about 419 ha equivalent to about 80 percent of U.S. Forces facility gross area 528ha in Yokohama city was decided in October, 2005.This fact makes Yokohama city generate a vast void. I institute this vast void as a site, and it decided to consider the future as a public park. Moreover, it carried out the theme the "edge".

About "Architecture of Shift Edge" is architecture which exists in the contact surface of different environment, It is "walk space" and "flows".Everyone can meet with various city worth by riding this "flow".

-目次-

序章　研究背景　002

第1章　研究目的・方法　004
1.1　研究目的
1.2　研究方法

第2章　都市の広大なヴォイド/都市公園　007
2.1　都市の広大なヴォイドの意義
2.2　都市公園の歴史
2.3　ラ・ヴィレット公園
2.4　未来の都市公園とは

第3章　深谷通信所　015
3.1　深谷通信所の歴史
3.2　深谷通信所の現状
3.3　深谷通信所の可能性

第4章　設計主旨　029
4.1　接縁効果
4.2　動接縁

第5章　修士設計/深谷通信所跡地再生　036
5.1　全体計画
5.2　建築計画

後書　067

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Introduction

序章　研究背景

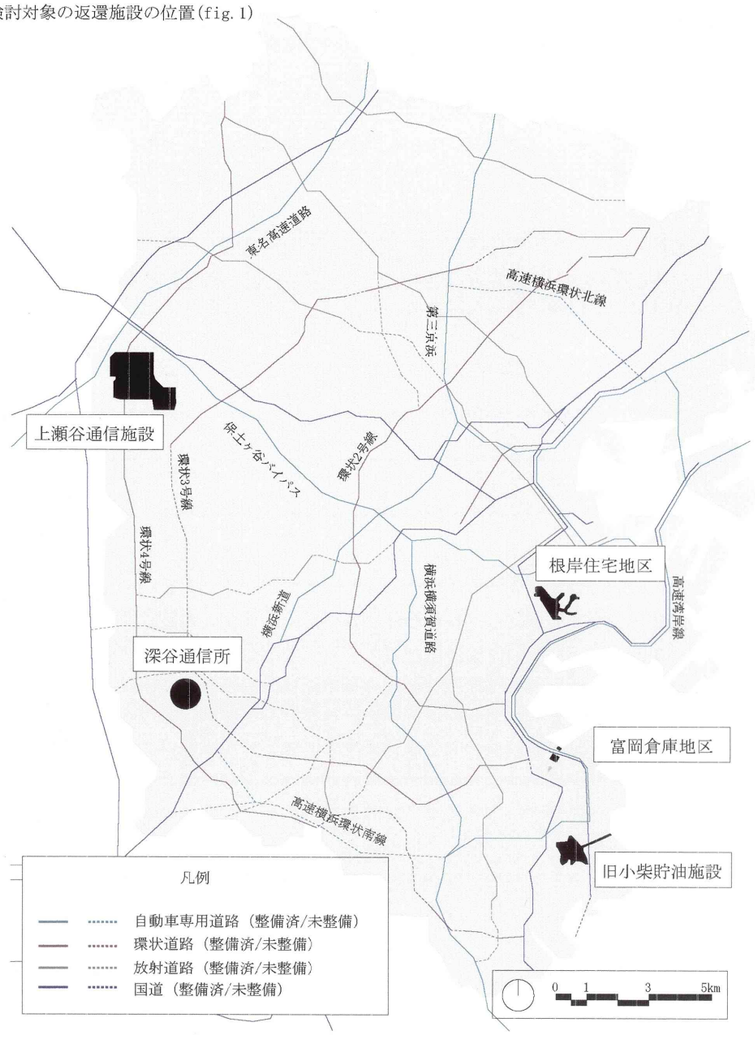
-研究背景-

平成17年10月、横浜市内米軍施設総面積528haの約8割にあたる、約419haの返還が決まった。返還が決まった施設は上瀬谷通信施設(242.2ha)、深谷通信所(77.4ha)、富岡倉庫地区(2.9ha)、根岸住宅地区(42.9ha)、旧小柴貯油施設(52.6ha)の計5ヵ所の施設である。(fig.1)

戦後最大で1,200haにも及ぶ広大な土地の接収により、道路等の都市基盤施設の整備や計画的な土地利用が阻害されるなど、横浜の復興と再建を著しく遅らせるものとなり、市民生活にも大きな影響を与えるに至った。このような深刻な状況の中、横浜市では、市民・市会・行政が一体となって接収解除に向けた取り組みを進めてきた。その結果、昭和36年に田奈弾薬庫が返還され「こどもの国」に、昭和44年に根岸競馬場地区が返還され「根岸森林公園」に、昭和46年に富岡倉庫地区の一部が返還され「富岡総合公園」に、昭和57年に横浜海浜住宅地区が返還され、「新本牧」に生まれ変わり、徐々に返還が実現してきたものの、昭和57年以降は大規模な返還がない状況が続いていた。(fig.2)

戦後60年を経た今、今回の大規模な返還に伴って現れる都市の広大なヴォイドを貴重な空間資源として有効活用していく必要があるだろう。本研究は結果として60年間停止していたことによって取り残されてしまった都市のヴォイドを未来へ再び接続していくものである。

■検討対象の返還施設の位置(fig.1)



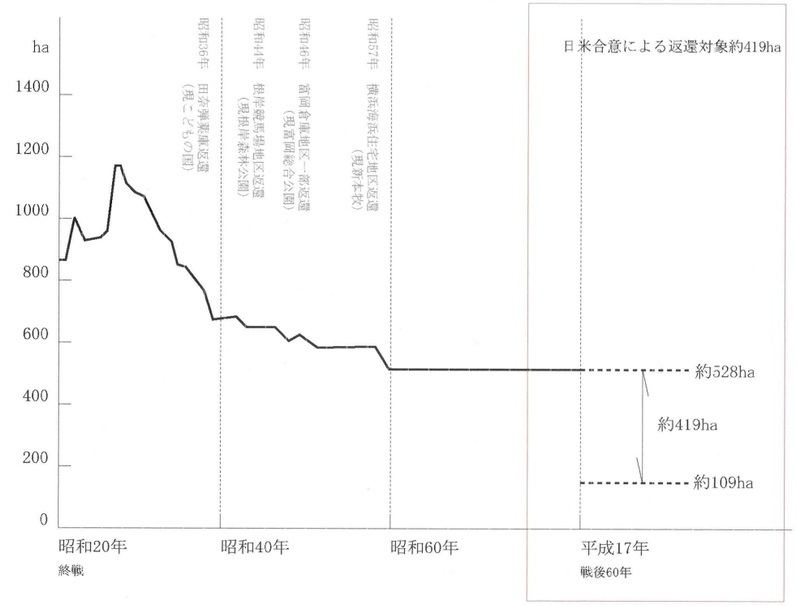
-Research background-

The return of about 419 ha equivalent to about 80 percent of U.S. Forces facility gross area 528ha in Yokohama city was decided in October, 2005.
The institutions it was decided that return would be are a total of five institutions, the Kamiseya communication institution (242.2ha), the Fukaya communication place (77.4ha), the Tomioka warehouse area (2.9ha), the Negishi residential area (42.9ha), and the old Koshiba oil stock institution (52.6ha).

By requisition of the vast land which also attains to 1,200ha at the maximum after the war, it becomes delay revival and reconstruction of Yokohama remarkably, and also came to affect civic life ; Maintenance and the planned land use of urban infrastructure institutions, such as a road, are checked.The measure which a citizen, a municipal assembly, and administration were united, and was turned to derequisition has been advanced in such a serious situation in Yokohama city. As a result, although return had been realized gradually, the situation where there was no large-scale return continued in 1982 and afterwards.

It will be necessary to use effectively vast urban void which appears with this large-scale return as precious space resources now which passed through 60 years after the war.
This research connects urban void to the future ; It has been left by having stopped for 60 years as a result.

■市内米軍施設総面積の推移(fig.2)

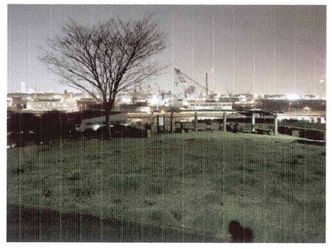


昭和36年:田奈弾薬庫返還（現こどもの国）
昭和44年:根岸競馬場地区返還（現根岸森林公園）
昭和46年:富岡倉庫地区一部返還（現富岡総合公園）
昭和57年:横浜海浜住宅地区返還（現新本牧）

■米軍施設跡地再生例

こどもの園

根岸森林公園


富岡総合公園

新本牧

: CAPTION
fig.1:横浜市返還施設跡地利用プロジェクト第一次報告書(2005年3月) 参考作図 / fig.2:米軍施設返還跡地利用指針(2006年6月)

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Chapter-1

第1章　研究目的・方法

-研究目的-

戦後の日本は目覚しい技術の発達により、多くのものが大量に生産される時代となった。しかし今や成長の時代は終わり、あらゆる資源のリユース、リサイクルが重要視されている。建築の分野も例外ではなく、「ブラウンフィールド(*1)の再生」が注目を集めている。埋立地や工場などの産業系用地跡、不良債権化したバブル後の遊休地などの再生によって、新たな価値を見出す試みである。米軍施設も一つのブラウンフィールドである。返還が合意された今、これらは都市に残された空間資源として、豊かな地勢を保っている貴重な場所であるということを念頭に置き、有効に再生することが求められる。

本研究では米軍施設返還予定地5ヵ所の中で、「深谷通信所(77.4ha)」をケーススタディとして計画し、都市における巨大な空間資源の生み出す一つの風景として提示することを目的とする。「深谷通信所」は円形ということもあり、他の4施設に比べ、都市に対しその様相をより鮮明に刻み込んできた。時にはネガとして、時にはポジとして、それは暴力的なまでの磁場を都市に発しているこの場の来るべき未来を創造していきたい。

■深谷通信所

神奈川県横浜市泉区和泉町、中田町

: CAPTION

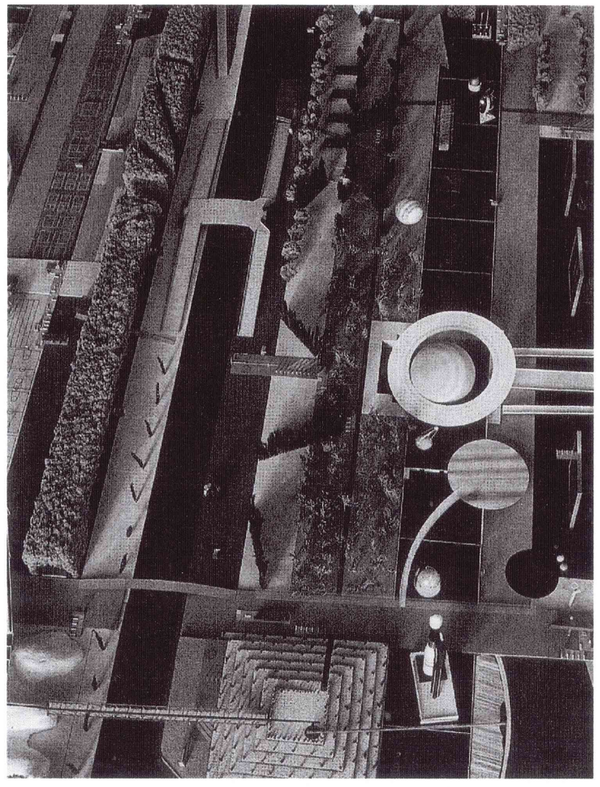
*1:すでに開発されている市街地を指すが、広義には田畑なども含まれる

-研究方法-

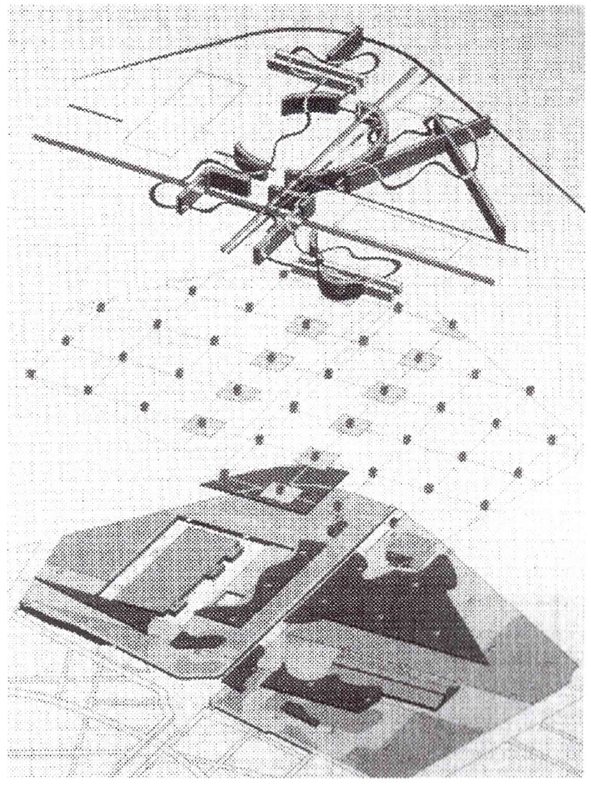
広大なヴォイドとなる深谷通信所を都市のブラウンフィールドとして捉え、都市公園として再生させる。

その為にまずは、都市の広大なヴォイドの意義を認識することからはじめ、次に都市の広大なヴォイドの一つである都市公園について論じることとする。都市公園については、近代以降の事例を探ることによって、今日まで都市公園が都市にどのような影響を与えてきたのか。そしてどのように変化してきたのかを明らかにする。そして都市公園として世界的に注目を集めた「ラ・ヴィレット公園」を取り上げる。「21世紀の都市公園」というテーマの下に行われたこの国際コンペによって選出された2案(バーナード・チュミ実施案/レム・コールハース計画案)を研究することによって、「未来の都市公園」の在るべき姿を探る。最終的には深谷通信所跡地を舞台として計画を行う。

■ラ・ヴィレット公園



(計画案)
レム・コールハース



(実施案)
バーナード・チュミ

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Chapter-2

第2章　都市の広大なヴォイド / 都市公園

-都市の広大なヴォイドの意義-

まずは「都市の広大なヴォイド」とは何かを定義する必要があるだろう。一般的に「ヴォイド/Void」とは、「空虚」や「隙間」を意味している。都市における「空虚」や「隙間」とは、公園、スポーツ広場、学校の校庭、建築物の周辺にある空隙などその規模や場所は様々であり、その捉え方も曖昧である。私が本研究において示す「都市の広大なヴォイド」は、具体的に言えば都市公園、緑地や森林、農地を指すが、規模についてはそれ自体に重要な概念がある訳ではないので具体的な面積等は示さないこととする。

これらが都市に存在する意義として主に次の三つが挙げられるのではないかと考えている。これらは「都市の広大なヴォイド」が与えるであろうポジティブな影響を示している。

・環境共生 / Environment Symbiosis
・食料生産 / Provisions Production
・心身の源 / The Origin of Mind and Body

都市公園

緑地

森林

農地

＜環境共生 / Environment Symbiosis＞

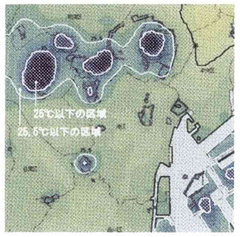
環境特性の観点から緑地や森林をみると、その規模の増大に応じて動植物の生育・消息種数が、等比級数的に増大することが分かっている。例えば森林の面積が10ha以上で森林性の鳥類が生息が安定し(fig.1)、緑地の面積が10ha以上で150種の植物種が生育する(fig.2)。また、ヒートアイランド現象の緩和や防災空間・機能の確保、都市景観の形成など私達の生活に直接与える影響も多い。ヒートアイランド現象については国土交通省が調査を公表している。(fig.3)は2004年に東京都心部の10km四方の範囲を対象に行った、緑地保全・緑化によるヒートアイランド現象緩和のケーススタディである。現況の緑被率27.3%から12.2%アップの39.5%に設定した時の、夏における昼間と夜間の温度変化のシミュレーションをしたもので、平均気温が、過去10年間に上昇した温度変化分の0.3度下がり、約1,000haの区域で、30度以上の真夏日が解消されるという結果が示されている。防災空間・機能の確保も重要な事項である。特に都心では大地震やテロリズムに備える準備が必要である。このように「都市の広大なヴォイド」空間をうまく利用し、自然環境と共存していくことが今後の課題であると考える。

＜食料生産 / Provisions Production＞

都市の至る所が消費の場へと変貌していく中、農地は生産の場として機能している限られた場所の一つである。食料は、人間の生命の維持に欠くことのできないものであるだけではなく、健康で充実した生活の基礎として重要なものあり、食料の安定供給を確保することは、社会の安定及び国民の安心と健康の維持を図る上で不可欠である。しかしながら、農林水産省によれば、日本の自給率は現在40%で、主要先進国の中でも最低水準であることが分かっている。(fig.4)その主な原因としては日本においては戦後、食生活の洋風化が急速に進んだという特徴があり、この急激な変化が食料自給率を引き下げてきた大きな要因となっている。日本では昔から主食（ごはん）を中心とした食生活が行われてきたが戦後、副食（おかず）の割合が増え、中でも特に畜産物（肉、乳製品、卵など）や油脂の消費が増えてきた。自給率の高い米の消費が減り、自給率の低い畜産物や油脂の消費が増えてきたことにより、食料全体の自給率が低下してきたのである。さらには、郊外における宅地開発や情報化社会による就業状況の変化などによって耕地面積、農家数の減少が進んでいることも自給率に関わっている。(fig.5)
都道府県別の自給率を見ると北海道が国内最高の201%に対して東京都が国内最低の1%、次いで大阪の2%、神奈川の3%となっている。都市に住む私たちが今一度「食」について考え、残された農地を大切にすると共に、空間資源である「都市の広大なヴォイド」を利用して多くの人が農業と関わっていけるような体制をつくることが重要であると考える。

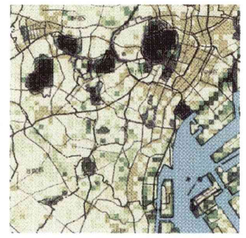
■ヒートアイランド現象緩和のケーススタディ(fig.3)

現況の気温分布図(05:00)



現況の気温分布図(13:00)

現況の緑被率(27.3%)

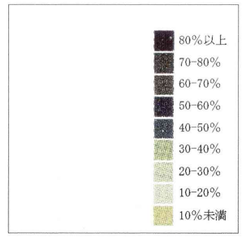


シミュレーション気温分布図(05:00)

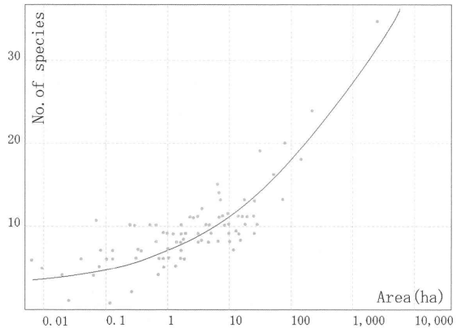
シミュレーション気温分布図(13:00)

設定緑被率(39.5%)

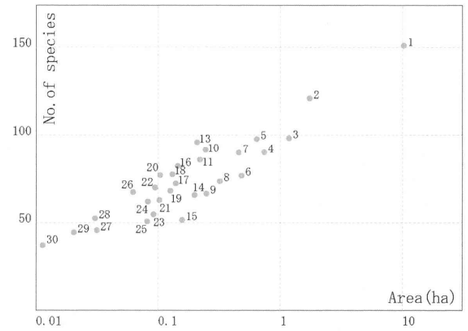
緑被率凡例



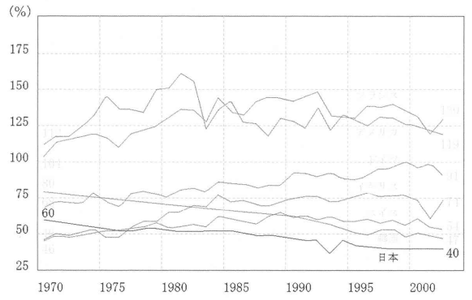
■鳥類種数と森林面積：関東地方(fig.1)



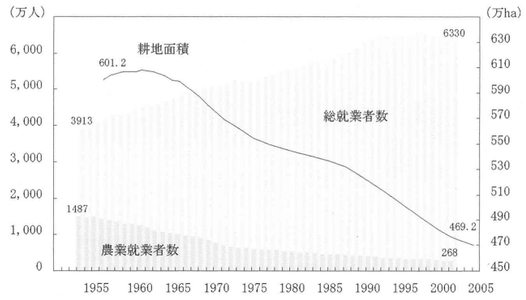
■植物種数と緑地面積：関東地方(fig.2)



■主要先進国の自給率(fig.4)



■農業構造の変化(fig.5)

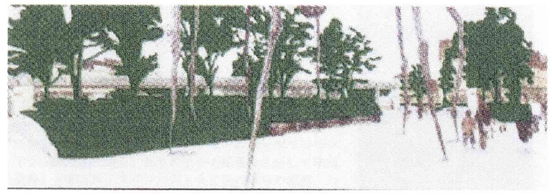


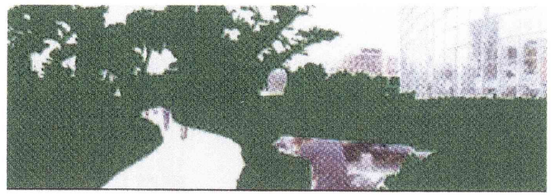
＜心身の源 / The Origin of Mind and Body＞

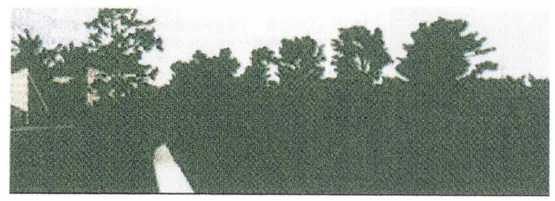
都市公園や緑地が都市に住まう人々の安らぎの場として機能していることは誰しも感じていることである。例えば国土交通省は緑視景観についてアンケートを実施している。（fig.6）は2004年7月22日、東京・六本木ヒルズ内にて、緑がもたらす心理効果について観測したもので、緑視率（日常生活の実感として捉えられる緑の量として、特定方法で撮影した写真の中に占める緑の割合）の異なる4地点における、来場者に対するアンケート調査結果を図式化している。その結果都市の中でも緑の専有面積が広いほど、実際の温度変化に加え、厳しい夏の暑さの不快感を緩和するのに有効だということが示されている。
また、夏に限らず晴れた日には公園や緑地に行き、太陽の光を浴びると気分が晴れる。草木の香りでリラックスし、風を感じて気持ちをリセットする。何も目的がなくても良いし、特にルールはない。子供から大人、お年寄りまで様々な人々がスローな時間を過ごすことができるのである。（fig.7）「都市の広大なヴォイド」はその街の縮図である。

おおまかに「都市の広大なヴォイド」の意義を述べたが、環境共生/食料生産/心身の源の三つに共通するのは、「流れる時間/サイクル」であると考えている。様々な時間が短縮されていく現代社会の中で、譲らずにその時間を保っているのである。季節という時間のサイクル、種蒔きから収穫へのサイクル、ゆったりと縛られない自由な時間といった具合に「都市の広大なヴォイド」に流れている時間はこの先も変わることがないだろう。それ故に誰もが求める不可欠な存在なのである。

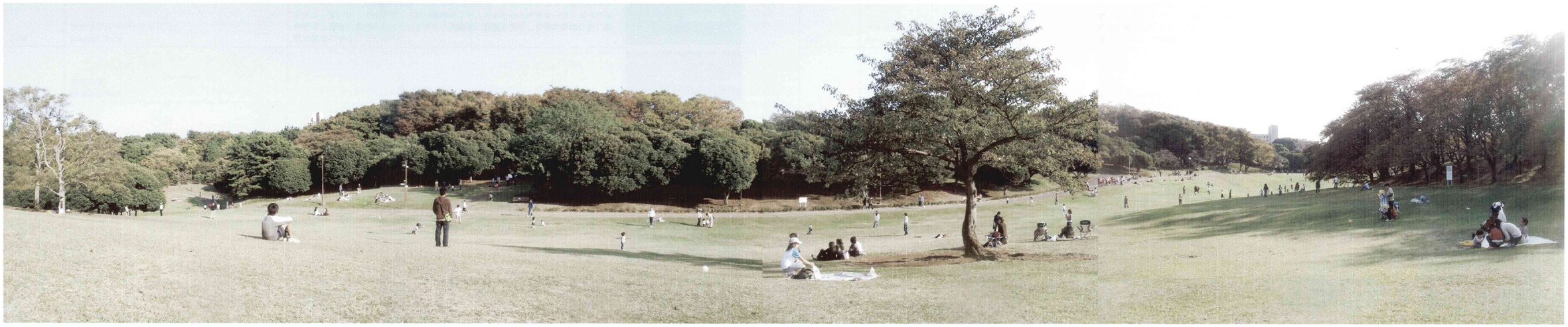
■緑視率による心理効果（fig.6）







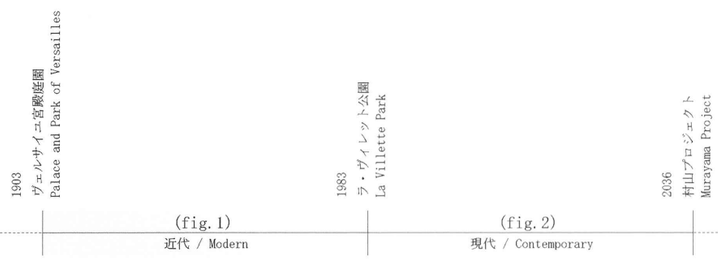
■休日の公園（fig.7）



-都市公園の歴史と変遷-

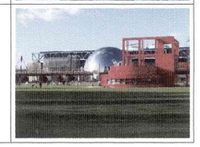
「都市の広大なヴォイド」で定義した中の都市公園についてその歴史を探ってみたい。この研究の目的は未来の都市公園の在り方を考えることであり、その歴史を把握することは非常に重要である。なお、概略年表に示すのは近代都市の中で人間がつくった公園とその成立に関わるものであり、古代ギリシャのアゴラやアメリカのイエローストーン国立公園等は含まないこととする。(fig.1)また、近代の流れを受けた現代都市における都市公園の試みは次ページに示した。(fig.2)

『公園(park)という言葉の語源を遡ると、フランス語の「parc」に、さらに中世ラテン語の「parricus」に行き当る。これは遊牧場などを示すもので、ここからくる「park」は、本来王室所有の狩猟場を意味した。これをよく表すものとして、元はイギリス王室の狩猟場で、その後一般開放されて初期の公園の一つとなった「ハイド・パーク」などがある。
近代的な都市型公園の基礎となる庭園形式がフランスやイギリスに成立するのが、17世紀あたり、公園を含んだ近代都市が整備されはじめるのが19世紀半ば頃である。以降、近/現代史の流れに沿って多くの公園が生み出されてきた。20世紀に作られた公園には、万博やオリンピックの跡地、ゴミ埋立地や産業施設跡など、人類の施しが生んだ跡地を公園にしたものが多数見られる。』(quo.1)



■都市公園概略年表-近代(fig.1)

年代 / year	都市型公園 / urban public park	備考 / remark	写真 / photo
1665	Paris(France) ヴェルサイユ宮殿庭園 Palace and Park of Versailles	近代都市型公園の起源の一つで設計は造園家ル・ノートル。平たい土地に軸線を引き、広場や噴水、木立、水路などを幾何学的に配置している。以後この庭園形式を「フランス式庭園」と呼び、ヨーロッパ中の庭園がこれを模した。強い軸線などは都市計画にも影響を与えた。	
1714	Birmingham(United Kingdom) ストウ・ガーデン Stowe Garden	近代都市型公園の起源の一つロンドンのストウ園。設計はチャールズ・ブリッジマン。幾何学的デザインのフランス式庭園に対し、ありのままの風景を生かして作庭する。これは「イギリス式庭園」と呼ばれ、フランス式と共に後の欧米の庭園、公園の礎となる。	
1835	London(United Kingdom) ハイド・パーク Hyde Park	16世紀以降英国王室の狩猟場であったハイド・パークが一般公開され、人々に憩いを提供する場所になった。公園のレイアウトは建築家デシマス・バートンによる設計が元になっている。	
1850	New York(United States) セントラル・パーク Central Park	ニューヨークの人口増加が加速しはじめた1950年頃、ジャーナリストで詩人のウィリアム・カレン・ブライアントが、都市にこそ人々がくつろげるオープンスペースが必要と提唱し実現に至った。イギリス式庭園に影響を受け、自然の景観に近い風景が都市の中心につくられた。	
1873	浅草公園 Asakusa Park Tokyo(Japan) 芝公園 Shiba Park 上野恩賜公園 Ueno Imperial Park 深川公園 Fukagawa Park 飛鳥山公園 Asukayama Park	日本における公園の始まりとされる太政官布告が出される。これにより当時の各府県が公園に相応しい場所を選ぶこととなった。東京では浅草寺に浅草公園、増上寺に芝公園、寛永寺に上野恩賜公園、富岡八幡宮に深川公園、飛鳥山に飛鳥山公園が選ばれ、公園地となった。古くから桜の名所だった飛鳥山以外は神社の境内である。	

年代 / year	都市型公園 / urban public park	備考 / remark	写真 / photo
1903	Tokyo(Japan) 日比谷公園 Hibiya Park	幕末までは佐賀鍋島家、萩毛利家などの上屋敷が置かれており、明治時代には陸軍近衛師団の練兵場となっていた。本多静六らの設計でここに日本初の西欧風近代都市公園が完成した。	
1930	Tokyo(Japan) 元町公園 Motomachi Park	1923年の関東大震災の教訓を元に、災害時の避難所の役割を果たす「震災復興小公園」が各地に(東京には52ヶ所)つくられた。文京区の元町公園はその52の小公園のうちの一つで、今なお原型をよくとどめている唯一の例である。他はすべて戦後の再開発で激変したり消滅してしまった。面積はわずか0.35haだが、傾斜地をうまく利用して、リズミカルな階段、盲アーケードの壁、藤棚、砂場、すべり台が備わり、８０年前の東京では大変モダンな造園であった。この公園も現在は役所の計画によって危機にさらされている。	
1960年代	Portland(United States) ラブジョイ広場 Lovejoy Plaza	アメリカのランドスケープデザイナー、ローレンス・ハルプリンによる設計。自然地形を造形的に取り入れた、現代の公園デザインにも引き継がれる公園を完成させた。ここポートランド・センターの空間構成の根本的な問題点を補っているかのように潤いの要素が溢れている。	
1967	New York(United States) ペイリー・パーク Paley Park	高層建築の谷間の貴重な空間に、落水による光の変化と冷気、騒音を消す心地好い水音、適切な環具や植栽の選定と配置が、休憩・語らい・読書等、快適な時間を提供している。ニューヨークではこのペイリー・パークがきっかけとなり、様々な場所で「ポケット・パーク」がつくられていった。ベストのポケットほどの大きさの小さな公園、というところからその名がついた。また、日本では80年代後半から「児童公園」として増殖していった原型でもある。	
1970	Nevada(United States) ダブル・ネガティブ Double Negative	マイケル・ハイザーがここネヴァダ州に完成させたもので、木、土、鉄、石など自然素材を用いて大地そのものを造形するランドアート、アースワークというジャンルの代表作。これに先立つ動きは、30年代に「プレイ・マウンテン」を提唱したイサム・ノグチなどにも見られるが、60年代後半から70年代にかけて急速に台頭した。	
1972	Osaka(Japan) 大同生命本社ビル Daido Life Insurance Company Head Office	アトリウムに木々や植物を植栽し、近代的なオフィスビルの中に森を出現させた。同様の動きは、ニューヨークの「IBM本部ビル:1983年」に代表され、80年代のアメリカに多く見られた。	
1983	Paris(France) ラ・ヴィレット公園 La Villette Park	20世紀が残す「21世紀の都市公園」をテーマにコンペが開催され、勝ち抜いたバーナード・チュミの案が実現に至った。35haの敷地を、科学産業都市や音楽都市の機能を備えた公園にするのが前提条件であったが、公園を通じてエリア全体の活性化を図るのが目的であった。	

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-2.2
History Transition of Urban Public Park

20世紀以降の公園コンペの中でも最大規模であったラ・ヴィレット公園。このプロジェクトから現在に至るまでの都市公園の実現例や計画案の中で、時代背景などから新しい試みと考えられるものを抽出し、以下に示す。(fig.2)

都市公園が現代的な試みへと移り変わっていく過渡期として代表的な計画はやはり、ラ・ヴィレット公園のコンペであった。中でもレム・コールハースの提示した、まるで錯乱する都市での予測不可能な体験の縮図とも言える、混迷に満ちた案は現代における都市を如実に表すこととなったのではないだろうか。(この事項については後ほど詳しく分析を行う)
このラ・ヴィレット公園以降の都市公園は、近代とは異なる思考や背景を持っているものが多いように思う。一概には言えないのだが、断片的に見ると都市公園が単に都市の中での枠組みから逸脱しているのではないかと考える。例えば地球規模での環境問題を背景として抱えているものや、市民や住民といった極めて個人レベルである意味不法占拠的に公園をつくり上げていくなど、その根本にある思考の幅は大幅に拡大したのである。また、公園と建築、つまり外部空間と内部空間とのあり方や関係性に従来とは違う試みが成されたことも重要な事項である。このように現代における都市公園の在り方は抱える背景が多様であるだけでなく、建築との新しい関係性へとつながる可能性を秘めているのである。

1903
ヴェルサイユ宮殿庭園
Palace and Park of Versailles

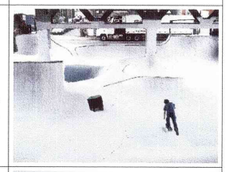
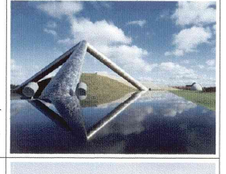
(fig.1)
近代 / Modern

1983
ラ・ヴィレット公園
La Villette Park

2036
村山プロジェクト
Murayama Project

(fig.2)
現代 / Contemporary

■都市公園概略年表-現代(fig.2)

年代 / year	都市型公園 / urban public park	備考 / remark	写真 / photo
1993	Portland(United States) バーンサイド・スケートパーク Burnside Skatepark	ポーランドのバーンサイド橋の下に、スケーター達が土地の所有者に無断で寄贈された材料のみでつくったスケートボードパーク。すぐにスケートボーダーの間での口コミが広がり、他の州からもスケーターがやってくるようになる。その後ポーランド市もこの施設の使用許可に同意するに至った。	
1995	Gifu(Japan) 養老天命反転地 Site of Reversible Destiny-Yoro	荒川修作(アーティスト)とマドリン・ギンズ(詩人)が計画し実現に至った公園。彼らはここを「体の中に眠る感覚を呼び覚ます、人間の感覚を刺激する装置」と呼んでいる。園内には常識を覆す様々なしかけが施され、予想もつかなかった風景に遭遇する。都市部から離れた場所にありながら毎年10万人近くが訪れている。	
2002	Yokohama(Japan) 横浜港大さん橋国際客船ターミナル Osanbashi Yokohama International Passenger Terminal	国際コンペを勝ち抜いたイギリスの建築家ユニットfoaによる設計。ウッドデッキが連続して床、壁、屋根へと変化していく自然地形のような造形であり、屋根のところどころが緑化されている。まさに公園となる屋上を主役にデザインされた建築である。	
2005	Aichi(Japan) 愛知万国博覧会会場構成(計画) Aichi expo venue composition(Project)	建築家隈研吾による会場構成案である。パビリオンが建ち並ぶ従来の会場ではなく、公園だけを用意して得るべき情報は電子ゴーグルから得る。建築の隙間に公園があるという常識を覆した新世紀らしい案であったが、実現には至らなかった。	
2005	Sapporo(Japan) モエレ沼公園 Moerenuma Park	モエレ沼公園は、「札幌市環状グリーンベルト」構想の北部系緑地の核となる都市公園である。ゴミ処理場として利用した後、1982年から公園造成を開始した。1988年には、彫刻家イサム・ノグチが計画に参画。ノグチによる、「公園をひとつの彫刻」とするダイナミックな構想により造成が進められ、2005年7月1日にグランドオープンした。 イサム・ノグチがデザインした120基以上の遊具のある7ヶ所の遊具エリアや、石狩平野を囲む山脈を一望できる、高さ50mのモエレ山や30mのプレイマウンテンがあり、スポーツ施設としては、15面のテニスコートに野球場、陸上競技場、イベント施設では、野外ステージやミュージックシェルなどがある。	
2006	Chiba(Japan) さくら広場 Sakura Plaza	幕張新都心に松下電器産業が所有していた3.2haの土地を一般に公開する広場として開園した。噴水のある池に向けて土地にかすかな傾斜がつけられ、505本のソメイヨシノが縦横6.5mの等間隔で植えられている。環境問題に対する人々の意識を高めるという目標が計画の背景としてある。	

年代 / year	都市型公園 / urban public park	備考 / remark	写真 / photo
2007	Fukuoka(Japan) アイランドシティ中央公園中核施設 ぐりんぐりん Island City Central Park Core Institution	博多湾に浮かぶ人工島、アイランドシティ内の総合公園で2005年に開催された「アイランド花どんたく」のメインパビリオンとしても使用され、イベント終了後、公園の事務所などを収める中核施設として再オープンした。屋上緑化された屋根面が緩やかに起伏しながら建築内部空間を形作っている。埋立地による平らな土地に新しい地形をつくっている。	
2007	Madrid(Spain) ポルトガル・アベニュー Avenida de Portugal	現代ランドスケープ界で活躍しているオランダのWEST8の設計で完成した。マドリッド市の中心部を走る、高速道路8車線と駐車場とが収まる長さ2kmほどの上部を公園にしたもの。地面に桜模様を描いているのは長く連なるベンチであり、道沿いには700本の桜が植えられている。	
2008	Tokyo(Japan) 福生市庁舎 Fussa City Hall	東京都福生市の新市庁舎で、土地の余裕がない都市部にうまく公園スペースを取り入れている。市民に開放される地上階の屋上部分を敷地いっぱいに引き延ばして緩やかな起伏をつけながら地上まで下ろして、街とつなげている。	
2004-	London(United Kingdom) ゲリラ・ガーデニング Guerrilla gardening	イギリスロンドンに住むリチャード・レイノルズ(サラリーマン)氏がアパートの一角に誰も手入れをしていないプランターを見つけ、それを「庭」にしたことがきっかけである。それ以来彼は仕事帰りに誰からも忘れられたスペースを見つけては、草や花を植えていた。その活動に賛同する人が急増し、現在は二千人以上のメンバーがいる。	
2005-	San Francisco(United States) パーキング Park(ing)	サンフランシスコを拠点にするクリエイター集団が2005年に始めたプロジェクトで、コインパーキングをパークにするというヒネリの利いたプロジェクトであるパーキングメーターにコインを投入したら、芝生を敷いて、ベンチを運び、植木を持ち込んで公園空間を一時的に楽しむというものである。彼らは現在世界を視野に活動している。	
2006-	Tokyo(Japan) 村山プロジェクト Project Murayama	日産工場村山の閉鎖に伴ってその跡地を購入した宗教団体真如苑が、自然環境の回復・再生に取り組み、さまざまな施設をつつみこむ豊かな自然環境が持続性をもって維持できる空間を創出しようとはじめた計画で、真如苑の教団行事のほかに、市民との交流、宗教・宗派を超えた交流、国際交流、文化事業の実施などを通じて、聖なる空間を生みだしてゆくとともに、地域社会の豊かさの向上に寄与し、人々の心休まる開かれた空間となることを目指している。その空間デザインの専門家としてCAt(小嶋一浩+赤松佳珠子)が参画している。	

: CAPTION
fig.2:BRUTUS No.622 2007年8月号 P.37 参考

-ラ・ヴィレット公園-

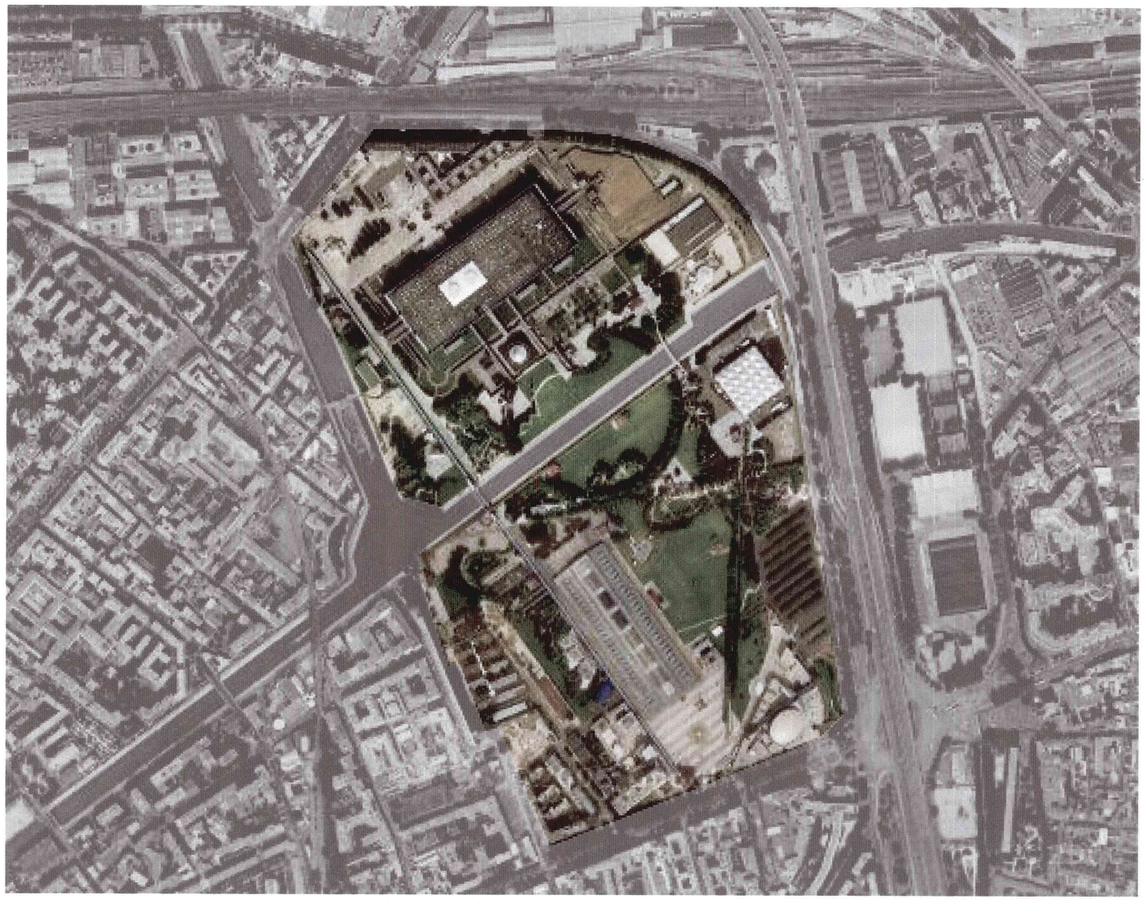
前項でも述べた通り、1983年のフランス、パリにおけるラ・ヴィレット公園のコンペは20世紀末に相応しいまさに、「21世紀の都市公園」をテーマとするものであった。世界中の建築家や造園家が挙って先鋭的な思考で都市公園というものを提示したのである。参加者471チームの中で選出された一等案であるベルナール・チュミの提案は実現し、コンペから24年が経過した現在、色鮮やかな赤いフォリーは成長した木立ちに囲われパリの風景のひとつになっている。

＜骨格とディテール＞

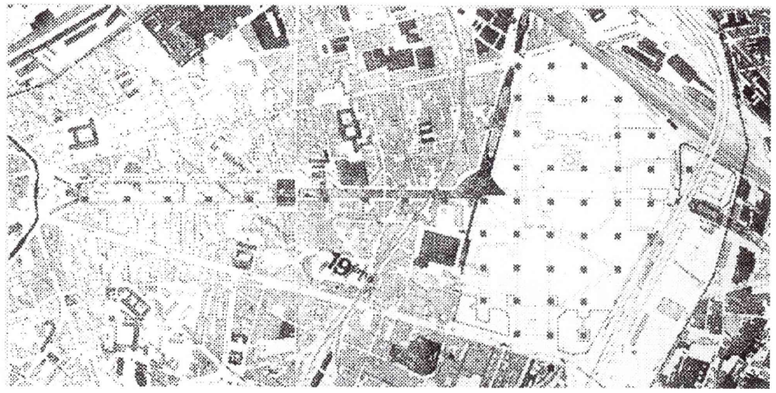
このコンペにおいて重要であったのは、「21世紀的な都市公園」、それは公園そのものの存在理由を問われるものであった。近代の都市公園は構築された都市に非・構築的な空間(しばしばそれは「自然/田園」というロマンティックな言葉で記述された)の広がりを確保するという意義を負ってきた。建築に対する非・建築空間、公害に対する健康、人工に対する自然、公園はその時代の構築の象徴の裏返しとして、自然を後ろ盾に、具体的な手法として庭園の言語をそのまま転用しながら、その時代に何を“つくらないこと”が都市を救うかという、都市を映す「鏡」であり続けた。チュミのコンセプトは、こうした「建設しないことを建設する」という公園の本質的な虚構性を、建築的な手法で明らかにしたといえる。
その手法とは都市スケールの支配と細部を押さえ、その間の空間を自然に任せるというものである。骨格とディテールの決定によってランドスケープを構成するという手法は、その後のランドスケープ・デザインに多くの影響を与え続けている。(quo. 1)

チュミの行った手法は前項において現代的な都市公園に見られる傾向と重なる。それは錯乱する都市の不確定さを受け入れる為の戦略である。
骨格とディテールのみを提示することで、急激に移り変わる都市と頻繁なプログラムの変更や施設の追加に対応することができるのである。それはまさにコンピュータエイジの都市プログラムが再構成されたかのようである。点という物質のシステムを表す赤い配列されたフォリー、線という動きのシステムを表す東西と南北の2本の回廊や曲がりくねった園路、面という空間のシステムを表すオープンスペース、これらが敷地全体をカバーする緑地に必要に応じて重ね合わされることで、不確定かつ非形式的な空間を作り出すのである。

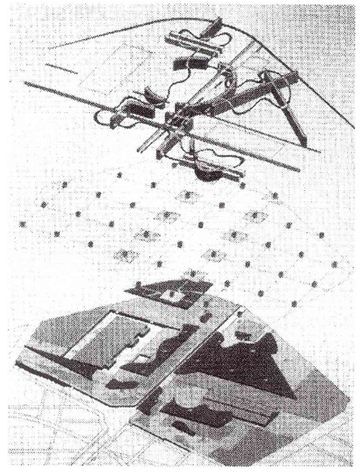
■ラ・ヴィレット公園



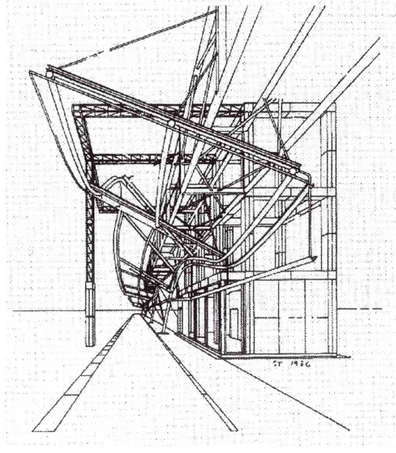
■骨格:配置(fig. 1)



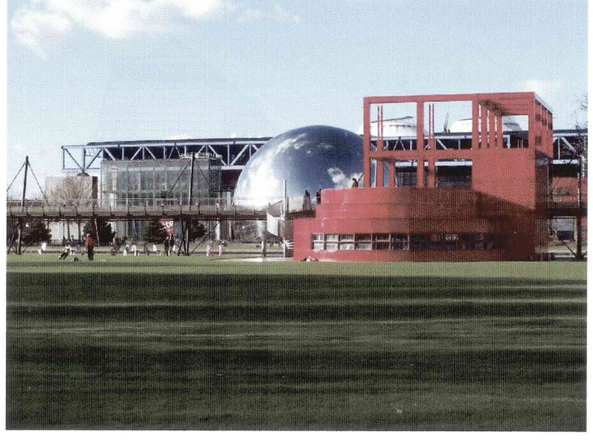
■ｽｰﾊﾟｰｲﾝﾎﾟｼﾞｼｮﾝﾀﾞｲｱｸﾞﾗﾑ:骨格(fig. 2)



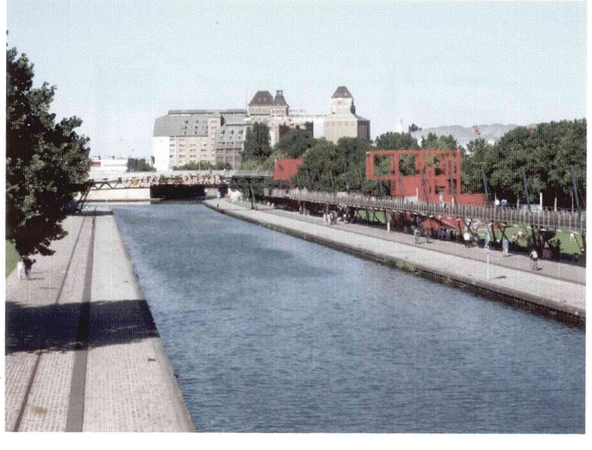
■フォリーのドローイング:ディテール(fig. 3)



■シテ科学産業博物館



■公園を横切る運河



: CAPTION

quo. 1:「建築文化」Vol. 55 No. 649 2000年11月号 P. 58, 59 抜粋(一部参考) / fig. 1, 2, 3:「建築文化」Vol. 55 No. 649 2000年11月号 P. 59

＜レム・コールハース案＞

都市の悩ましさ、憂鬱さ加減を連ねるコールハースの論文、建築・都市計画は、率直であり、「正論」に値するだけの力を持っている。その口調は常にラディカルであり挑発的ではあるが、しかし的を得たものであり、反論を呑み込むだけの思慮に満ち溢れている。それが極めて分かりやすく提示されたのが、このラ・ヴィレット公園の計画案である。この世界は普遍的ではなく有限であるとしつつ、しかしながらこれを諦念とはしない。有限の積層で生み出される状況が、不確定な虚構群として現実に存在していくものと位置づけさせるのである。

“As the diagram reveals, the site of la villette is too small, and the program too large, to create a park in the recognizable sense of the word.”

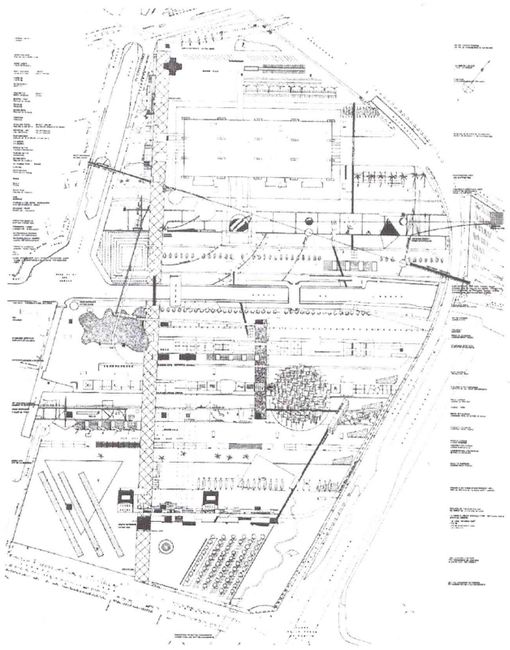
“図が示すようにはっきり「公園」と呼べるものを作るにはラ・ヴィレットの敷地は小さ過ぎ、一方で要求されたプログラムは大き過ぎる。”（fig.4）

このような書き出しで始まる設計主旨は、かつてマンハッタンの摩天楼を挑発したル・コルビジェの「三百万人の現代都市」を想起させる。奇しくも、現状・開発フローに疑問を投げかけつつ実現しなかった点も同じである。（fig.5）しかしながらコールハースのラ・ヴィレットは、現在の私たちの意識の中にまだ生きている。当時、幻の当選案ともされたコールハース案であるが、チュミの計画が実現のものとしてかの地に存在する今となっても、コールハースの企てたレイヤーをラ・ヴィレットに重ね合わせる野望を持った視線は絶えることなく注がれている。なぜなら、それは最初からリアルであり、同時にフィクショナルであったからで、故に24年経った今でも継続的に有効なのである。（quo.2）

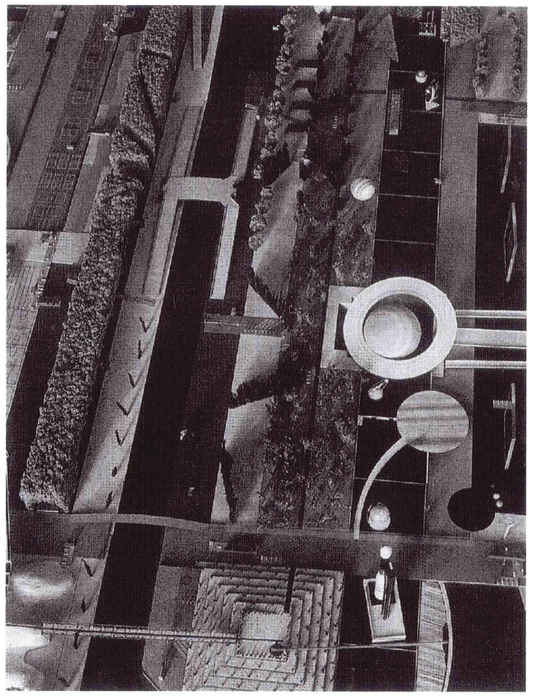
コールハースの提案は公園としての形態的な提案ではなく、不確定な虚構群を広大な敷地に組み込む為の戦略であった。その戦略は4つの異なる層の重ね合わせである。「The Strips/縞：敷地全体を東西方向のバンドとして分け、それぞれに公園としての主要なプログラムが配置される層」（fig.6）、「Point Grids, or Confetti/ポイント状グリット、または紙吹雪：比較的小規模なプログラムが、グリット状の点として散りばめられる層」（fig.7）、「Access and Circulation/アクセスと動線：園内の主要な動線である大通りと散策路を配置した層」（fig.8）、「The Final Layer/最終レイヤー：数学方程式ないしひとつのシステムに載せるには特徴があり過ぎる、もしくは大き過ぎるプログラムを配置した層」（fig.9）の4つの層で構成される。これらは自然、建築、サーキュレーションなどの異種の要素が等価に、そして同時に扱われている。4つの層はそれぞれが全く異なる方法で無機質に、まるで機械によって自動的に決定されたかのように散りばめられ、重ね合わされる。そして提示されたダイアグラムには平面、立面、アクソメなど異種の記述法が共存していることでより混迷に満ちたものになっている。（fig.10）

「われわれはデザインされたランドスケープを考案したいという意識が全くない。妥協や繰り返しや矛盾を伴うことなく、次々と新たに生まれる意味、増大、新しい意図を吸収することのできる枠組みをつくることに徹した。シンプルさの上に冒険性をプレゼントとして置くこと、それがわれわれの戦略である。」とコールハースは述べ、現代都市構造のように次々と生まれ、変更され続けることが可能な公園こそが21世紀の都市公園であると示している。

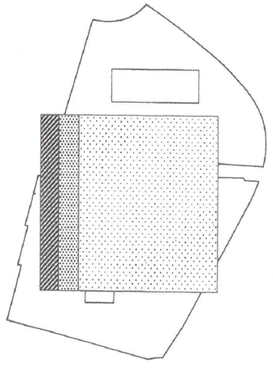
■ダイアグラム（fig.10）



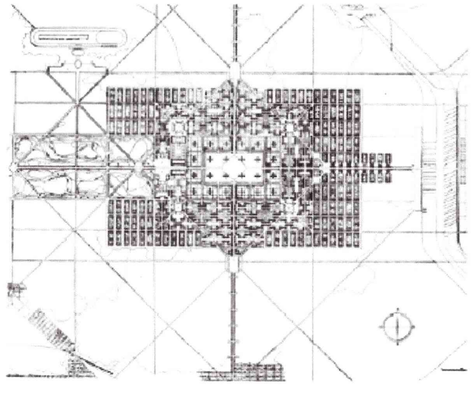
■模型写真（fig.11）



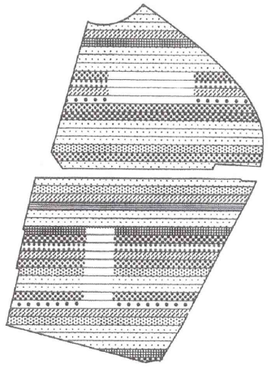
■要求されたプログラムに必要な面積（fig.4）
［建築部分/屋根つき部分/屋外部分］



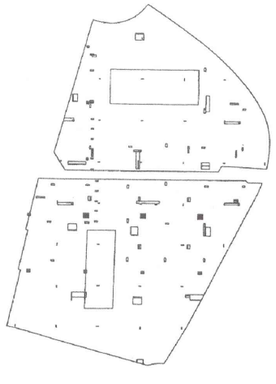
■三百万人の現代都市（fig.5）



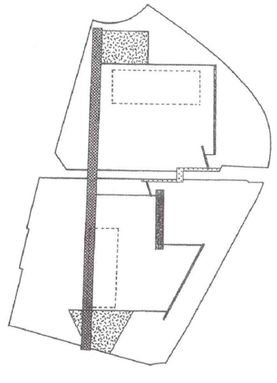
■縞（fig.6）



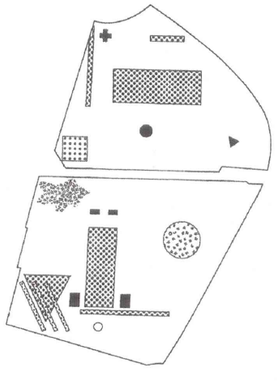
■ポイント状グリッド（fig.7）



■アクセスと動線（fig.8）



■最終レイヤー（fig.9）



: CAPTION

quo.2:建築文化 Vol.55 No.649 2000年11月号 P.63 抜粋（一部参考） / fig.4,6,7,8,9,10,11:「S,M,L,XL」レム・コールハース,ブルース・マオ 1995年 / fig.2:三百万人の現代都市（ル・コルビジェ）

-未来の都市公園とは-

＜バーナード・チュミ/レム・コールハースが示したこと＞

次代を担う都市公園とは一体どのようなものなのだろうか。それはかつて人間が求めてきた自然らしい自然をつくりあげることではない。これはラ・ヴィレット公園のコンペが証明している。チュミ、コールハースの両案に共通したのは、活動を想定する場として空間を決定するのではなく、予測不可能な行事や出来事を誘発し得る仕組みをつくったことである。チュミは、偶然の出来事に遭遇する都市の現実を、点、線、面の重ね合わせによって生じる多様な組み合わせで表現した。そうすることで例えば、ジャズバーのフォリーと園路が2階部分で交差し、ジャズの演奏中にジョギング中の人が目の前を横切る、といった偶然の出来事が起こるよう期待した。一方、コールハースは、畑作、釣り、乗馬、凧揚げといった自然を対象とする様々な体験を帯状に連続させ、敷地いっぱいに並べた。そうすることにより、トラクターで畑を耕している横ではプールで水泳を楽しむ風景が、さらにその横では丘の上で凧揚げを、といった異種体験が隣接する状況が生じることを期待した。これはオフィス、バー、ボクシング・ジム等の異種空間が鉛直方向に積層するマンハッタンの超高層ビル群から想起された形である。この両案から学ぶことは、あらゆる関係性や状況、つまり予測不可能な出来事を都市公園という舞台で生み出そうと試みたことである。公園という空間はおそらく、他のどんなビルディング・タイプの空間よりも、不確定な機能を許容できる。特定のルールもなければ、建物という物理的な制約も持たない、実に自由な虚のビルディング・タイプである。この不確定さを積極的に捉えることで、都市のあらゆる年齢、階層、種類の人々を内包できる場所になり、それらが混ざり合い、予測不可能な出来事が起こり得るのである。

このようにチュミやコールハースが提示した、都市公園という舞台に都市に溢れる多様な価値を投影し、様々な出来事を誘発させるという概念は、21世紀を迎えた現在も私達を魅了し続けている。しかしながらチュミが実現させたラ・ヴィレット公園は、確かに園路をジョギングをしている人とフォリーでジャズを演奏している人が交錯するという両者にとって予測不可能な出来事は起こり得るものの、所詮は「あちら側」と「こちら側」という空間認識は否めない。コールハースの計画案もしかりである。見る見られるというこのような関係が良くないと言っているのではなく、両者が共存する、「ここ」という場所を獲得することで予測不可能な出来事はより起こりやすくなるのではないだろうか。そこには見る見られる関係を超えた実感としての関係性を期待できると考える。

＜接縁という概念＞

両者が共存する場とはどういった場であろうか。それは、異種空間の接するところ、つまり両者の境界にある。この境界が互いの要素を孕み、両者が共存した際にはじめて予測不可能な出来事は発生するのではないだろうか。先ほどのラ・ヴィレット公園の例を挙げるならば、ジョギングしている人とジャズの演奏をしている人が共存できる場所をつくることで、ジョギングしている人はそこに一時的に佇んでジャズの演奏を聞いていくかもしれないということである。

このような異種空間の接する境界に「接縁」という概念がある。詳しくは第4章の設計趣旨で論じることにするが、私は未来の都市公園をこの「接縁」という境界を思考することで試みることにする。

第3章　深谷通信所

-深谷通信所の歴史-

深谷通信所は横浜市泉区(当時の戸塚区)のかつて、旧日本軍の通信施設として使用されていた場所である。直径1kmにも及ぶきれいな円弧を描いているこの敷地境界線はおそらく電波の送受信障害が及び得る範囲からきているが、通信施設自体は敷地中心にこじんまりと佇んでいる。戦後この場所が米海軍に接収されてからも、その広大な敷地はかなり多くの面積を持て余していた。その後、市民の要望によって徐々に敷地内の土地利用が許可されてきた。

一方で通信所の敷地周辺は戦後、次々に住宅が建ち並んでいく。それは同時に、通信所の境界線をよりはっきりさせてきた。

■深谷通信所の変遷(quo. 1)

昭和20年09月02日　旧日本軍の通信施設が米海軍により接収された。

昭和45年12月01日　施設内の土地(164, 000㎡)が耕作地として現地司令官より、使用許可された。
また、この頃に施設内の土地一部が野球場としての使用が認められた。

昭和51年09月27日　広域避難場所に指定された。

昭和54年11月25日　通信所周辺のテレビ受信障害防止事業実施のため、汲沢地区第一テレビ共聴組合が設立された。
続いて、中田地区共同受信組合(昭和54年)、大正地区テレビ共聴組合(昭和56年)、下和泉テレビ共聴組合(昭和57年)、泉ヶ丘地区テレビ共同管理組合(昭和58年)が設立された。

昭和58年03月15日　コミュニティ共用施設新生会館(戸塚区汲沢町)が、防衛施設周辺民生安定施設整備事業による国庫補助を受けて完成した。

昭和60年02月14日　テレビ共聴組合の運営等について、共聴組合と関係機関との第一回連絡会議が開催された。

昭和63年12月09日　県道阿久和鎌倉線の全面補修工事が完了した。

平成02年09月28日　農耕のための施設内土地の使用に関する覚書が在日米海軍と耕作者代表との間で締結された。

平成04年12月17日　日米合同委員会において、県道阿久和鎌倉線の歩道設置のための共同使用が合意された。

平成06年10月31日　県道阿久和鎌倉線の歩道が完成した。

平成07年09年21日　日米合同委員会において、施設内の地震対策用防火水槽設置のための共同使用が合意された。

平成08年03月29日　施設内の地震対策用防火水槽の設置工事が完了した。

平成14年10月23日　日米合同委員会において、防犯灯設置のための共同使用が合意された。

平成15年05月23日　防犯灯設置のための共同使用について内容の変更申請を行った。

平成16年10月18日　日米合同委員会において、返還の方針が合意された。

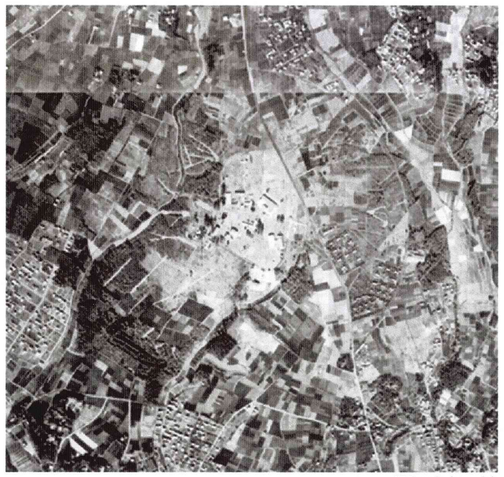
平成17年01月13日　日米合同委員会において、防犯灯設置のための共同使用について内容の変更が合意された。

平成17年08月31日　施設内の防犯灯の設置工事が完了した。

■深谷通信所の変遷(fig. 1)

昭和22年(1947年)

昭和52年(1977年)


昭和39年(1964年)

昭和63年(1988年)

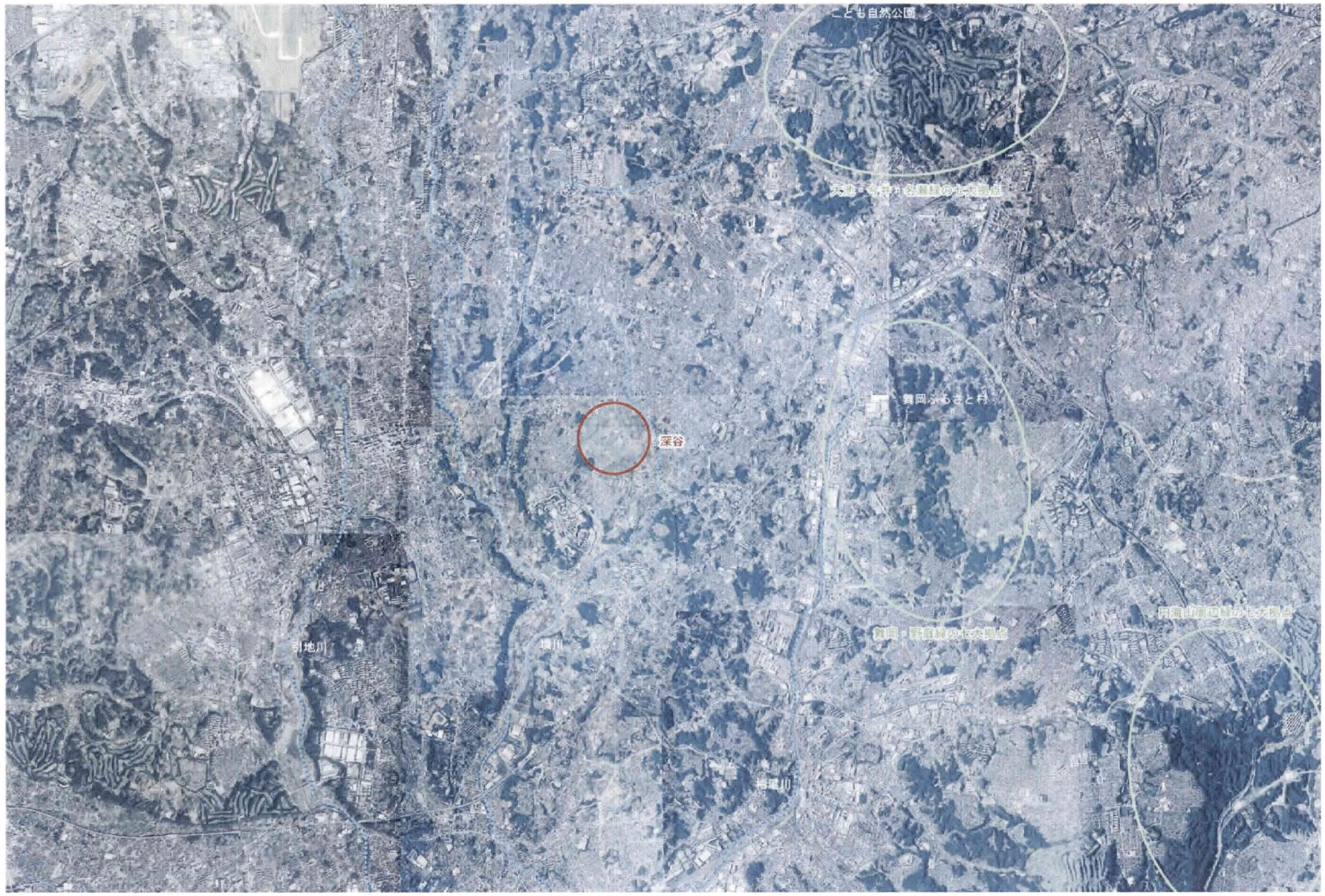
昭和47年(1972年)

平成9年(1997年)

-深谷通信所の現状-

＜広域的な位置づけ＞

広域的な緑地という観点からみると、横浜市の「緑の七大拠点」の空白地に立地していることが分かる。このことから、敷地内に残された緑地は貴重である。また、計画により一部を緑地として還元していくことも可能である。

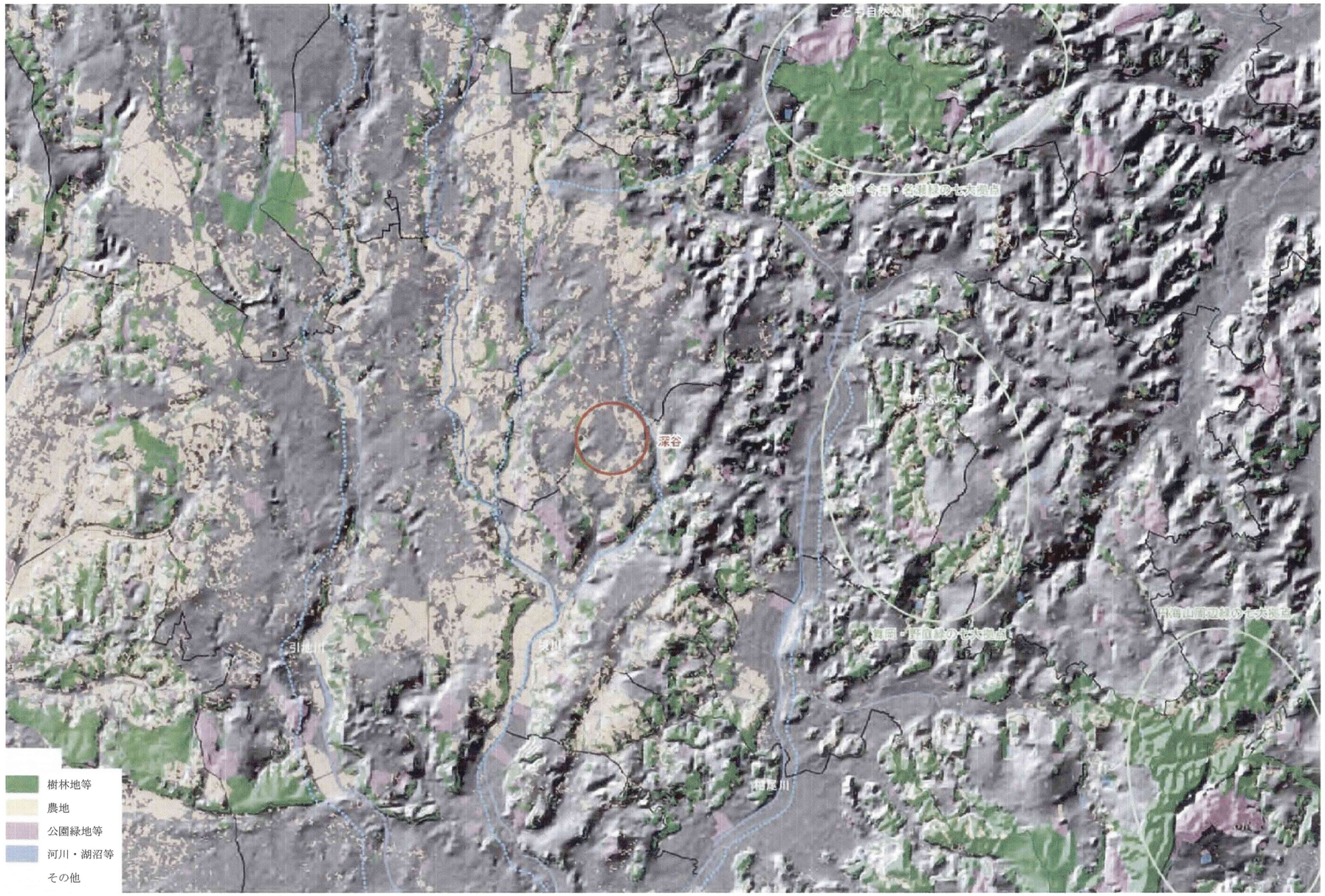


■深谷地区(fig. 1)

: CAPTION
fig. 1: 平成18年度国土施策創発調査より

＜地形陰影と土地利用＞

地形はほぼ平坦であり、大半が人工草地から構成されている。
また、周辺地域には大規模な公園緑地がなく、前述したような緑の七大拠点の誘致圏から見ても、空白地帯に位置していることが分かる。

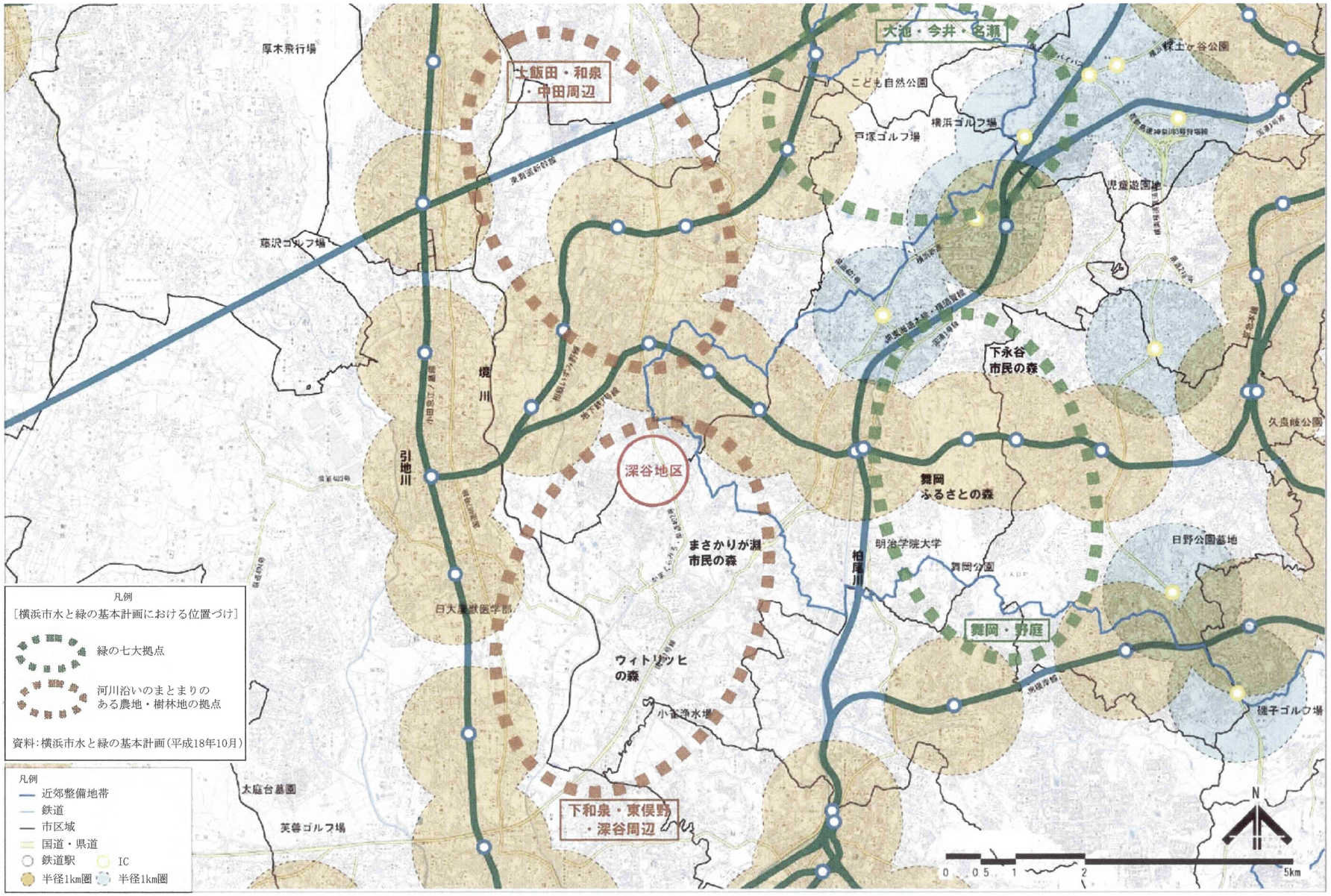


■地形陰影と土地利用(fig.2)

: CAPTION
fig.2:平成18年度国土施策創発調査より

＜鉄道・広域幹線道路からのアクセス＞

広域幹線道路や鉄道が近くを通っていないので、アクセス性は不良である。しかし、県道402号道阿久和鎌倉線は通信所を通っているため、車やバスを利用すればスムーズなアクセスが可能である。

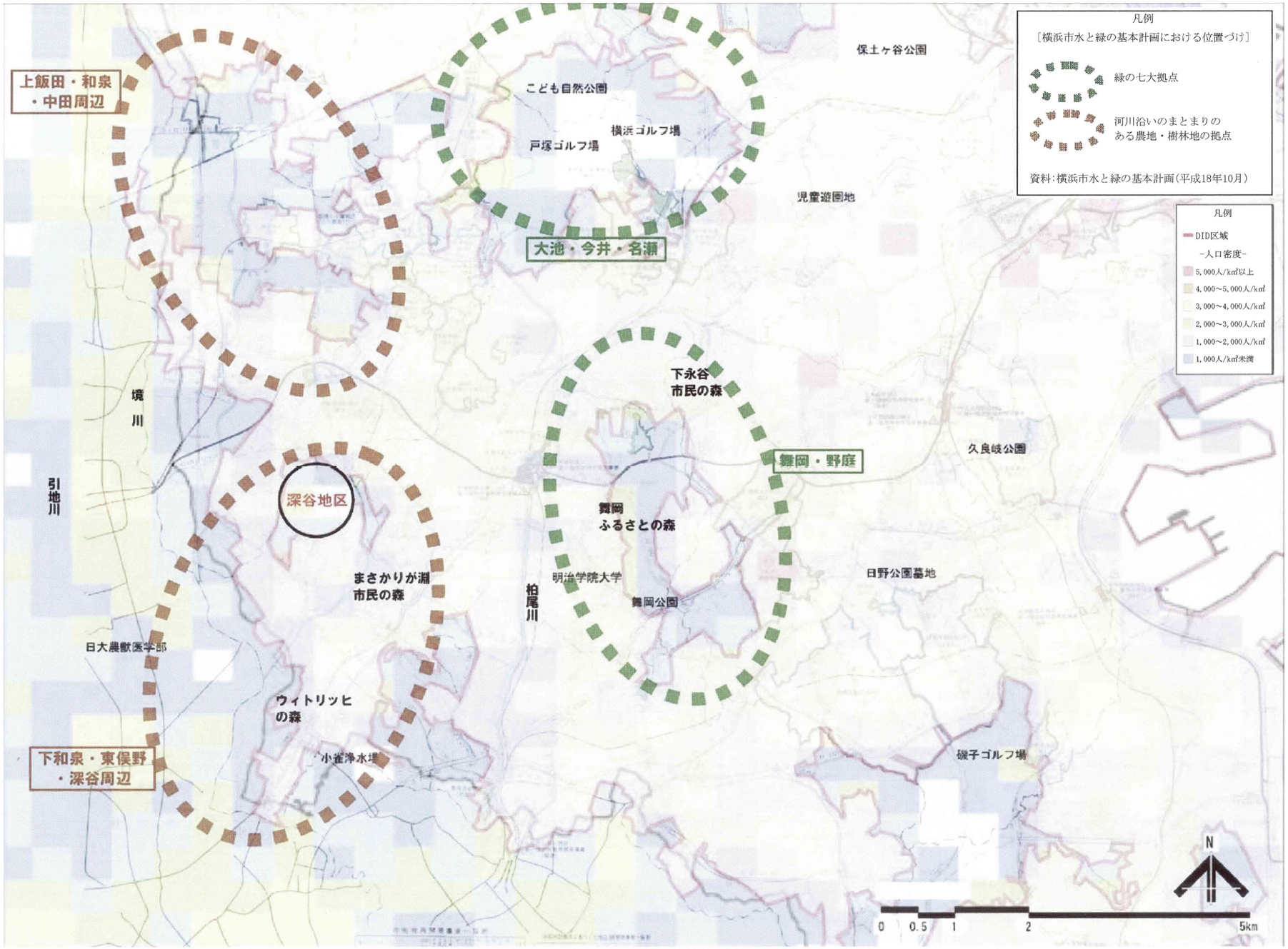


■鉄道・広域幹線道路からのアクセス（fig.3）

: CAPTION
fig.3：平成18年度国土施策創発調査より

＜DID地域と人口密度分布＞

深谷地区周辺は市街化調整区域も広がるが、いずれもDID地区（＊1）であり、比較的密集型の低層市街地が形成されている。



■DID地域と人口密度分布（fig.4）

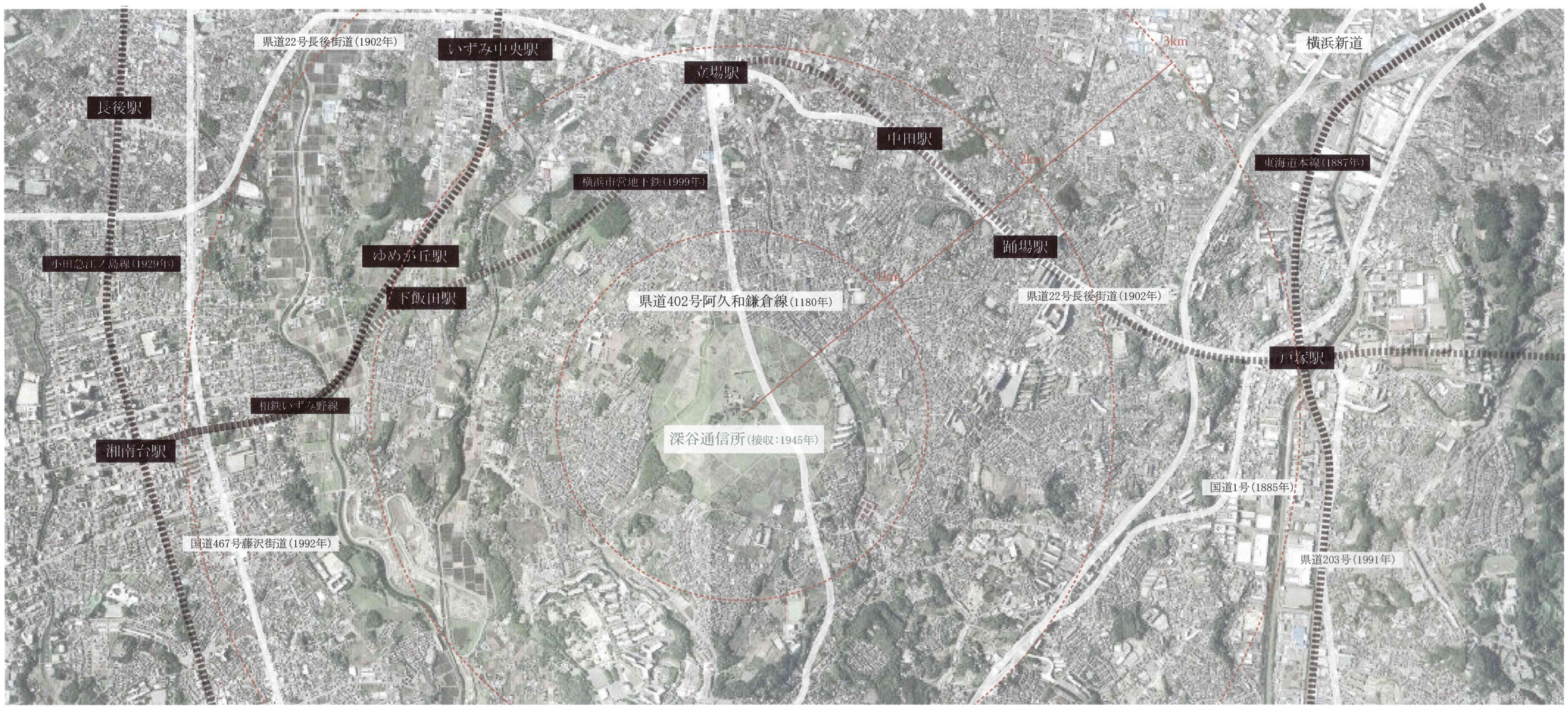
: CAPTION

fig.4：平成18年度国土施策創発調査より ／ ＊1：DID地区とは「DENSELY INHABITED DESTRICTS」の略で人口集中地区を意味する。原則として人口密度が4千人/平方キロメートル以上、かつ合計常住人口5千人以上の地域をいう。

＜周辺の交通網＞

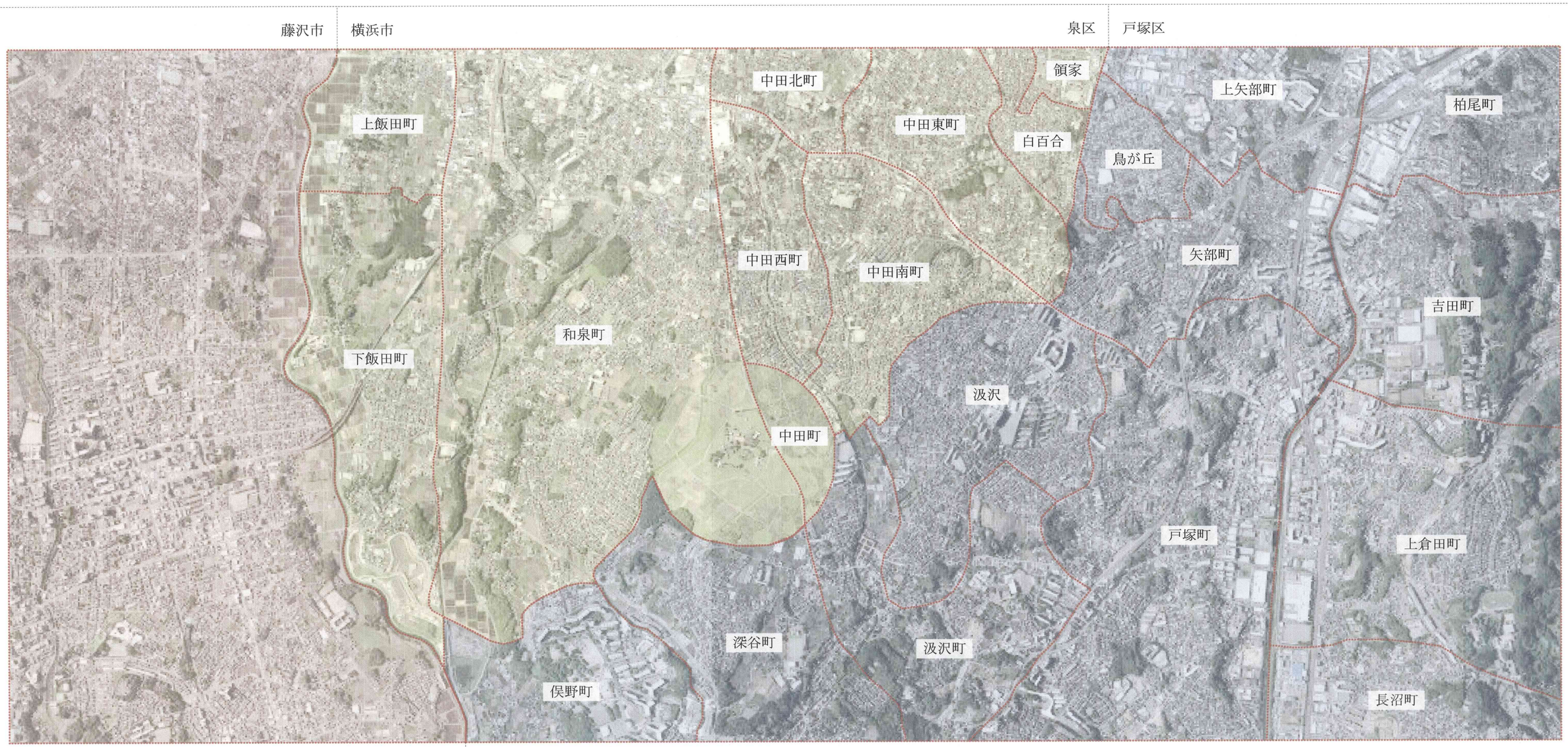
深谷通信所は約60年もの間、周辺環境に多大な影響を与えてきたことが下の図ではっきりと分かる。前述したように住宅が立ち並ぶことがこの通信所の様相をより鮮明なものにしてきた。この規模で見るとそれがはっきりと分かる。さらに、周辺の交通網を見ても、戦後に新しく開通した道は少なく、1999年に横浜市営地下鉄が戸塚～湘南台間を開通した際には、明らかに深谷通信所を回避しているように見える。その証拠に通信所から約2kmの位置に「踊場駅」、「中田駅」、「立場駅」、「下飯田駅」の4駅があるという不思議な現象が起きている。その他の細かな道や川もこの通信所の磁場によって歪んでいるのが分かる。

■敷地周辺図



＜深谷と市区町＞

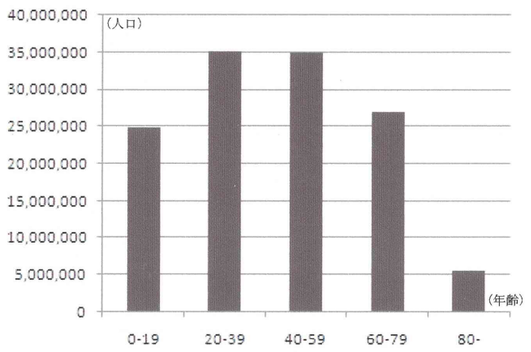
深谷通信所が位置する場所は、広域で見れば横浜市と藤沢市の間、中域で見れば戸塚区と泉区の間、詳細で見れば中田町、和泉町、汲沢町、深谷町の間にある。
実に様々な地域と関係を築くことができるというポテンシャルがあると言っていいだろう。



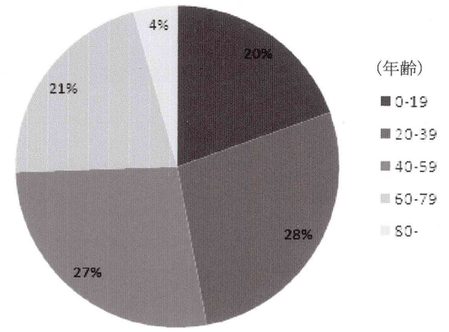
＜深谷周辺の人口＞

下図の円グラフは、各町の年齢別人口比率を示したものである。
右図のような日本における比率と比較すると、若干ではあるが深谷に近いほど年齢層が上がるという傾向が見られた。
特に60歳～79歳の年齢層が高いことが分かった。つまりリタイアを迎えた世代が比較的多く住んでいる。
この結果は今後、調査する際に念頭に置く必要があるだろう。

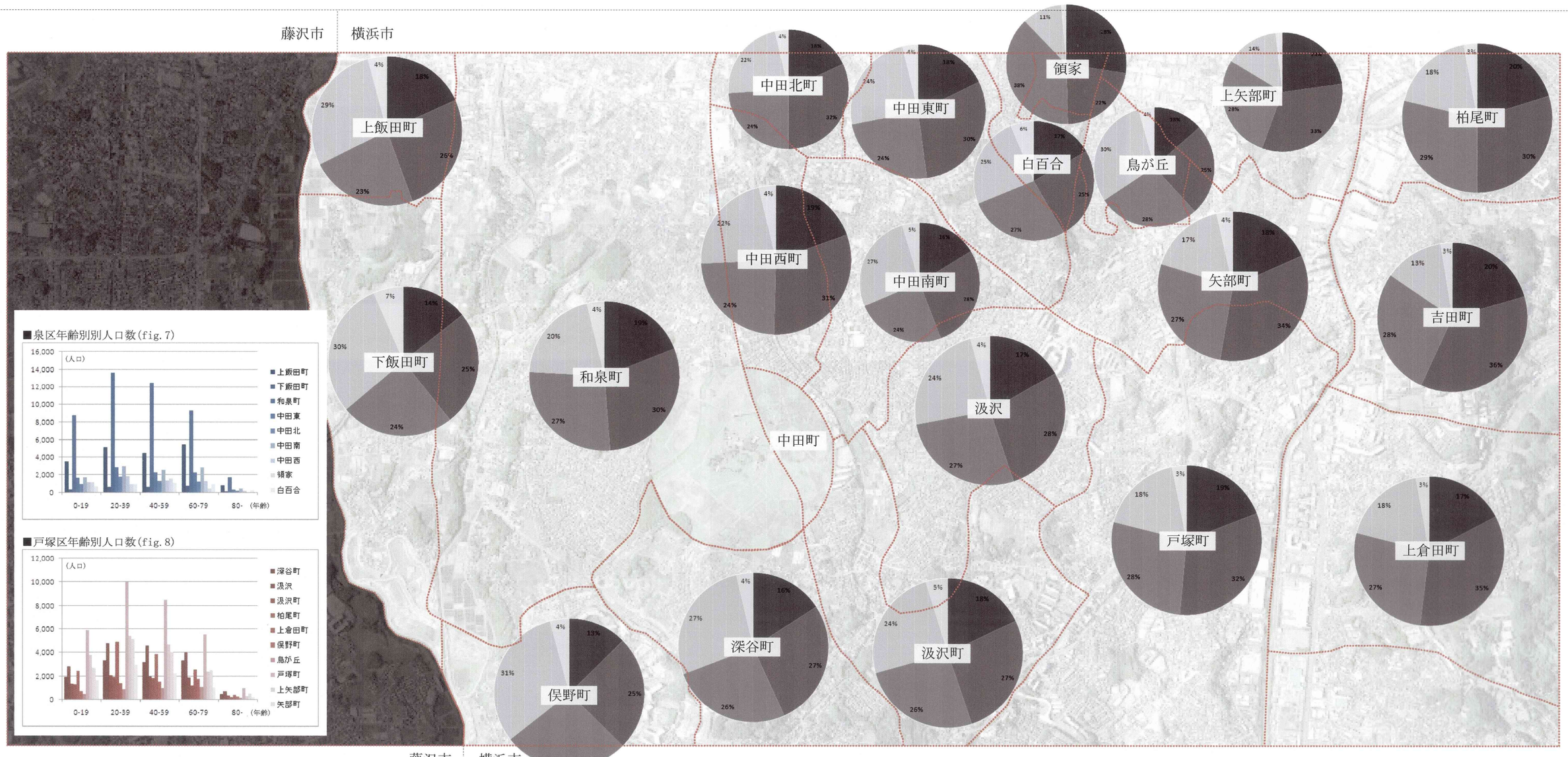
■日本年齢別人口数(fig. 5)



■日本年齢別人口比率(fig. 6)



藤沢市　横浜市



■泉区年齢別人口数(fig. 7)

■戸塚区年齢別人口数(fig. 8)

藤沢市　横浜市

: CAPTION

fig. 5, 6: 総務省統計局(2003年10月1日) 参考作図 / fig. 7, 8: 横浜市都市経営局経営企画調整部 調整・広域行政課(2007年9月) 参考作図

＜深谷通信所へのアプローチ＞

市営地下鉄「立場駅」から深谷通信所までのアプローチを写真に撮ることで、駅から住宅地、通信所へと風景がどのように変わっていくかを検証した。下の写真「アプローチ①-⑤」は右図の「①-⑤」に適応している。

周辺住宅地に大きな道路がないので、駅周辺は交通渋滞が発生している。中層マンションも多い。(アプローチ①)戸建住宅や店舗など低層の建物が道路際まで立ち並び、同じ風景が連続する。(アプローチ②、③)気が付くと中型店舗の駐車場がいくつか連続しているせいか、空が広がって見えてきた。(アプローチ④)次の瞬間建物は一気に視界から消え、広大な通信所が目の前に広がる。(アプローチ⑤)

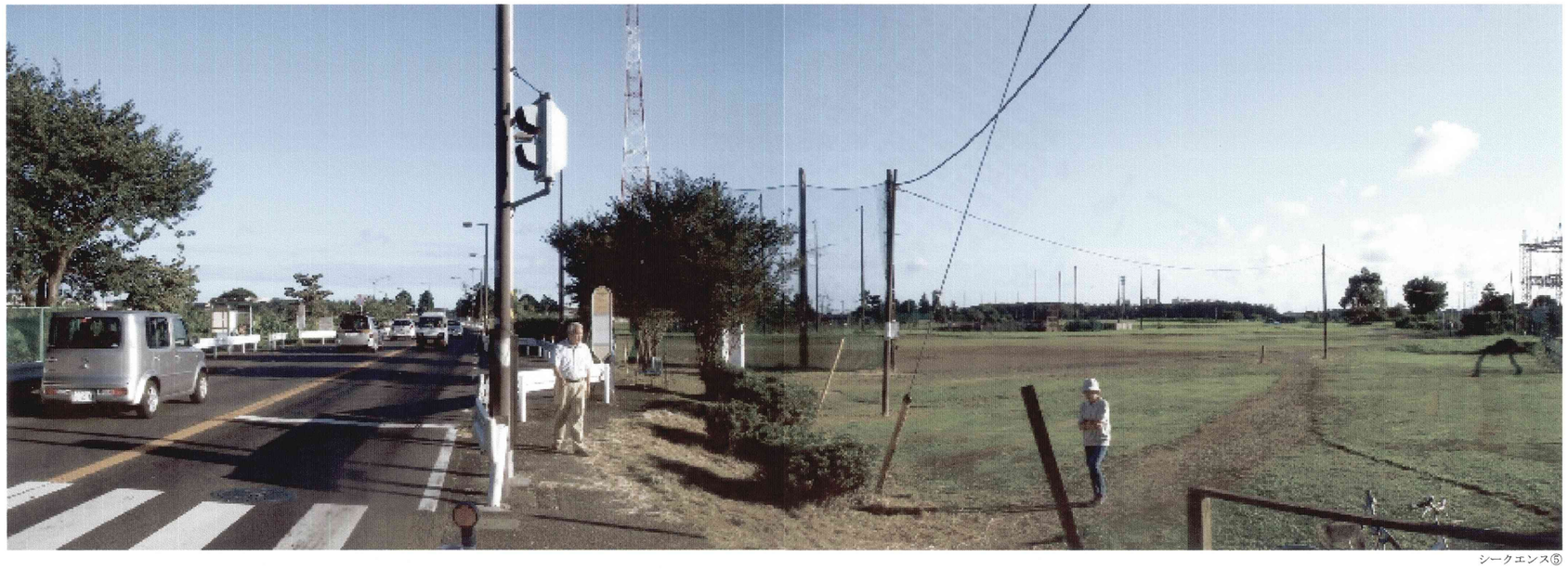
■立場駅からのアプローチ(fig. 9)

シークエンス①

シークエンス②

シークエンス③

シークエンス④



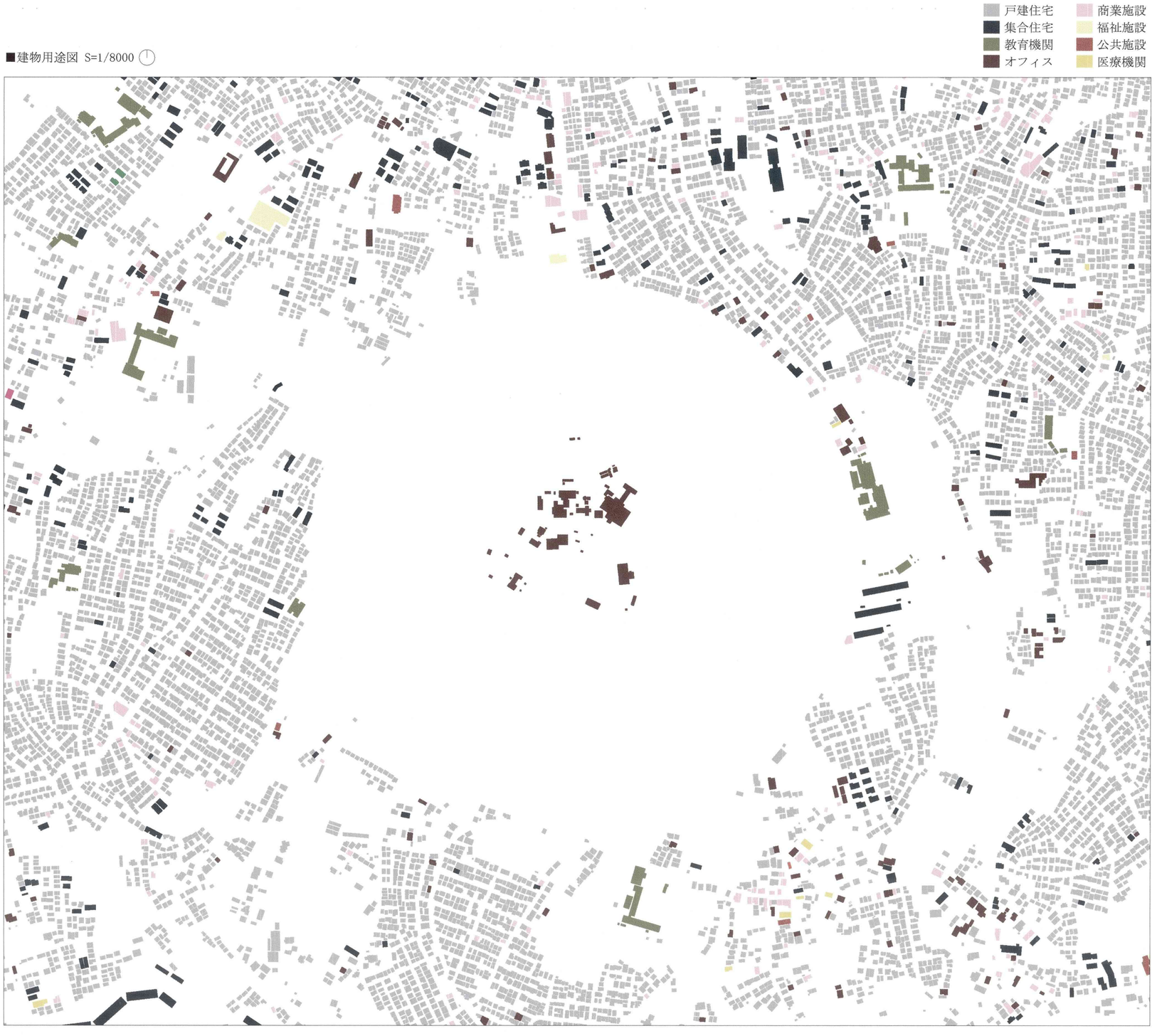
シークエンス⑤

■敷地周辺図

: CAPTION

fig. 9:敷地周辺写真(著者撮影2007年08月13日)

■建物用途図 S=1/8000



＜建物用途：点要素＞

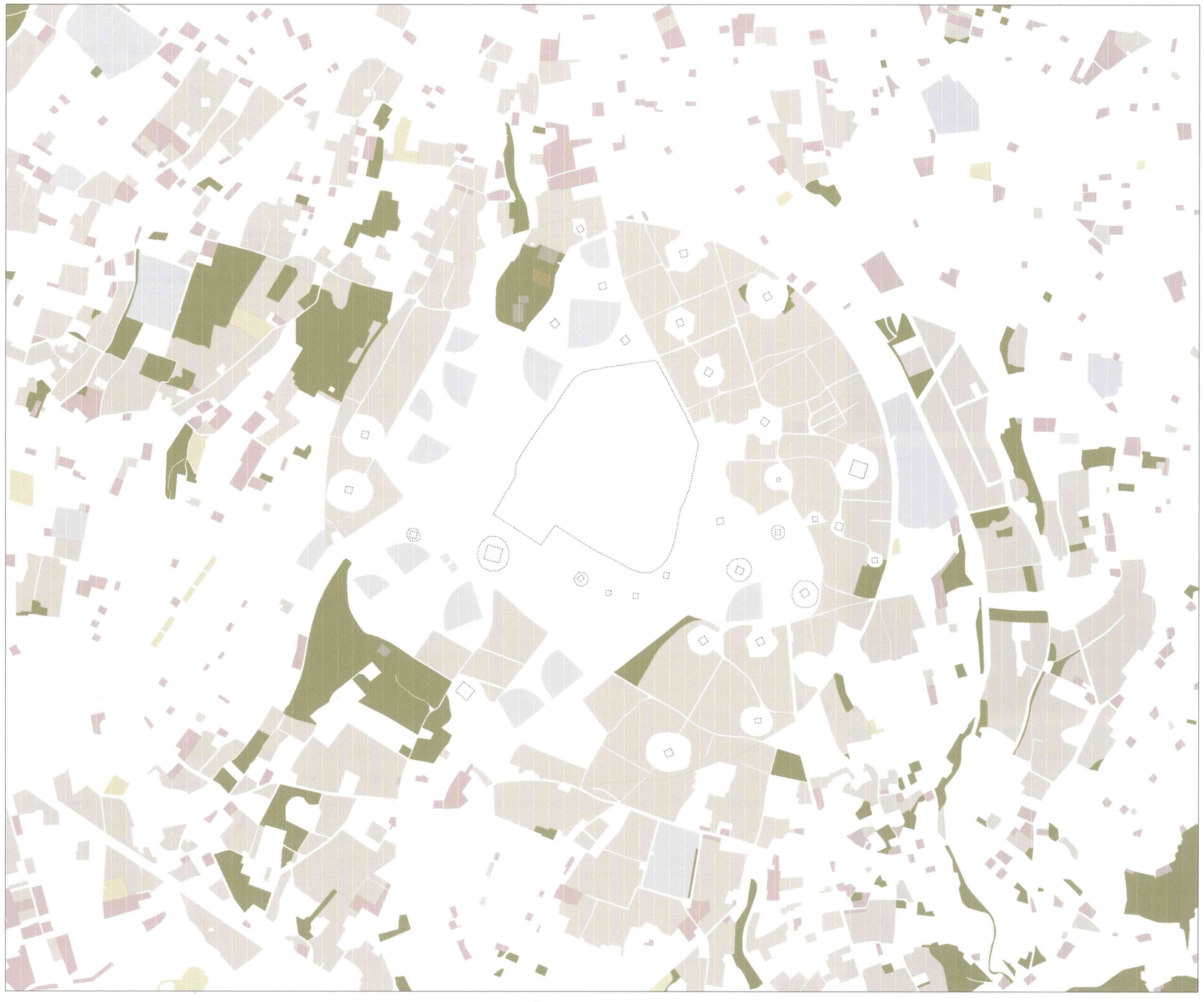
建物の粗密がはっきりと現れ、DID地域であることが確認できる。また、生活を補完するような公共施設は格段に少ないことが分かる。

■路図 S=1/8000

＜路：線要素＞

敷地の東半分は、円形に沿うように道路が通っている。そして、微量ながらも2本の川が敷地内部を横断している。

■ヴォイド示図 S=1/8000



＜ヴォイド：面要素＞

整備された公園がとても少ない。田畑や果樹園等は充実しているが断片的である。
また、周辺からのアクセスが悪いせいか、駐車場の占める割合が比較的多い。
ここ深谷通信所周辺は面的な要素が非常に強く地域の特性を表わしている。

-深谷通信所の可能性-

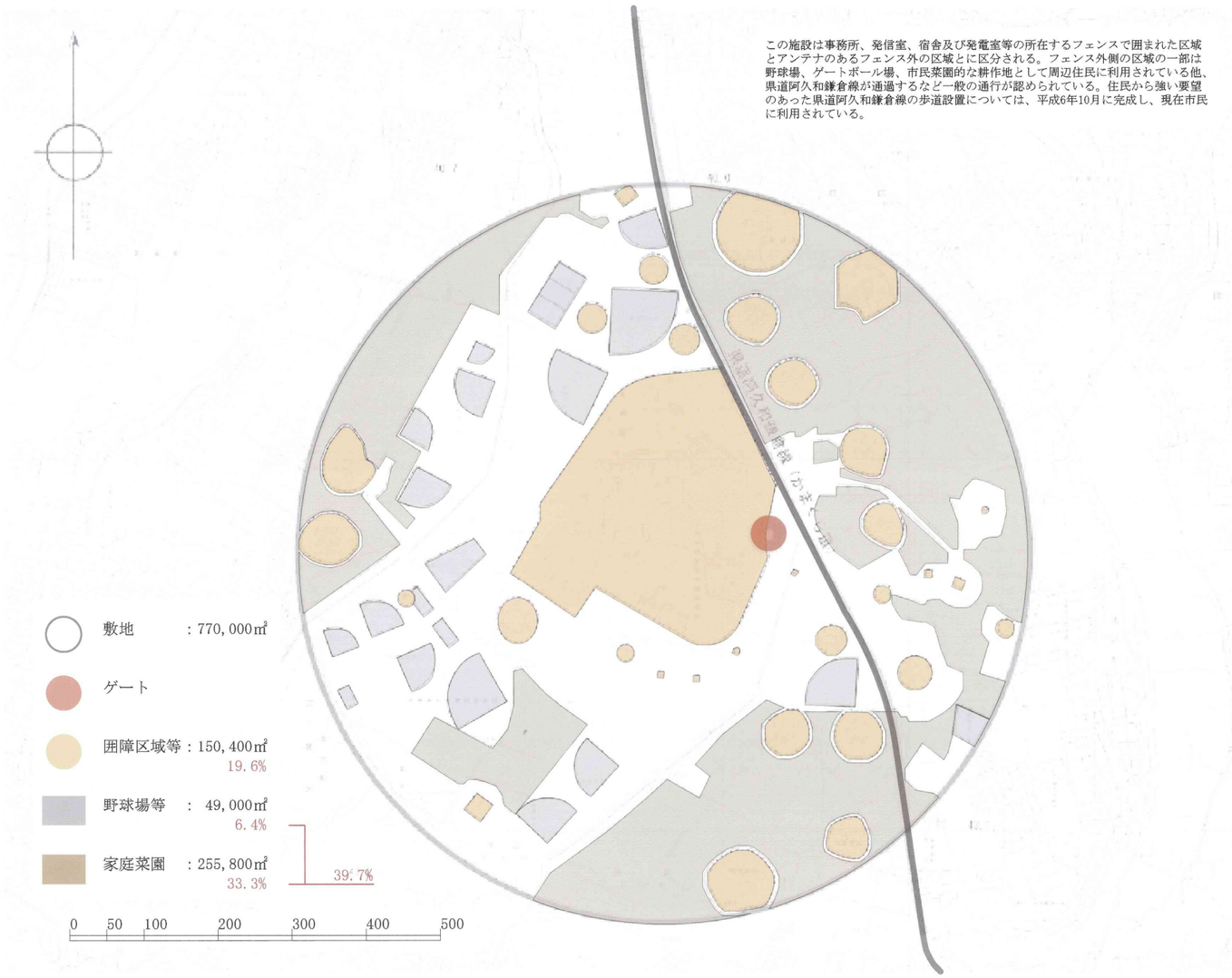
＜今ここにあるもの＞

77haという広大な敷地は、全域が国有地であるために今後の国や市の計画はおそらく、現在市民によって利用されている「野球場」や「家庭菜園」といった用途の維持はないだろう。しかしこれらは約60年もの間、僅かながら歴史が動き、獲得した市民の生活の一部である。これらを未来に維持することは一つの可能性であると考える。これらは全く異なる用途であるが、そのおかげで、敷地内には野球をする子供から農作をするお年寄りまで幅広い年齢の市民が見られる。そして何よりもこれらは敷地全体の約40%を占めているのである。

もう一つ私が注目したいのは、「囲障区域」と呼ばれる、一般の人が入ることができない場所である。敷地中央の一番大きな囲障区域には事務所、発信室、宿舎及び発電室等が所在しているが、それ以外の点在する囲障区域には送信アンテナが立っており、通信所であることをまさに示している。私はこの敷地で新たな計画を行うに当たり、今まで入ることができなかったこれらの囲障区域32ヵ所を新たなフィールドとして人々の活動拠点にしたいと考えている。

「囲障区域」をこの計画のスタートラインとして位置付ける。

■深谷通信所現況図(fig.1)



■深谷通信所現況写真(fig.2)

ゲート

囲障区域

野球場

家庭菜園

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Chapter-4

第4章　設計主旨

-接縁効果-

＜接縁効果＞

都市の多様な価値を投影し、予測不可能な出来事を誘発させるためのきっかけとしての都市公園を計画する為に、異種空間の境界である「接縁」という概念に注目することを第2章4節で述べた。ここ第4章では、その「接縁」について論じながら建築空間としての応用を試みる。

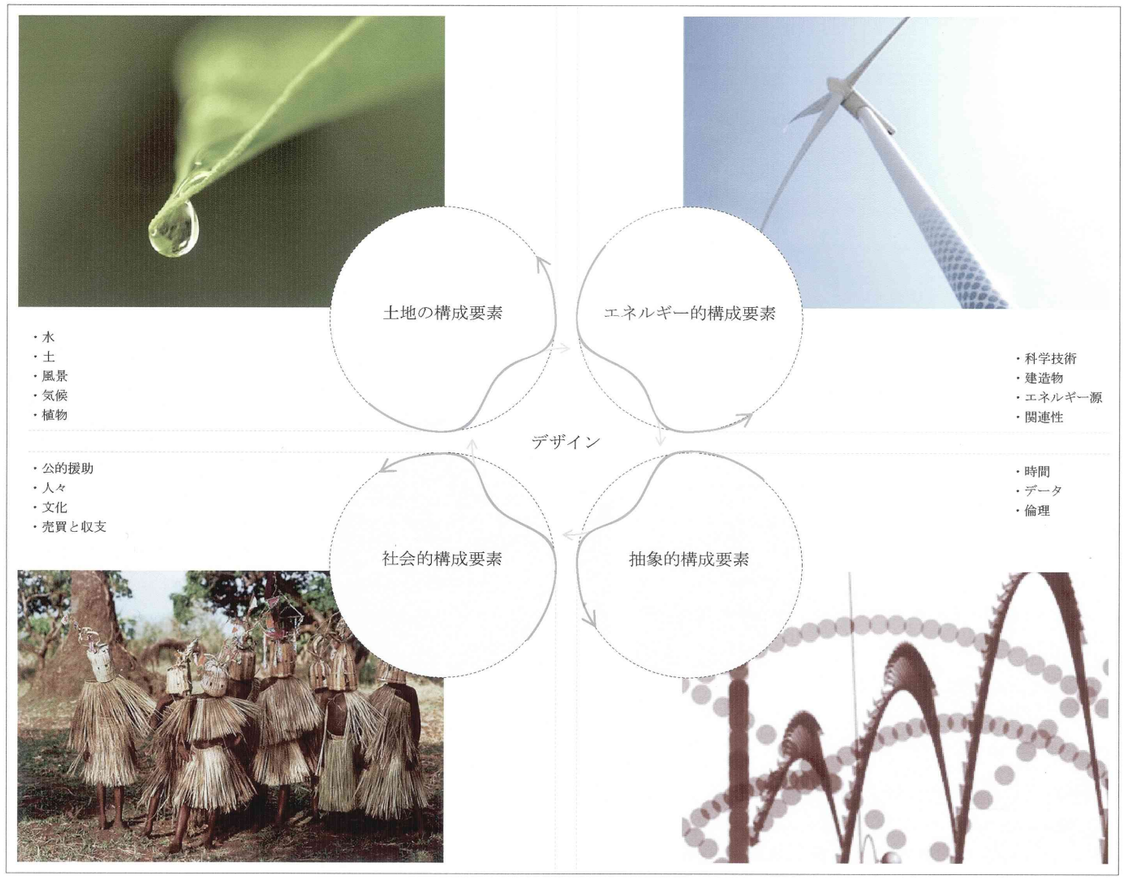
＜パーマカルチャー＞

ビル・モリソンが提唱するパーマカルチャーという人間にとって恒久的持続可能な環境をつくり出すためのデザイン体系がある。接縁効果というのは、パーマカルチャーの中にある概念の一つである。その為、接縁効果の前にパーマカルチャーについて述べる必要があるだろう。パーマカルチャーについてはビル・モリソンの著した「パーマカルチャー -農的暮らしの永久デザイン」の序文に次のように書かれている。

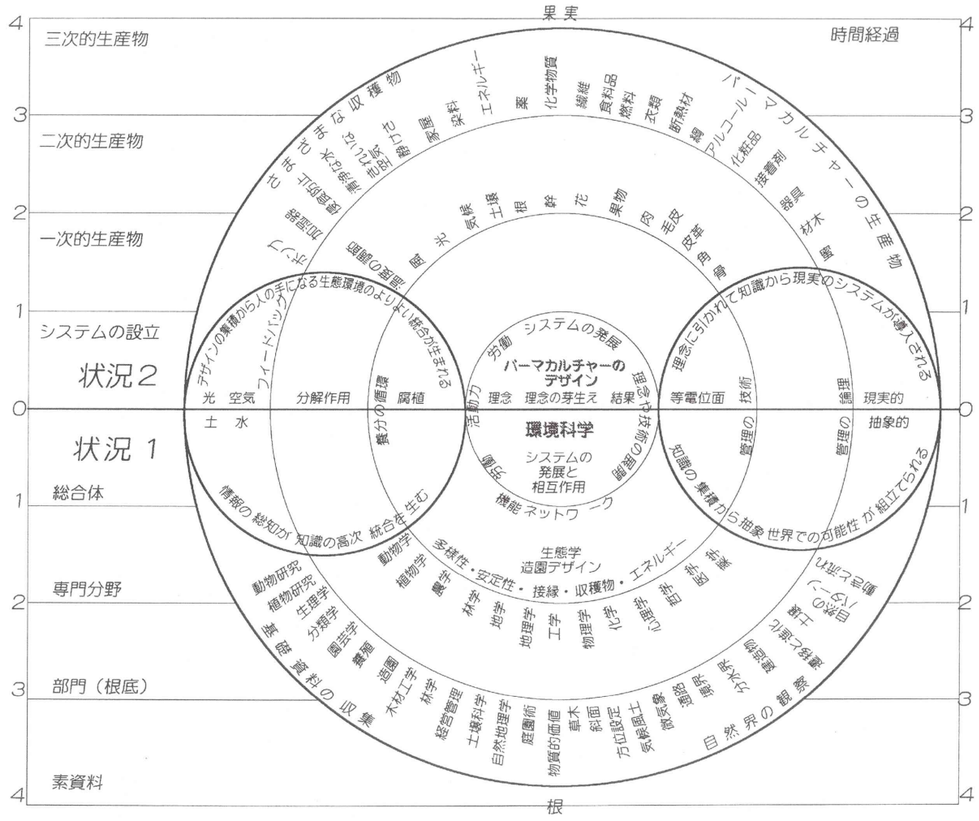
『パーマカルチャーという語そのものは、パーマネント(permanent:永久の)と(agriculture:農業)をつづめたものであるが、同時にパーマネントとカルチャー(文化)の縮約形でもある。文化というものは、永続可能な農業と倫理的な土地利用という基盤なしには長く続きえないものだからである。パーマカルチャーには、植物、動物、建物及び(水、エネルギー、コミュニケーションなどの)生産基盤などを扱う側面もある。しかし、パーマカルチャーは単にそれらの要素そのものだけに関わるものではない。むしろ、それらの要素をその場所の中にどのように配置するかによって、各要素間にどのような関係をつくり出せるかを扱うものである。・・・』(quo.1)

ビル・モリソンの言うパーマカルチャーにおけるデザイン理念は、私達の暮らす環境における、様々な要素の適切な関係に置いた互恵的集合体をつくることにある。つまり物と物との間の関連のことである。それを簡単に示すと以下の図のように表わされる。(fig.1)

■パーマカルチャーのトータルデザインにおける要素(fig.1)



■パーマカルチャーの木(fig.2)



＜パーマカルチャーの倫理＞

パーマカルチャーのシステムには、基本的な生命の倫理がある。全ての生き物の固有の価値を再認識することが求められるのである。例えそれが全く商品価値のないものであっても、生きているということ自体に価値を認めることが重要なのである。自然界で生きていることはそれなりの役割を演じているということでもある。例えばバイオマス循環の中で、地域に酸素や炭酸ガスを供給し、小動物にすみ家を提供し、土を肥やしたりする。従って、パーマカルチャーの倫理は、循環や地域社会や経済など全ての側面に及ぶ体系なのである。

(fig.2)はビル・モリソンが記した、パーマカルチャーが取り巻く環境を表した図式である。パーマカルチャーも、木と同様、全体論的システムであり、各種専門分野の知識の総合体が収穫物・生産物へと還元されていくことが示されている。理念と周囲の環境状況から必ずこのような図式になるとも言いきれないが、ともかく、根から果実に至る道筋と可能性は無限にあり、全ては互いにつながっているのである。

＜接縁効果による風景＞

接縁とは異なる二つの環境条件の接触面のことである。それは例えば水と空気の表面であり、土の粒子の表面で土と水が結合する部分であり、陸地と水が接する水際のことであり、森と草地の境である。丘の斜面で霜の降りる範囲と降りないところの境もそうである。動植物の種、気候、土、斜面、その他あらゆる自然的条件や人為的境界の出会うところ、そこが接縁である。

接縁は様々な生態の場である。二つの生態環境が出会うところ（陸と水、森と草地、河口と海、畑と果樹園など）では両方からの資源が利用しうる為、生産性が増大する。そのうえ、接縁にはしばしば接縁独特の種が存在する。自然界ではサンゴ塊と外洋の境界の「サンゴ礁環境」や、陸地と海の接縁をなす「マングローブ生息環境」などは、世界中で最も生産性の高いシステムである。

永続的で伝統的な人間の定住地の中で、このような二つの重要な自然環境の相接するところに位置していない場所はほとんどない。例えば、山麓と森と草原の境、草原と湿地の境、陸と河口の境などで定住していたのである。このような入り組んだ接縁をもつ風景は興味深く、美しい上に生産性を高めるのである。接縁が多くなればなるほど、生産性は増大し、かつ多様な風景をつくり出すのである。(quo.2)

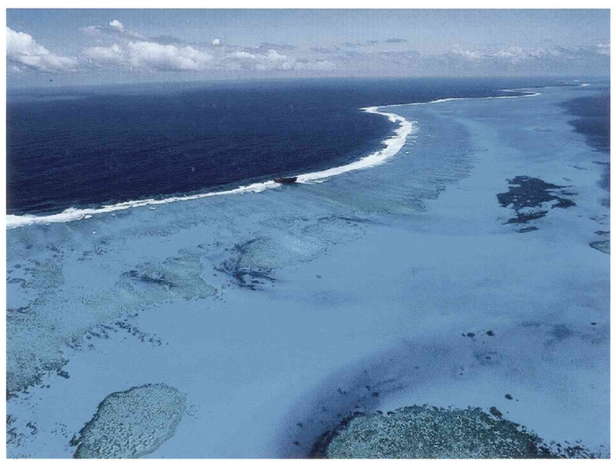
風景画家、ピーテル・ブリューゲル(1525-1569)は、「農民画家」として呼ばれることもある程、多くの農民を画いてきた画家である。ブリューゲルの絵にはここで言う「接縁」が実に多く画かれている。例えば「イカロスの堕落のある風景」(fig.3)では湖、牧地、農道が高低差によって遠近的に描かれ、人物も釣人、牧人、農夫、(イカルス)と異種の人々がそれぞれ描かれている。つまり、異なる環境がある分そこには「接縁」があり、この絵では砂浜や植栽がそれに当たる。さらに農道(最上段)にはヒダのようなもので微妙な高低差がつけられることでより立体的な「接縁効果」を生み出している。また、ブリューゲルの最高傑作とも謳われる「雪中の狩人」(fig.4)では、収穫の見込めない冬期に農民たちが行う狩猟の風景が描かれているが、この作品にも、多くの「接縁」がある。農村の家々は山麓と森の境である斜面に描かれ、左側の4本の木々は家と森の境に位置するように見える。中央の氷の張った湖においても木々が湖と道の境にあることが分かる。そして、作品全体を覆う雪は山、家、木々、地面と大気の間に降り積もっている。

ブリューゲルは意図的に「接縁」を描こうとしていたわけではなく、農民の日々の生活や農作活動をありのまま描いていたのである。当たり前に育んできた「接縁」の姿かたちは自然との折り合いをつけた風景として存在していたのである。現代においても何か新しい計画や設計をする際にこのような「接縁」を表現することは多様な風景を作り出す上で重要な概念の一つであると考える。

■イカロスの堕落のある風景(fig.3)

■雪中の狩人(fig.4)

■サンゴ礁環境



■マングローブ生息環境

: CAPTION

quo.2:「パーマカルチャー -農的暮らしの永久デザイン-」ビル・モリソン 1993年(農文協) P.32 参考 / fig.3:「イカロスの堕落のある風景」ピーテル・ブリューゲル(1558年) / fig.4:「雪中の狩人」ピーテル・ブリューゲル(1565年)

＜接縁という境界＞

接縁による境界は、網や篩のような役割を果たす。エネルギーや物質は接縁のところに集まるのである。例えば風に吹かれた土や落ち葉は垣根のところに吹き溜まるし、海岸に打ち寄せられた貝殻やゴミは波打ち際に一列に並ぶ。狭い住宅地の路地には植木や自転車、猫などが溢れ出ている。また、住宅の屋根には情報を受信するアンテナが立ち並ぶ。このように、接縁は領域を区切っていくつかの管理しやすい単位に区分しているとも言えるだろう。従って接縁という概念は、パーマカルチャーにおいて、システムの中に計画的に区切られた各領域の維持管理という観点からも重要なのである。(quo. 3)

＜接縁と幾何学＞

接縁をその形態に注目して考えてみる。すなわち幾何学的な、或いは図形的な見方である。例えば人間の脳や腸管の形態を考えてみると、何十メートルにも及ぶ組織が、小さな空間に詰め込まれ、膨大な接縁と機能を可能にしている。接縁の形態は直線よりも曲がりくねった、もしくは多岐に渡る形状の方がより有用なのである。ビル・モリソンは接縁の形状の有用性をいくつか検証している。(fig. 5, 6)はその中の一つであり、接縁を生かした果樹や畑作の植え付けの例である。どちらも畑の面積と株間の距離は同じであるが、直線的な植え付けでは36株しか入らないのに対し、曲線的な植え付けでは47株入るのである。この検証では生産効率の面で有利であることが分かったが、これが畑ではなく人が歩くための散策路だとどうだろうか。例えば(fig. 7, 8, 9)のように直線的な散策路と曲線的、もしくは多岐的散策路では後者の方が視線を多角的に誘導されることにより多くの場面を体験できる。さらに、それらが多様な領域の接縁であった方が散策路としてより楽しいものになるだろう。ビル・モリソンは接縁が多ければ多い程良いとしている。私はそれに加え、接縁形態もより複雑で多岐的な方が豊かな環境をつくり得るのではないかと考える。

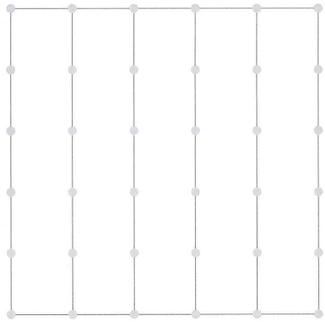
■垣根に吹き溜まる落ち葉

■打ち寄せられたゴミ

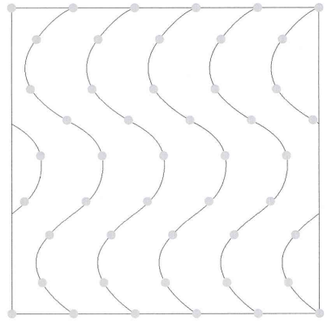
■露地に溢れる植木や自転車

■住宅地のアンテナ

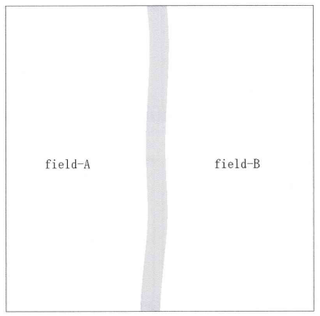
■直線的な植え付け(fig. 5)

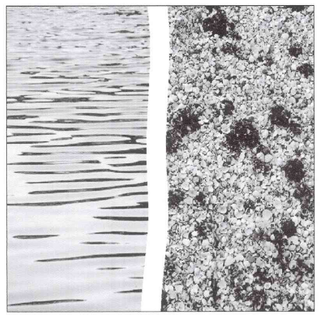


■曲線的な植え付け(fig. 6)

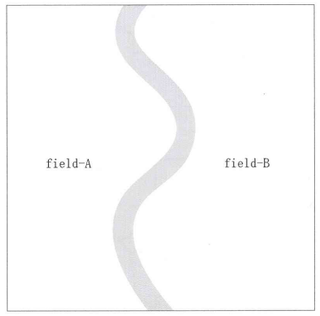


■直線的な散策路(fig. 7)

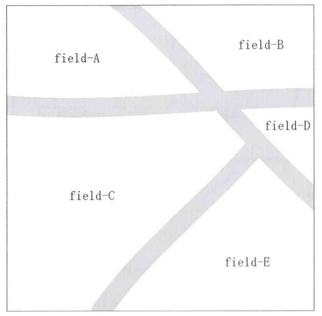


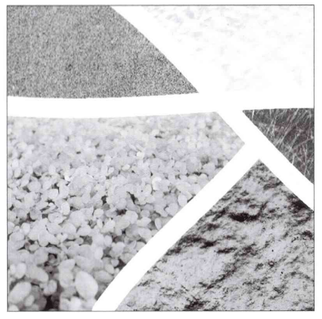


■曲線的な散策路(fig. 8)



■多岐的な散策路(fig. 9)





＜接縁の数＞

異なる二つの環境条件の接触面に「接縁」という境界ができることによって、「接縁」には相互のエネルギーが集まり、豊かな環境と風景を生むことを述べてきた。そして「接縁」は多く複雑な方が良いと仮定した。風景としては自然に近い状況を生むことで豊かさを生み出すし、人間が体験する「接縁」は単調であるよりも、多くの変化を誘導するような複雑性を持っている方が興味深いからである。

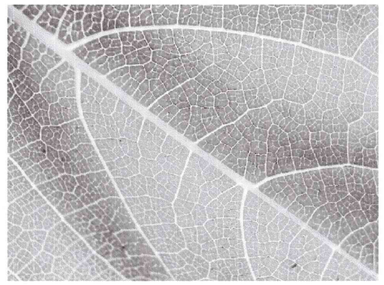
ここでは同じ面積に同数の領域を持ちながらいつくの「接縁」をつくることができるのかを検証する。方法としては、次のような三つの接縁生成パターンを元にし、生成される接縁の数を見ることとした。また、単純な線としての接縁数を検証するためにここでは全て直線を用いた。

P1 交点を持たない生成法　:A-Y
P2 直角交点を持つ生成法　:A'-Y'
P3 多岐的交点を持つ生成法 :A''-Y''

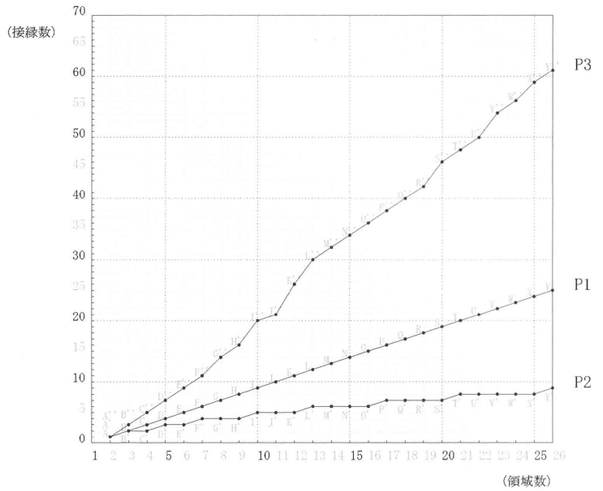
領域を2から26まで持った時の接縁を以下に作図した。また、得られた結果から領域数と接縁数との関係を(fig. 10)に示した。これにより、より多くの「接縁」を得るためには、多岐的な交点を多く持つ生成法が望ましいことが分かった。つまり、隣り合う領域がより多い方がいいと言える。作図中のF, F', F''にあるように、領域1が隣り合う関係にあるのは、Fが2つ、F'が4つ、F''が6つである。

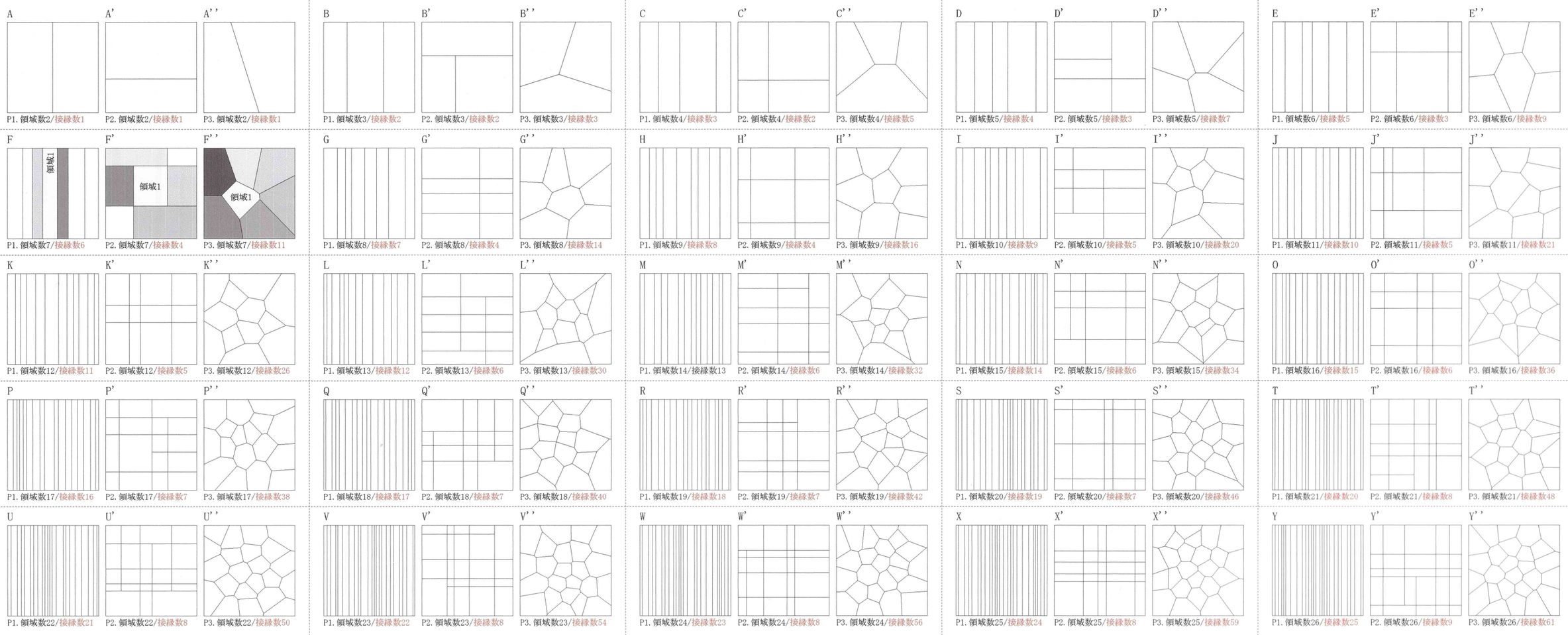
多岐的な交点を多く持つ構造は人間の血管や葉の網状脈に似ている。(fig. 11, 12)葉脈は茎から効率的に水分や養分を送るための通路である。複雑に見える自然界の様々な構造は多くの場合極めて合理的にできていて、この葉脈も例外ではない。多岐的な交点を多く持つ構造は自然界にも通ずるのである。

■人間の血管 左(fig. 11)
■葉の網状脈 右(fig. 12)



■接縁数と領域数の関係(fig. 10)





: CAPTION
fig. 11:人体の不思議展より

-動接縁-

＜接縁の活性レベル＞

これまでは線(接触面)としての接縁を考えてきたが、前述した「サンゴ礁環境」や「マングローブ生息環境」のように実際の接縁空間はある幅を持っている。そして接縁を設計のデザインへと取り入れる為には「接縁の活性レベル」を把握する必要があるだろう。接縁の活性レベルは主に、以下のような4つのパターンがある。

① 点としての接縁
② 線としての接縁
③ 面としての接縁
④ 塊としての接縁

これらはピーテル・ブリューゲルの「雪中の狩人」に分かりやすく描かれている。以下にそれらの状態と照らし合わせ示した。(fig.1-4)
また、接縁の状態は表にまとめ、それぞれを定義した。(fig.5)

① 点としての接縁 = 散接縁/Point Edge
② 線としての接縁 = 合接縁/Line Edge
③ 面としての接縁 = 重接縁/Surface Edge
④ 塊としての接縁 = 立接縁/Solid Edge

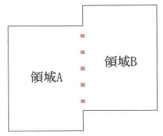
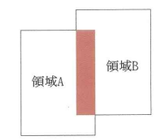
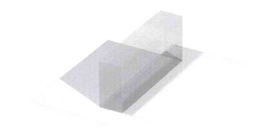
■点としての接縁(fig.1)

■線としての接縁(fig.2)

■面としての接縁(fig.3)

■塊としての接縁(fig.4)

■接縁の状態(fig.5)

活性レベル	ダイアグラム	イメージ	状態	具体例
散接縁 Point Edge			領域間に点在	・木々 ・池や水溜り ・椅子やベンチ
合接縁 Line Edge			領域間の接触面	・遊歩道 ・河川 ・鉄道 ・道路
重接縁 Surface Edge			領域間の重なり合う面	・オープンスペース ・駐車場 ・運動場 ・農地 ・緑地
立接縁 Solid Edge			領域間の重なり合う面がある ヴォリュームを伴う部分	・建築 ・山

: CAPTION
fig.1-4:「雪中の狩人」ピーテル・ブリューゲル(1565年) 参考作図

＜動接縁＞

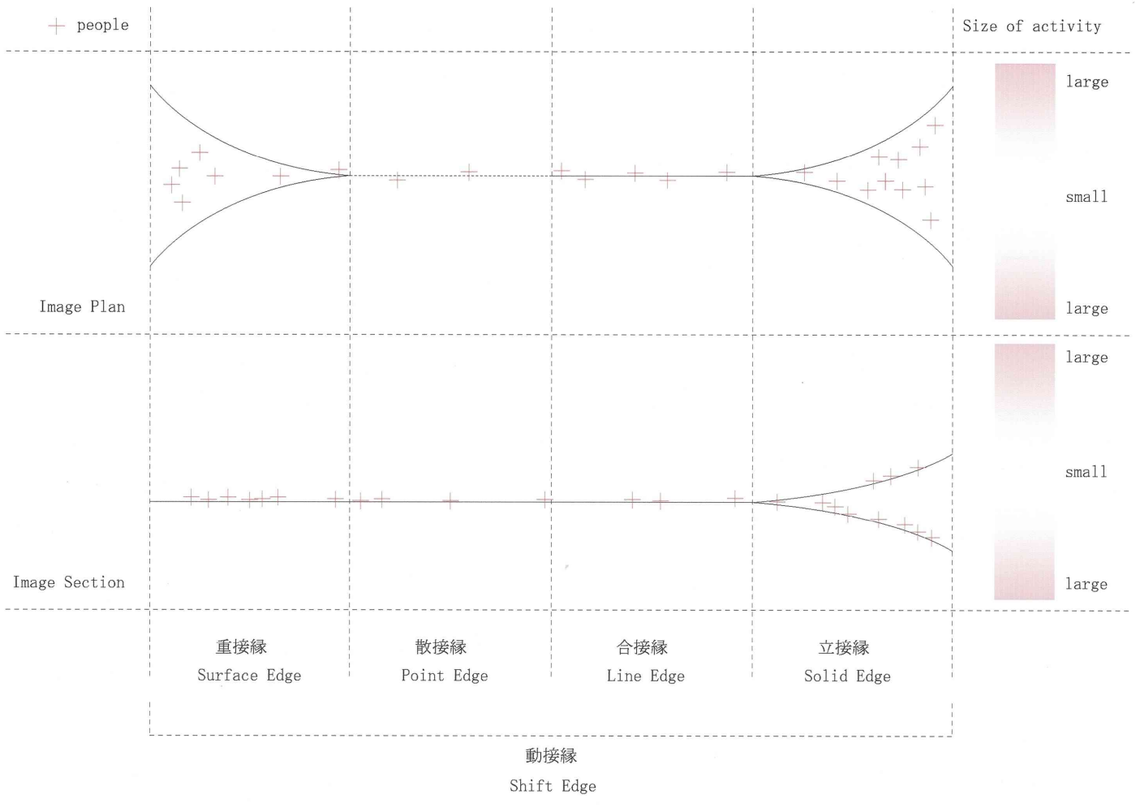
散接縁、合接縁、重接縁、立接縁という4つの活性レベルはそれぞれ、接縁の状態を示すものである。これら4つの活性レベルを全て併せ持つものを「動接縁」と定義する。

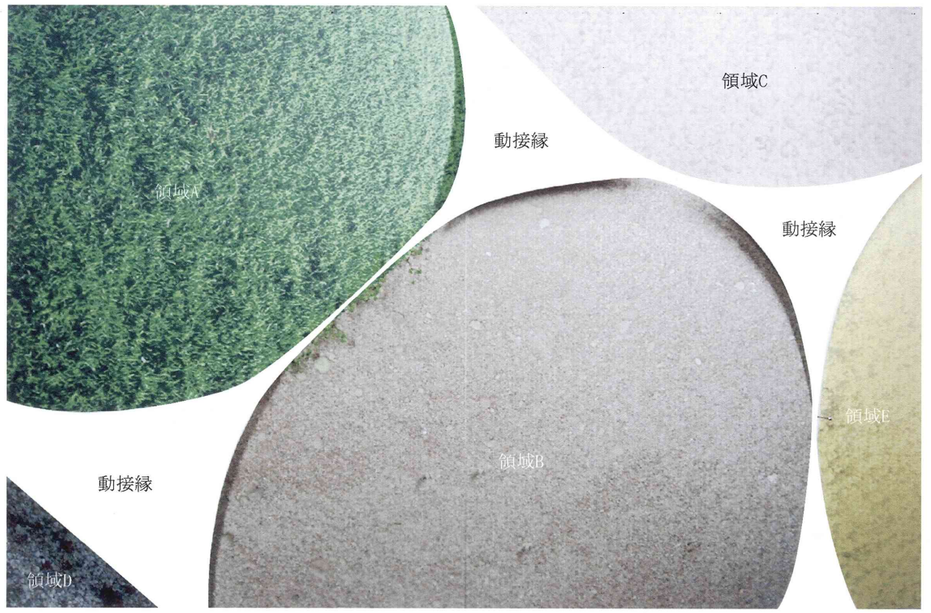
＜動接縁という流れ＞

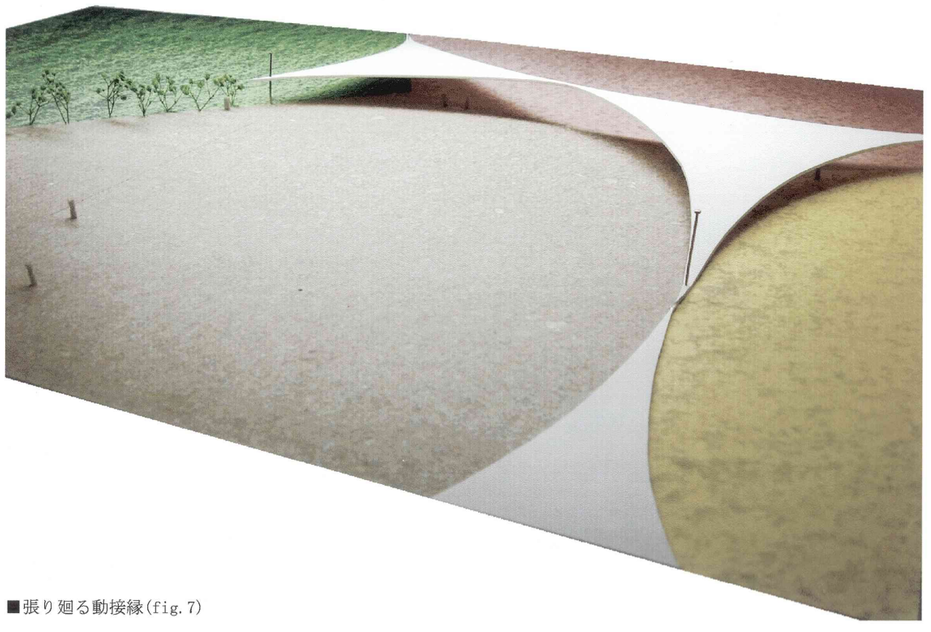
動接縁という接縁空間を、都市公園における人々の「流れ」（サーキュレーション）として試行する。（fig. 6）公園における人々の流れが、動接縁という概念によって形成される。動接縁が公園全体を多岐的に張り廻ることで人々は動接縁に誘導され、次々に展開する都市の多様な価値を再確認することができるのではないかと考えた。（fig. 7）

動接縁は異なる活動体の結節点を拠点にした「流れ」である。その流れは活動体を補完し、関係づけさせる機能を担っている。そして動接縁が流れに強弱をつくりながら展開することで異なる活動体をゆるやかに分節していくことが可能となる。

■流れとしての動接縁（fig. 6）







■張り廻る動接縁（fig. 7）

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Chapter-5

第5章　修士設計/深谷通信所跡地再生

-全体計画-

0 50 100 200 300 400 500m

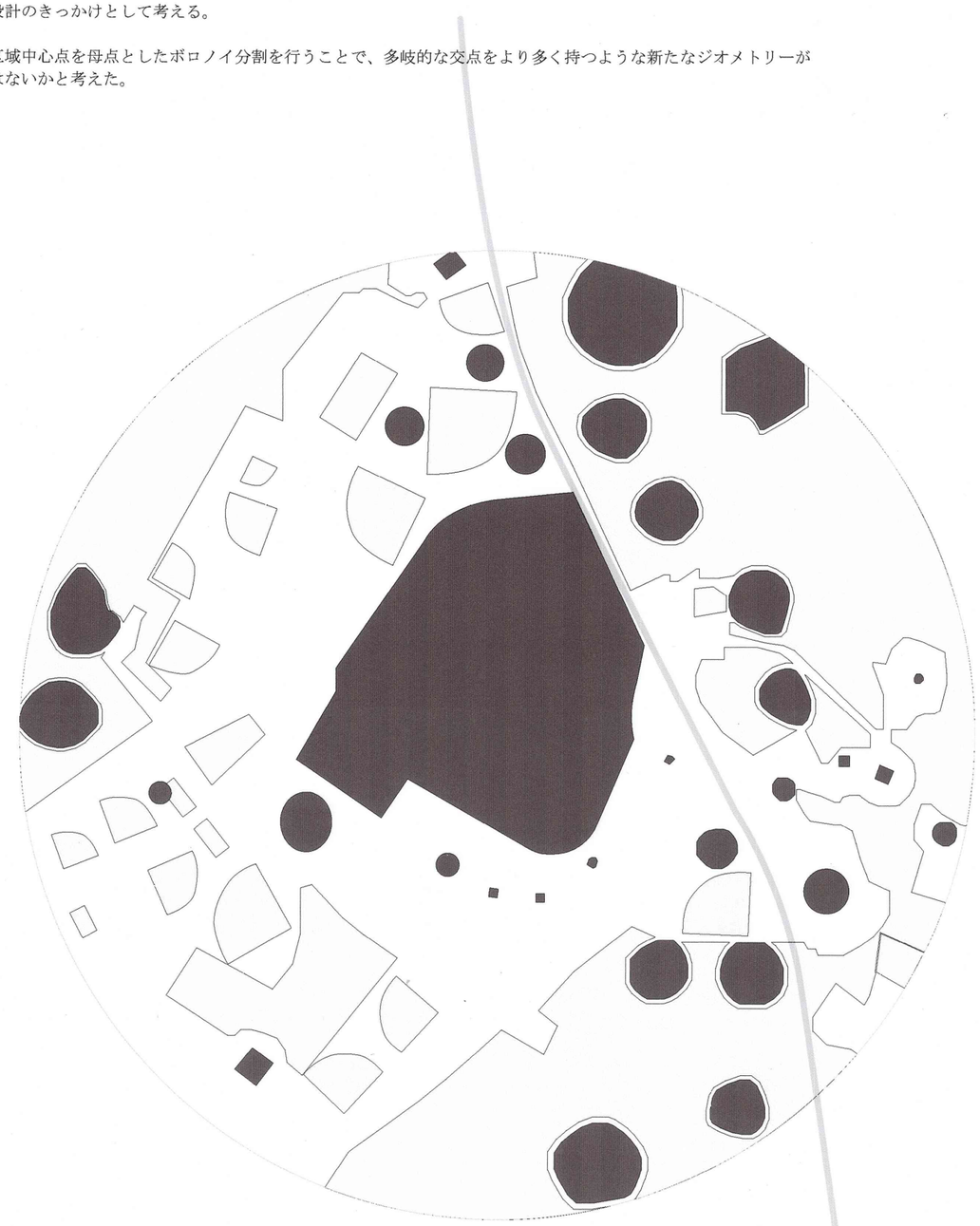
S:1/6000

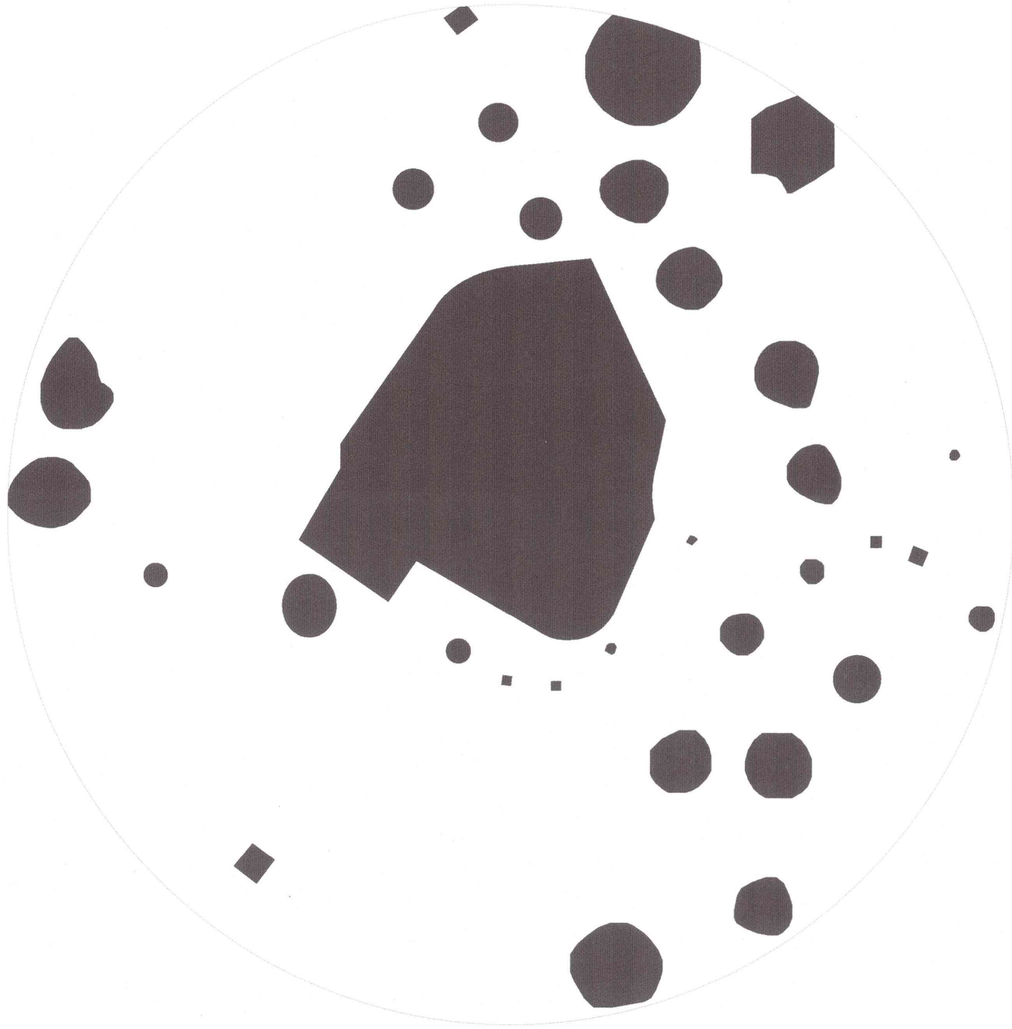
＜囲障区域＞

面積は様々であるが、敷地内には囲障区域が32ヵ所ある。この区域こそ60年もの間、市民生活の妨げになっていた原因である。

返還が決まり、これらの区域は役割を失った。
今まで市民が立ち入ることができなかったこの場所を今度は市民が集える場所にする。
これらの区域を設計のきっかけとして考える。

具体的には囲障区域中心点を母点としたボロノイ分割を行うことで、多岐的な交点をより多く持つような新たなジオメトリーが作り出せるのではないかと考えた。





: CAPTION

fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月) 参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

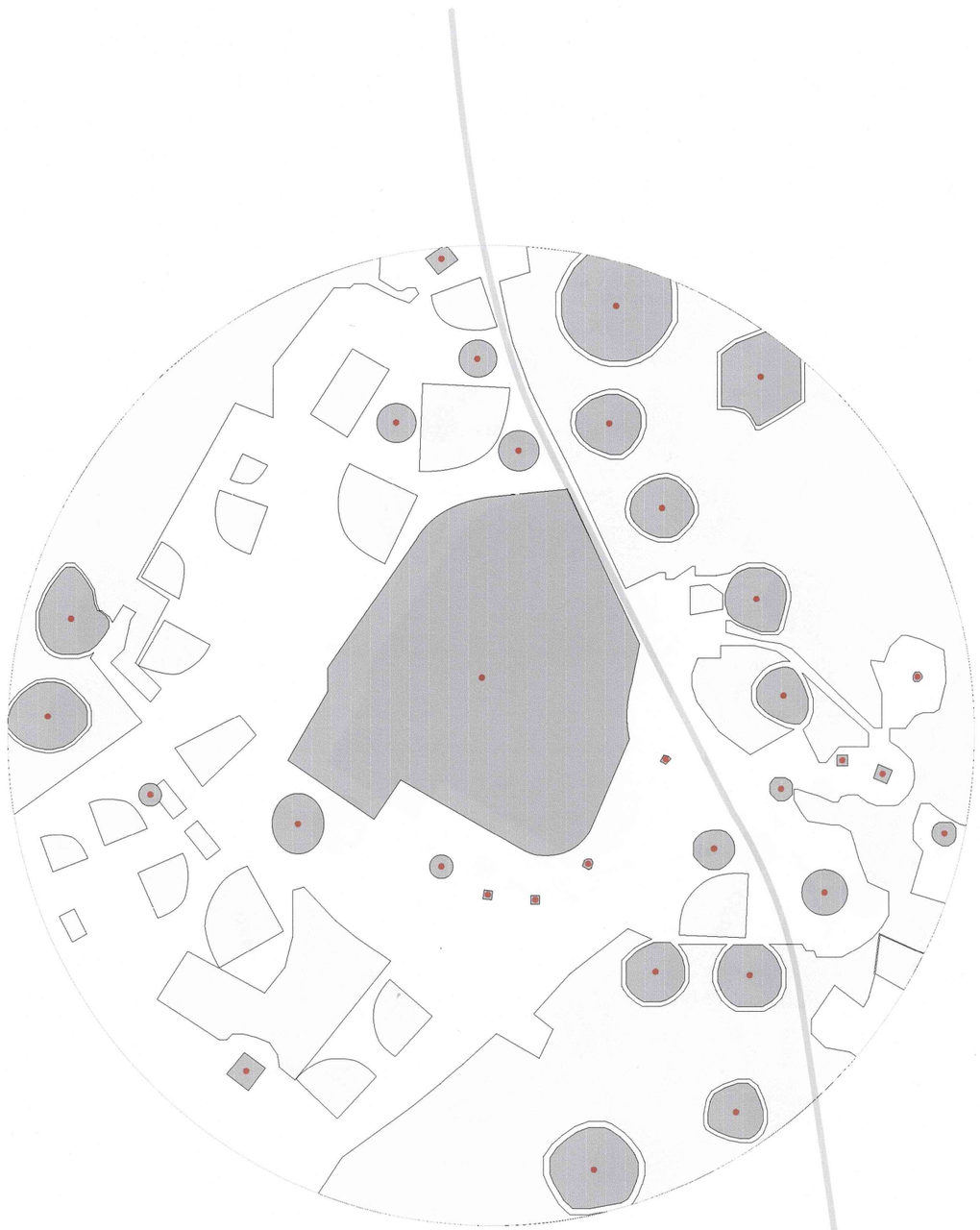
0 50 100 200 300 400 500m

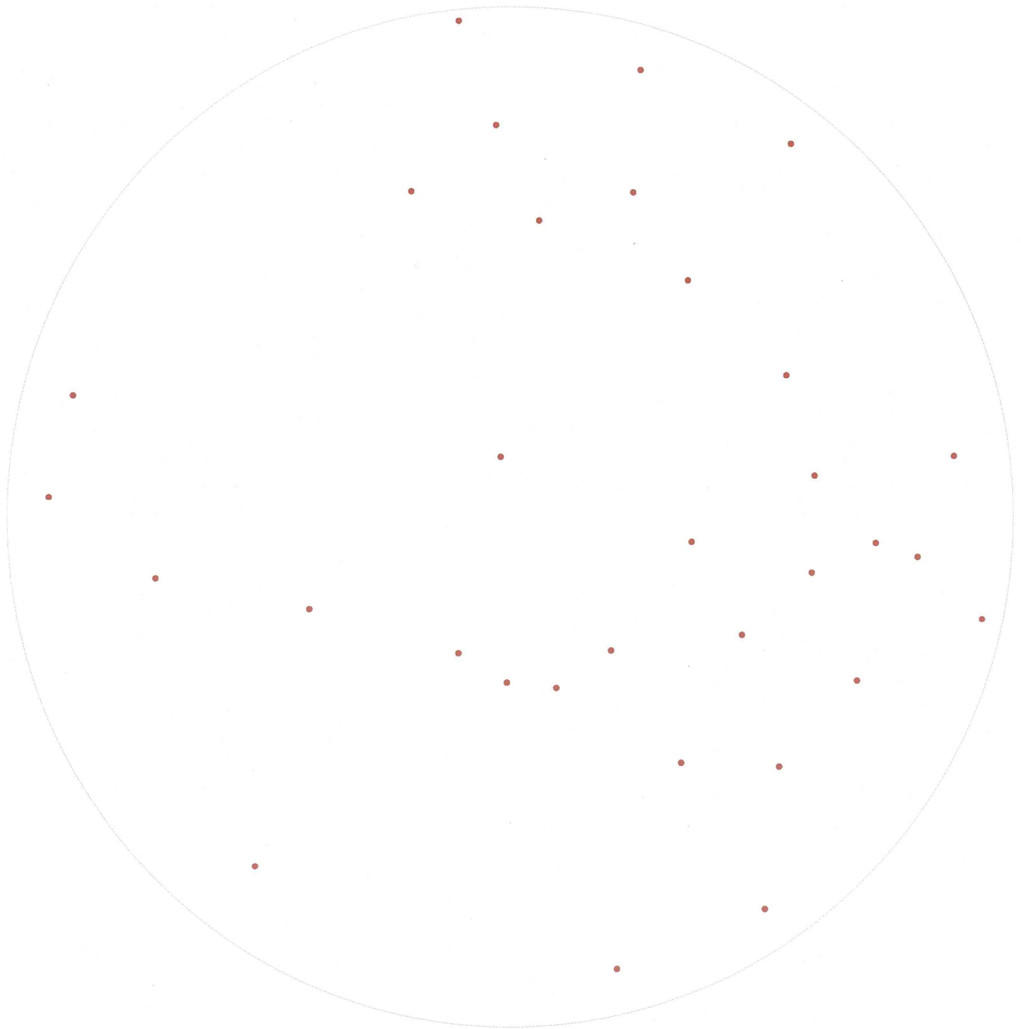
S:1/6000

＜囲障区域中心点＞

図は区域の中心点を示す。

敷地内に囲障区域が不均質に点在していることが分かる。





: CAPTION

fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月)参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

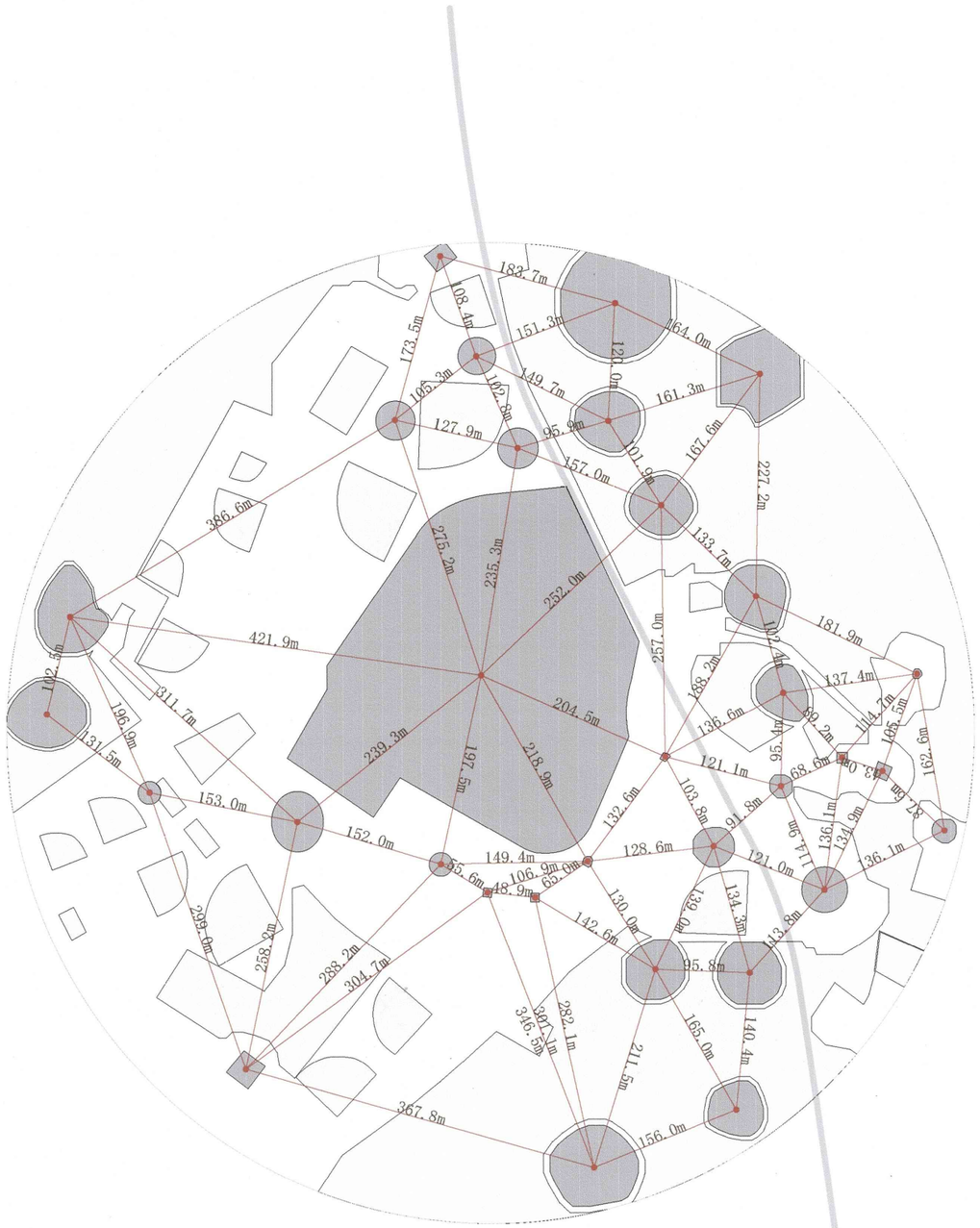
0 50 100 200 300 400 500m

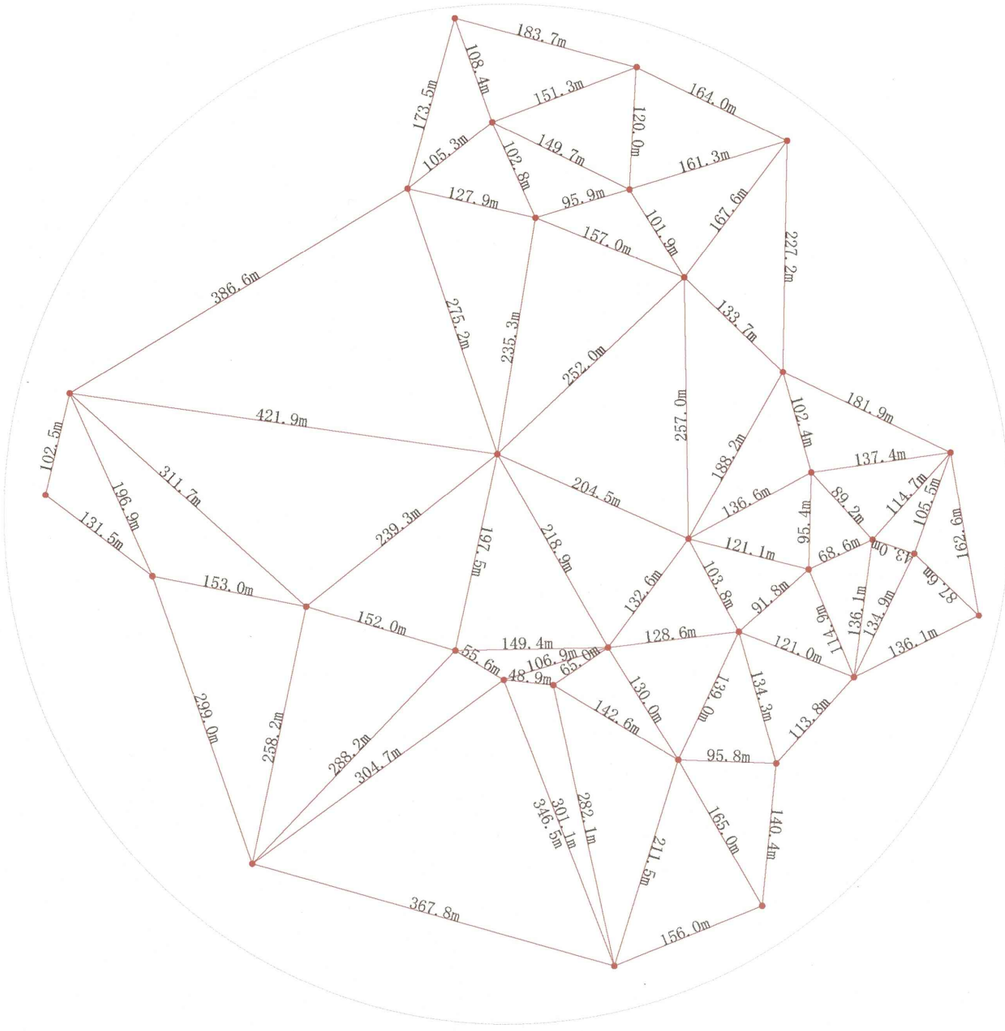
S:1/6000

＜囲障区域中心点間の距離＞

図は囲障区域中心点間の距離を示す。

隣り合う中心点間のうち一番離れている所で421.9m、一番近い距離で43.0mである。




183.7m
108.4m
173.5m
151.3m
164.0m
120.0m
105.3m
102.8m
149.7m
161.3m
127.9m
95.9m
167.6m
157.0m
101.9m
227.2m
386.6m
275.2m
235.3m
252.0m
133.7m
257.0m
181.9m
421.9m
102.5m
188.2m
137.4m
311.7m
196.9m
136.6m
89.2m
114.7m
105.5m
239.3m
192.5m
218.9m
204.5m
95.4m
121.1m
68.6m
43.0m
82.6m
131.5m
153.0m
103.8m
91.8m
132.6m
152.0m
149.4m
55.6m
48.9m
106.9m
65.6m
128.6m
121.0m
114.9m
136.1m
134.9m
130.0m
142.6m
139.0m
134.3m
113.8m
95.8m
299.0m
258.2m
288.2m
304.7m
301.1m
346.5m
282.1m
211.5m
165.0m
140.4m
367.8m
156.0m

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

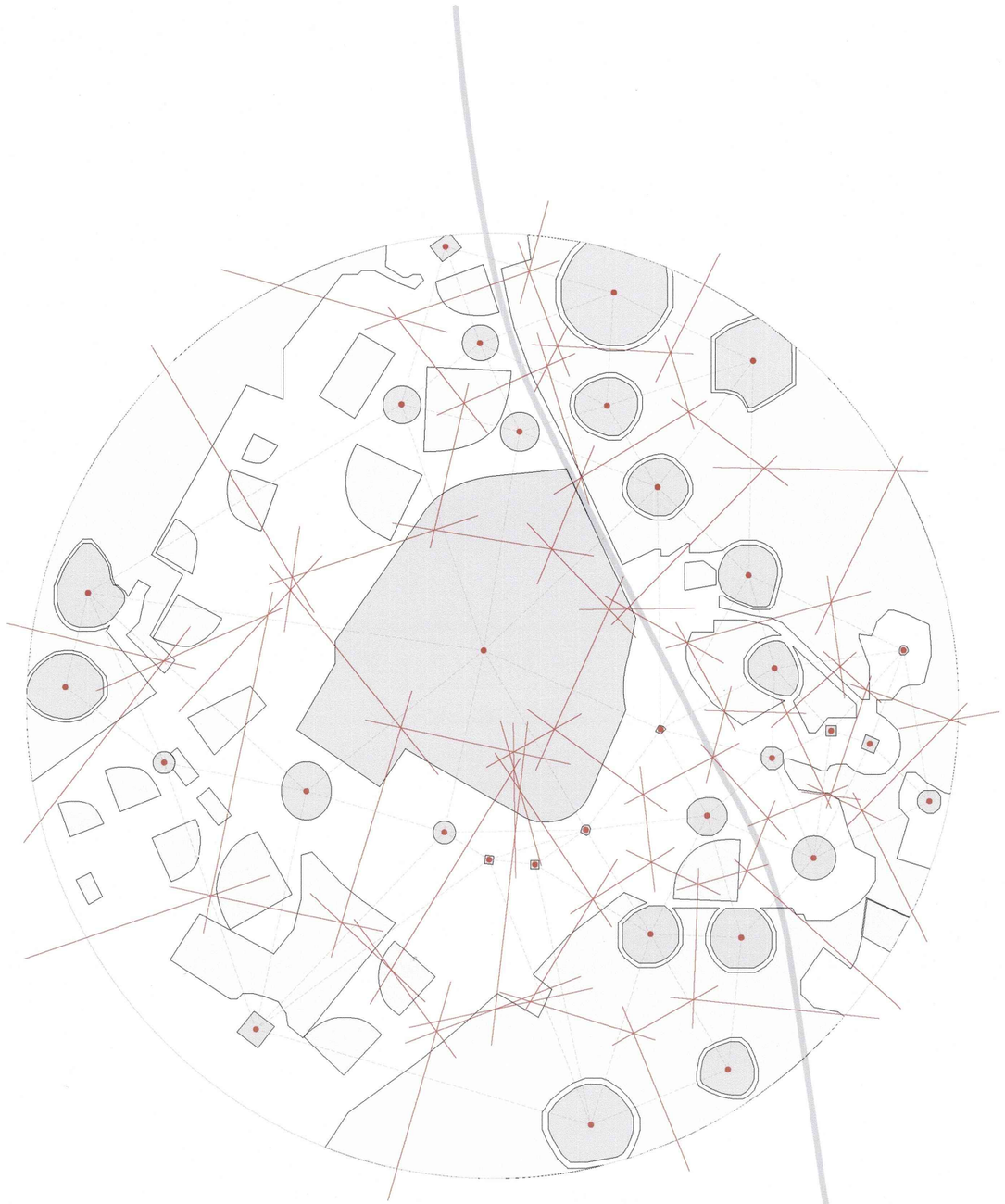
> chapter-5.1
Master Plan

0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜垂直二等分線＞

図は囲障区域中心点間の線分における垂直二等分線を示す。



: CAPTION

fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月) 参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

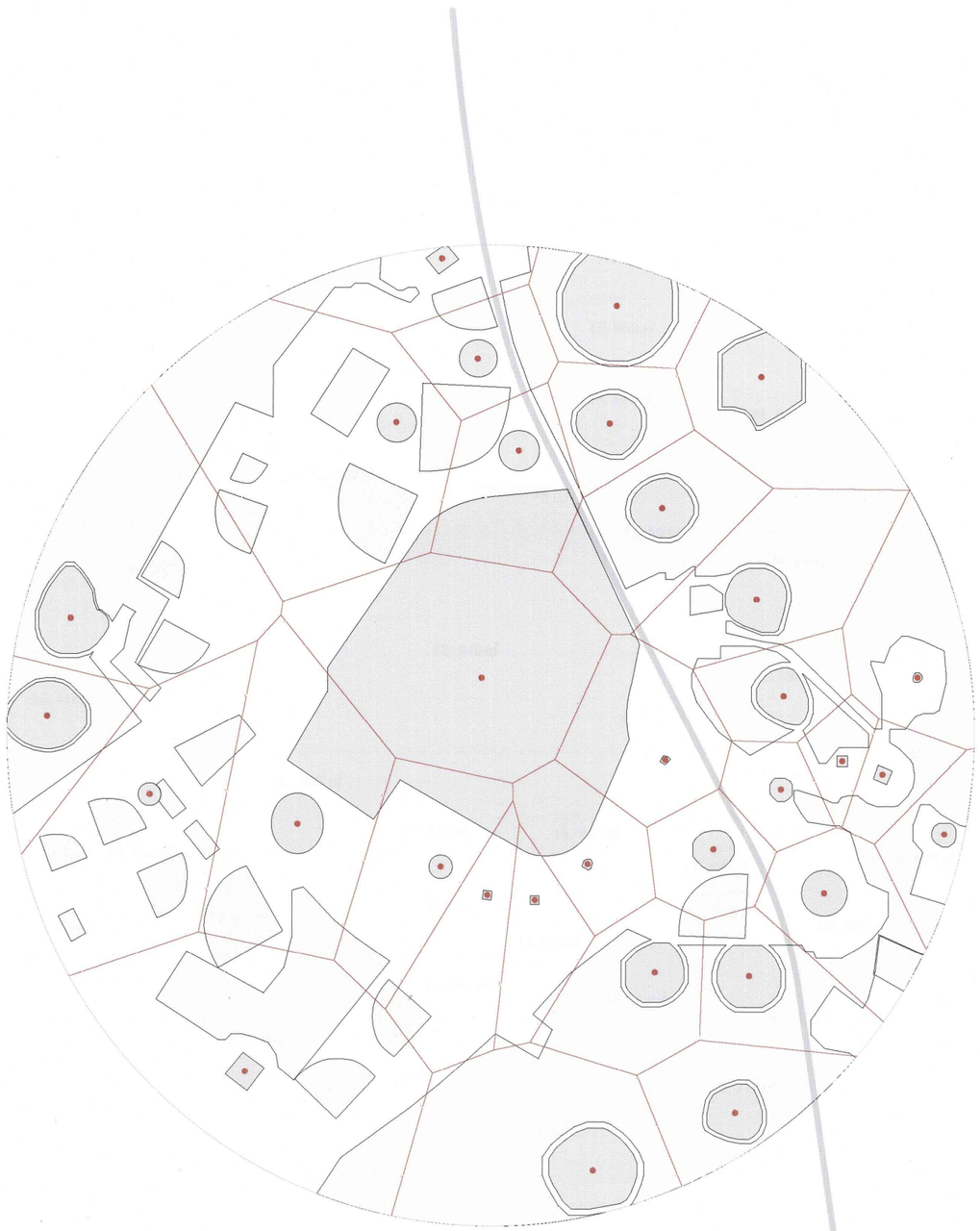
> chapter-5.1
Master Plan

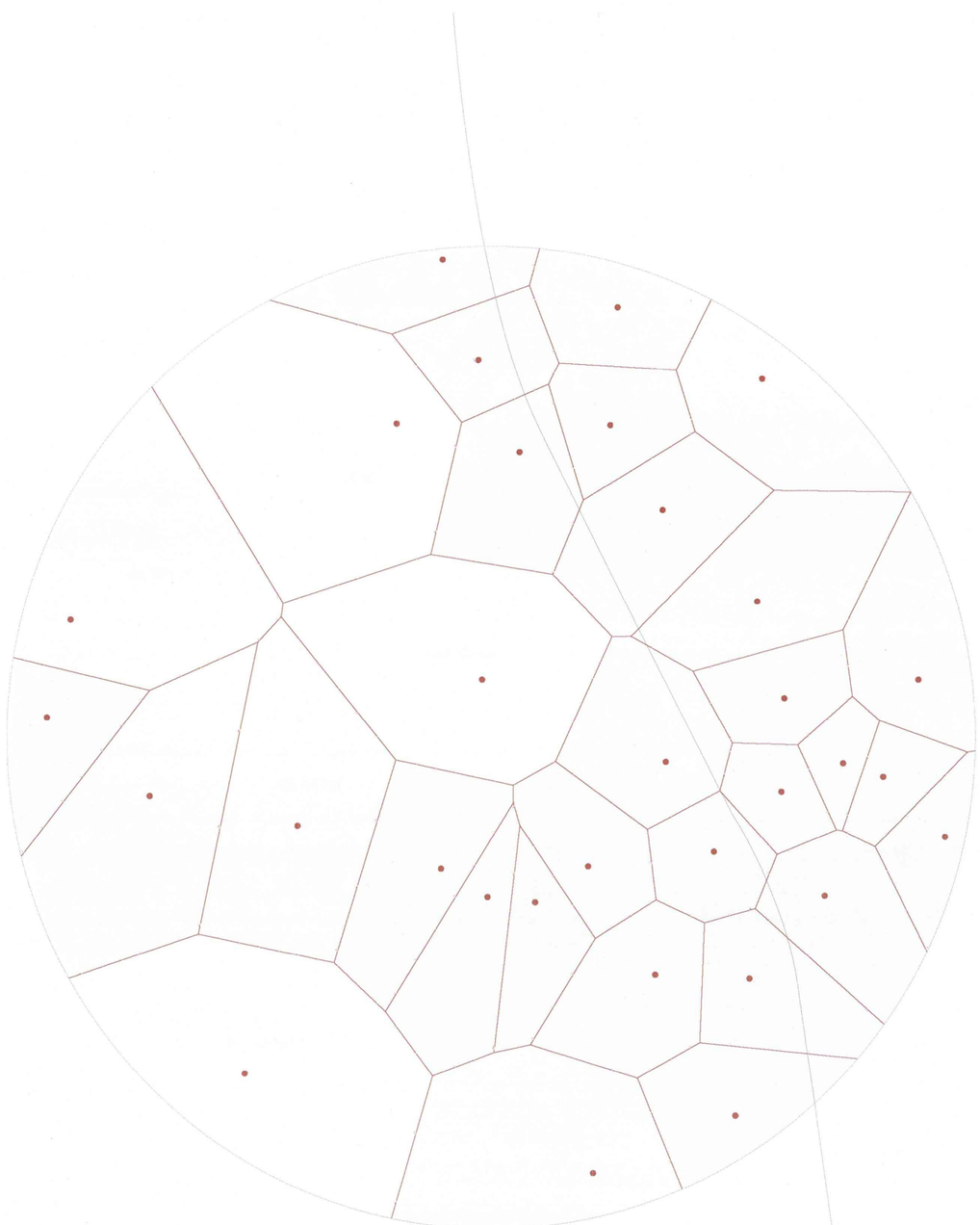
0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜ボロノイ分割＞

囲障区域中心点を母点としたボロノイ分割を行い新たなジオメトリーの基盤とする。





: CAPTION

fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月) 参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.1
Master Plan

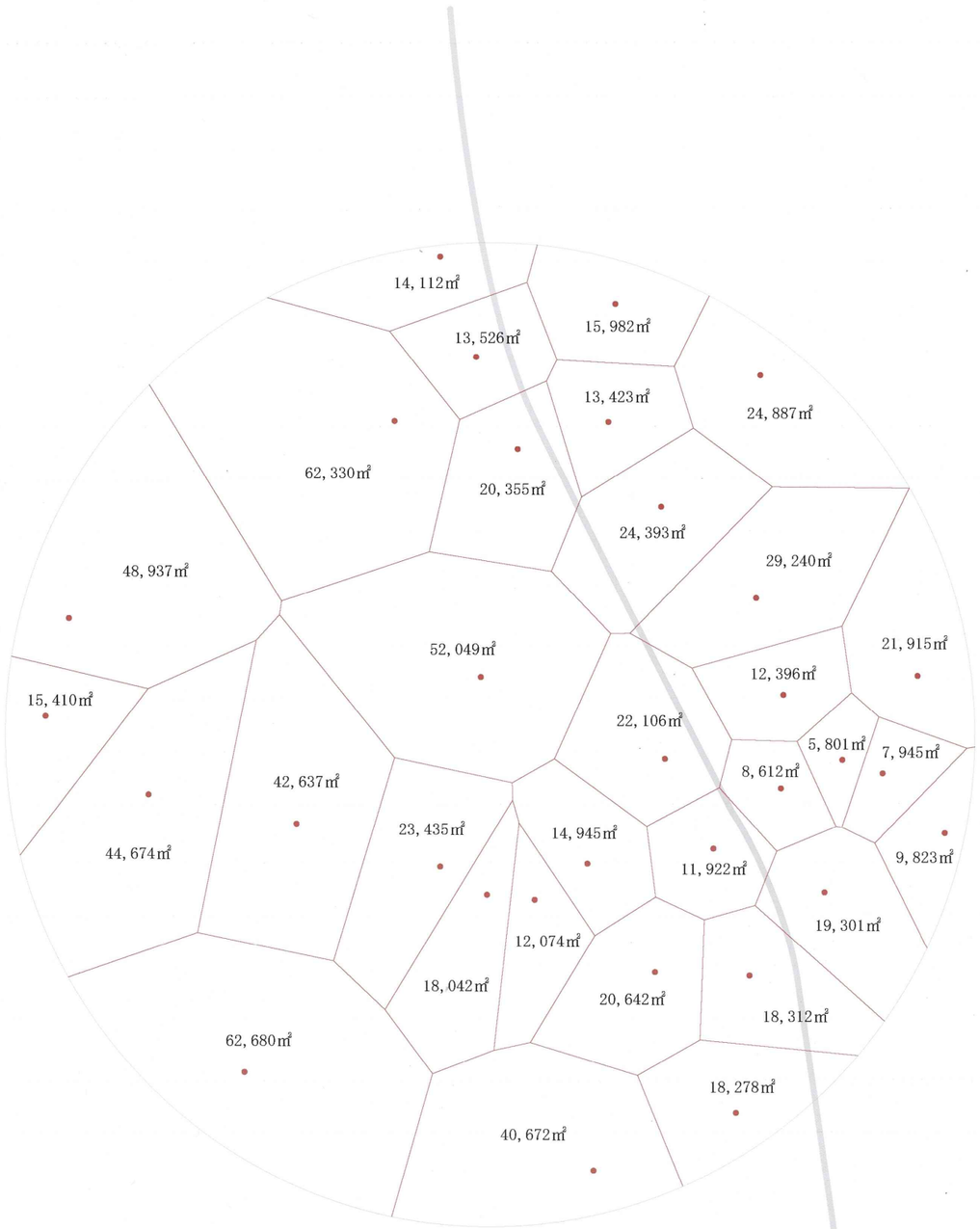
＜分割後の面積＞

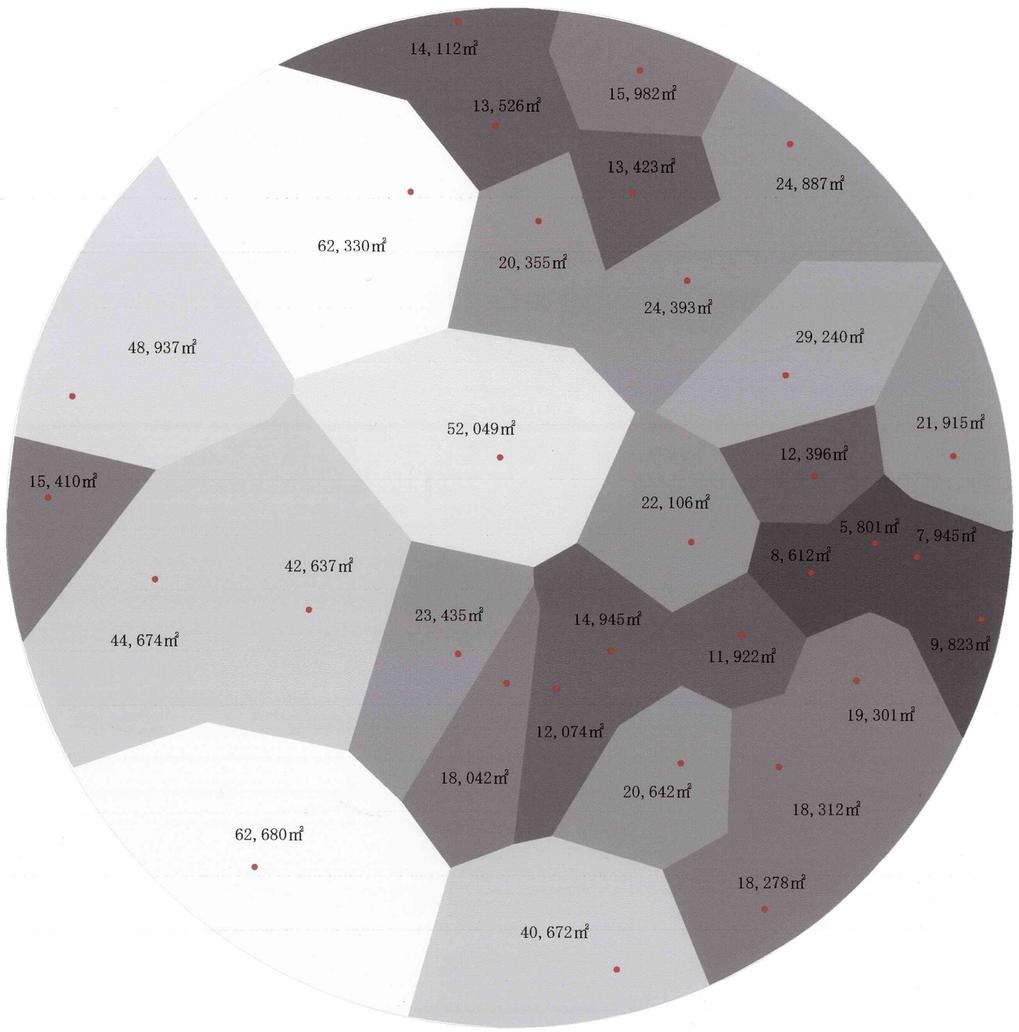
分割された新たなジオメトリーの各面積を示す。

0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

5000-10000 10001-15000 15001-20000 20001-25000 25001-30000 30001-35000 35001-40000 40001-45000 45001-50000 50001-55000 55001-60000 60001-65000





: CAPTION

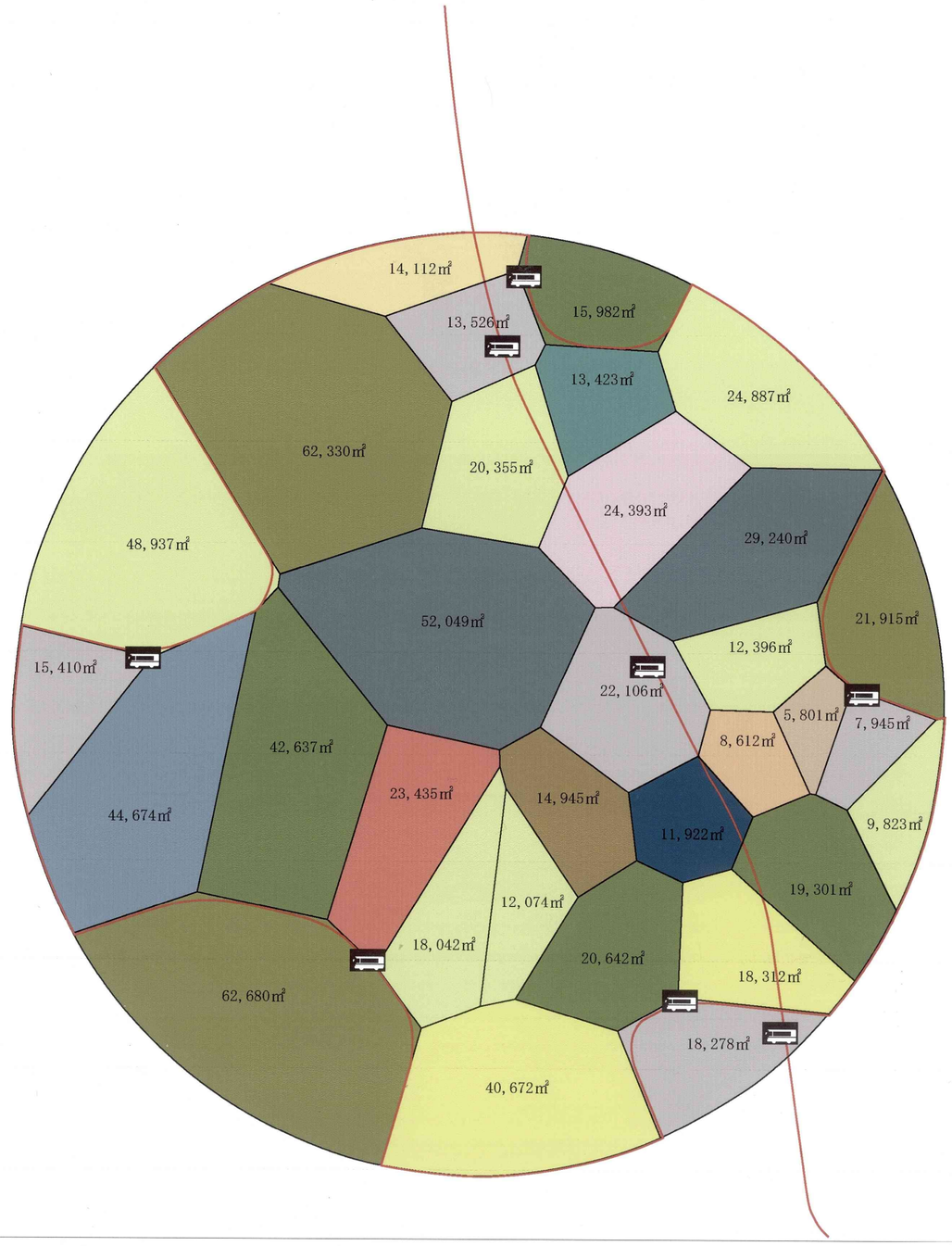
fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月) 参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.1
Master Plan

＜外部プログラムの配置＞

32ヵ所のフィールドに既存の農園や野球場に加えた、外部空間としての様々なプログラムを散在させる。
人々の動線は主に、それら散在したプログラムの境界線上に張り巡る。



S:1/6000

- Outside
  - Garden Farm
    - Vegetables Farm (Allotment Gardens)
    - Vegetables Farm (Learning Experience)
  - Flower Garden
    - Tulip Garden (March-April)
    - Poppy Garden (April-June)
    - Sunflower Garden (July-August)
    - Cosmos Garden (September-October)
  - Sports Ground
    - Baseball Field
    - Soccer/Futsal Field
    - Basketball/3 on 3 Field
    - Tennis Field
  - Green Tract
    - Outdoor Garden
    - Event Garden
  - Barbecue Plaza
  - Dog Run
  - Parking
  - Bus Stop
  - People's Circulation
  - Car's Circulation

: CAPTION

fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月) 参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜内部プログラムの選定＞

外部空間を補完、もしくは関連する内部空間のプログラムを選定する。

Outside

Garden Farm
- Vegetables Farm (Allotment Gardens)
- Vegetables Farm (Learning Experience)

Flower Garden
- Tulip Garden (March-April)
- Poppy Garden (April-June)
- Sunflower Garden (July-August)
- Cosmos Garden (September-October)

Sports Ground
- Baseball Field
- Soccer/Futsal Field
- Basketball/3 on 3 Field
- Tennis Field/Gateball Field

Green Tract
- Outdoor Garden
- Event Garden

- Barbecue Plaza
- Dog Run
- Parking
- People's Circulation

Inside

Cooking Studio
Farm Storage
Common Kitchen
Lecture Room
Management Office
Restaurant
Crop Shop

Farm Storage
Common Kitchen
Lecture Room
Management Office

Watching Place
Photo Gallery
Management Office
Flower Shop

Photo Gallery
Management Office
Flower Shop

Photo Gallery
Management Office
Flower Shop

Photo Gallery
Management Office
Flower Shop

Spa
Gymnasium
Watching Place
Meeting Room
Shower Room
Dressing Room
Management Office
Storage

Watching Place
Meeting Room
Shower Room
Dressing Room
Management Office
Storage

Shower Room
Dressing Room
Management Office
Storage

Shower Room
Dressing Room
Management Office
Storage

Studio
Management Office
Photo Gallery
Common Kitchen
Terrace

Hall
Mini Theater
Cafe
Fukaya C.P Museum
Library
Book Shop
Multipurpose Room

Common Kitchen
Management Office

Management Office
Photo Gallery

Information
Lounge
Kiosk

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

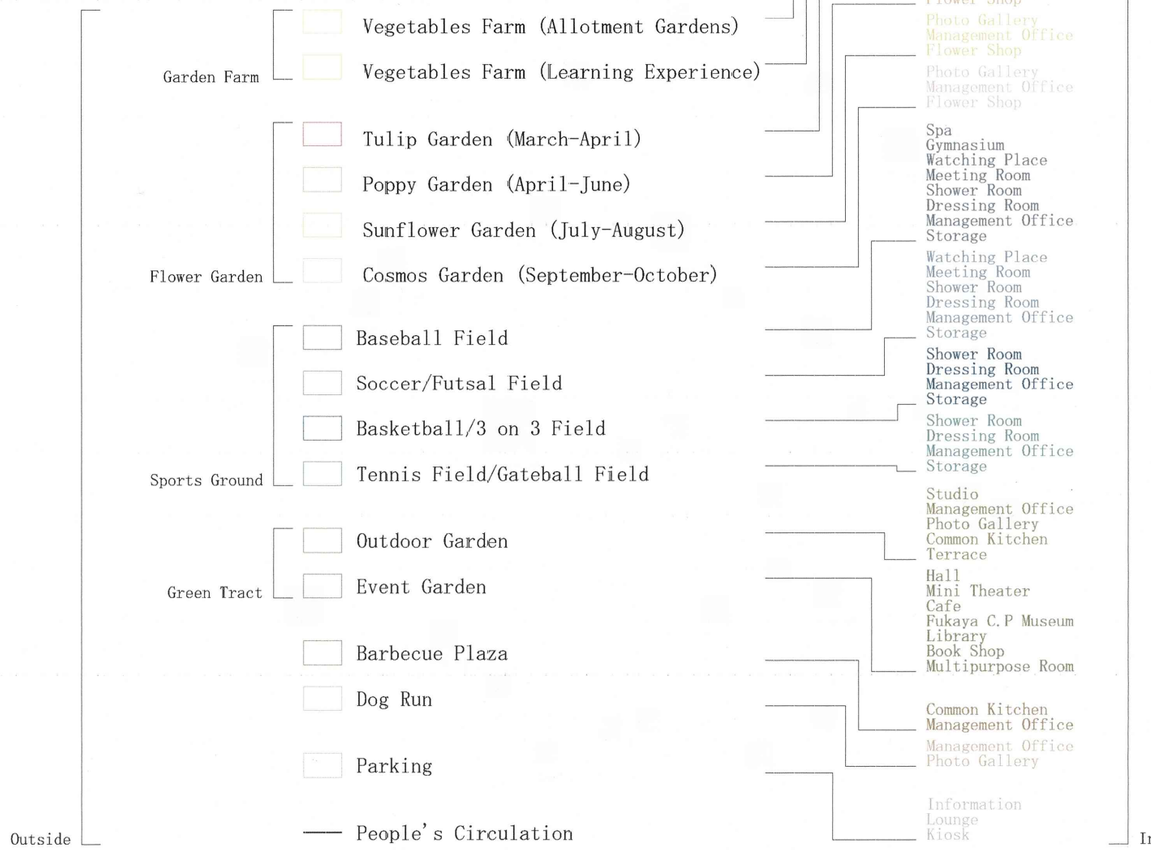
> chapter-5.1
Master Plan

0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜内部プログラムの配置＞

内部空間のプログラムを動線上交点にのせる。この操作によって各交点は2つ以上の異なる外部空間の補完機能を
併せ持つことになり、それぞれの活動を関係づけさせることが期待できる。



: CAPTION

fig.1:米軍施設返還跡地利用指針(平成18年6月)_参考作図 / fig.2:敷地現況写真(著者撮影2007年08月13日)

: PAGE

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

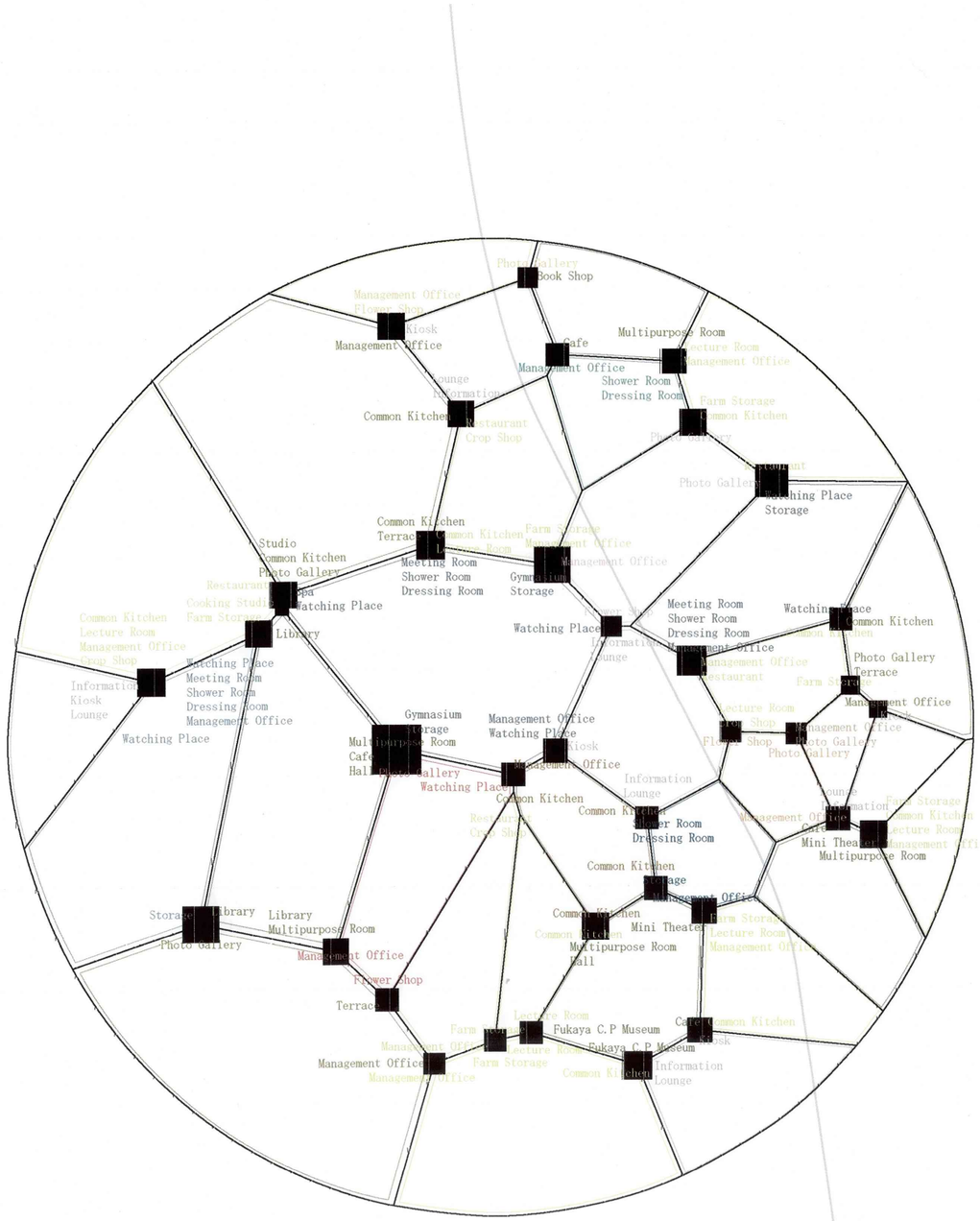
> chapter-5.1
Master Plan

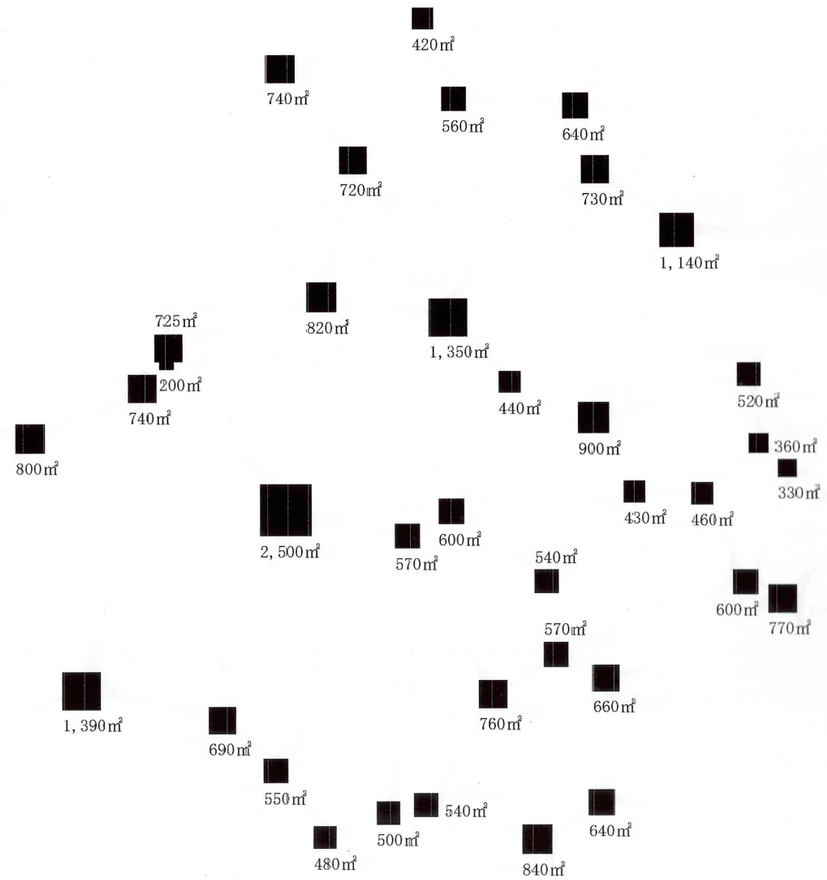
0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜ヴォリュームの適合＞

配置された内部空間プログラムの必要ヴォリュームを算出する。





Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

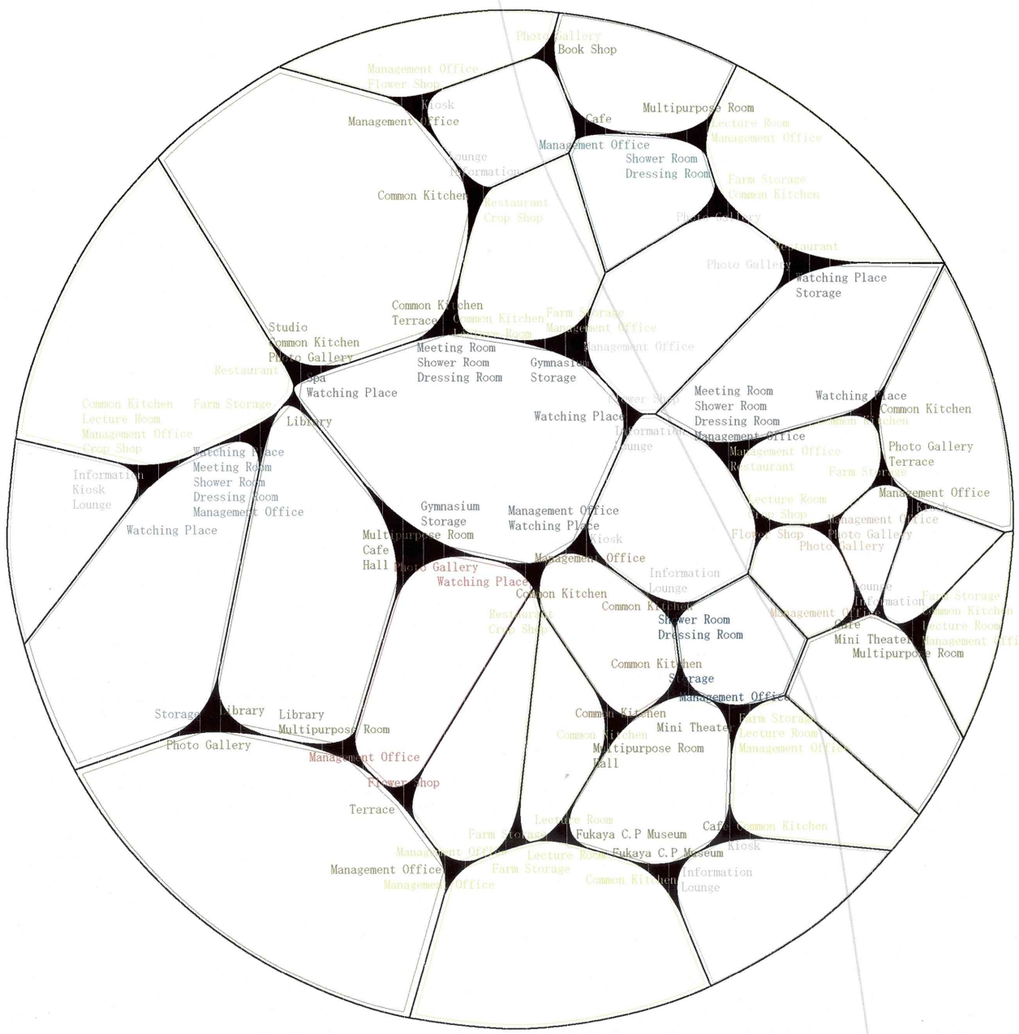
> chapter-5.1
Master Plan

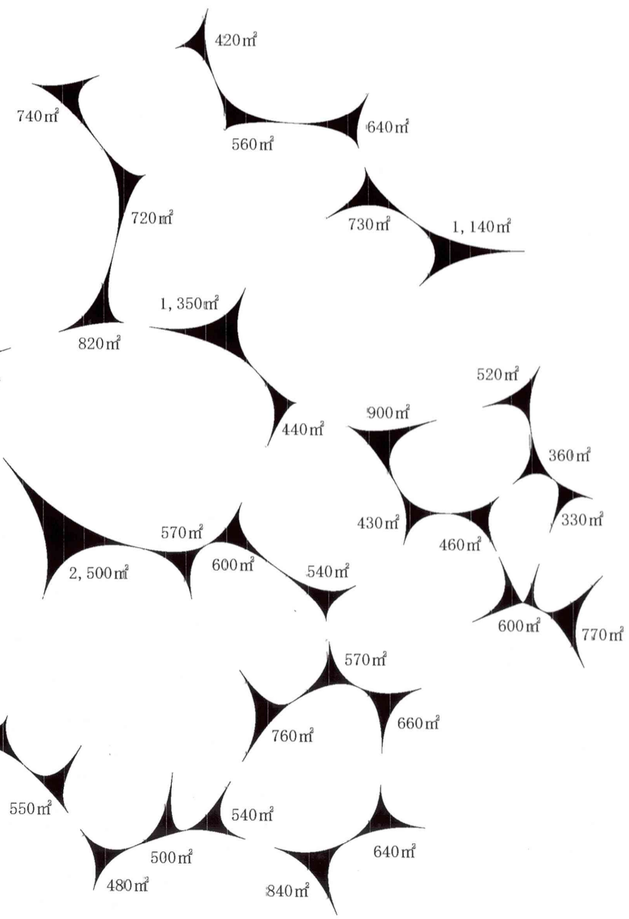
0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜建築外形の決定＞

算出されたヴォリュームをもとに、建築の外形を決定する。
第4章2節で述べたように、「動接縁」を建築の基本形態とする。





Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.1
Master Plan

0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

＜マスタープラン＞

都市における様々な外部空間としての機能、そしてそれらを関係づける動接縁としての建築が張り廻る。
交通面では、新たに敷地周囲をまわるように交通網を通すことによって既存の県道402号線を含めた回遊性を獲得する。

新規交通路

既存主要交通路

-建築計画-

0 50 100 200 300 400 500m

S:1/6000

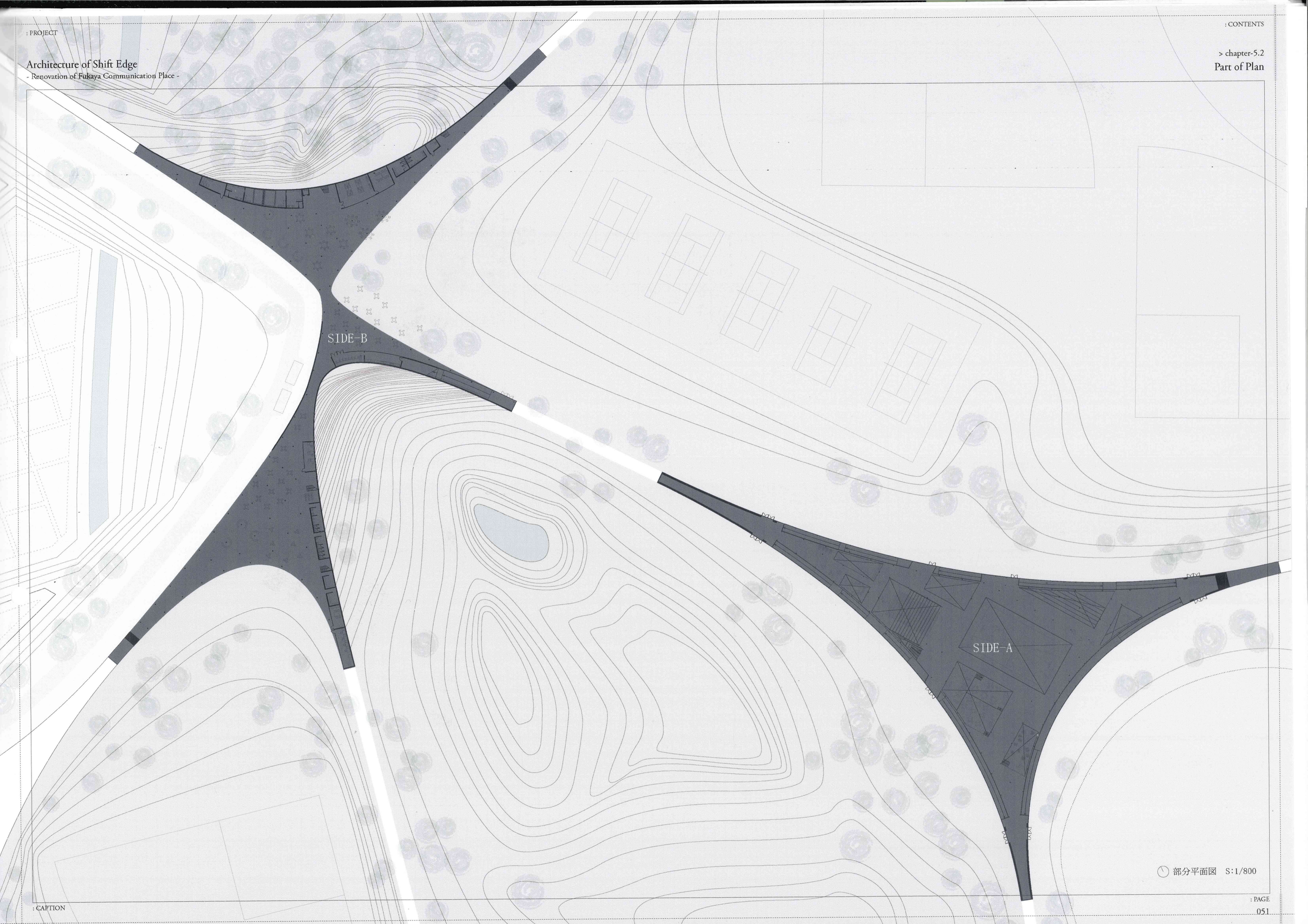
＜動接縁としての建築＞

動接縁としての建築は、それ自体で完結するものではない。広大な敷地に張り廻り、様々な関係性の中ではじめて生まれるものである。
修士設計では、この広大な敷地の中で、その一部を具体的に設計していくこととした。

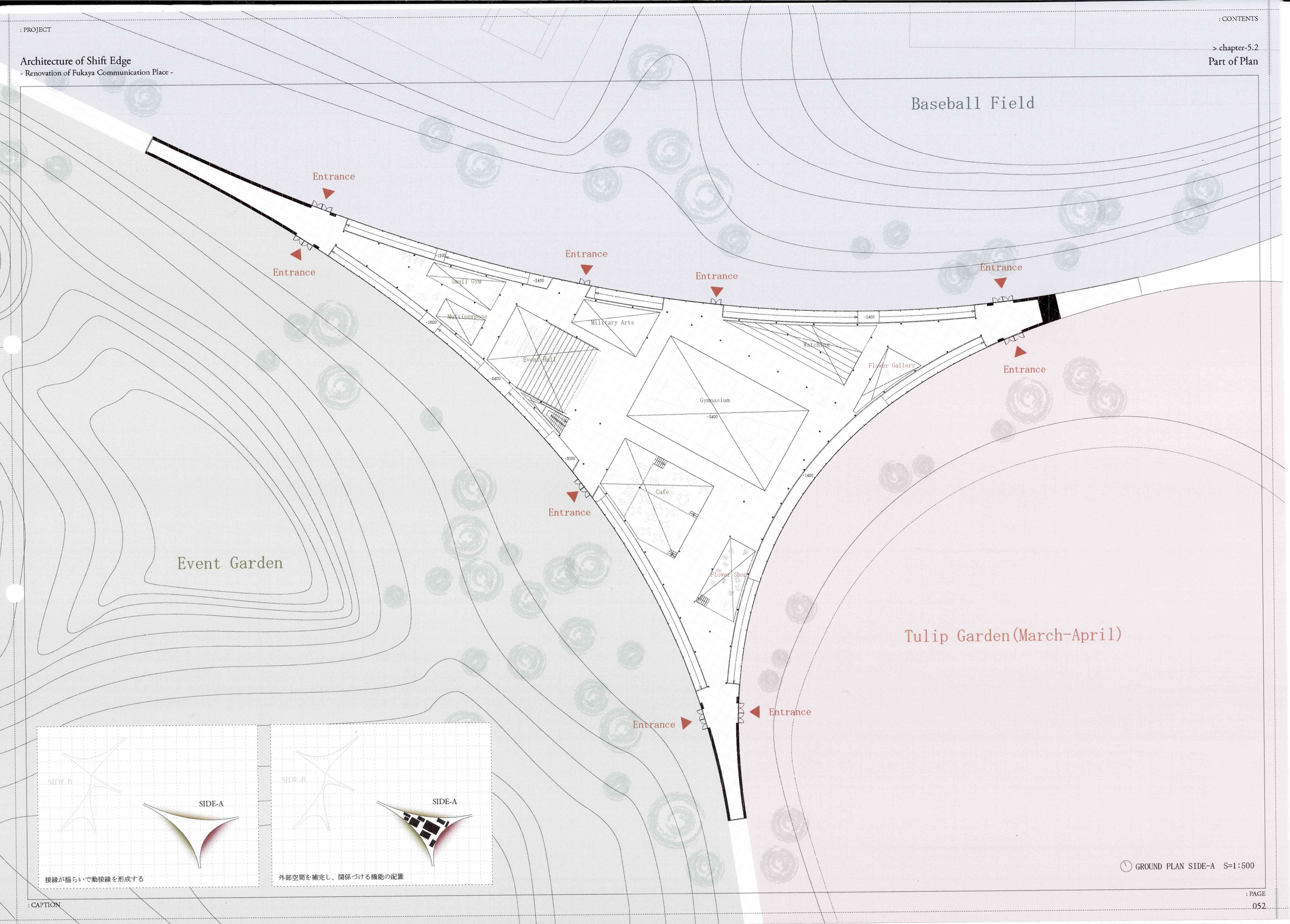
Outdoor Garden
+3000
車両専用道路
-1200
-600
Tennis Field
Vegetables Farm(Allotment Gardens)
48, 937㎡
480区画(約100㎡)
搬入車専用車寄せ
Entrance
Baseball Field
Entrance
Entrance
Entrance
Entrance
Entrance
-2200
-2000
Event Garden
Baseball Field
-1200
Entrance
Entrance
Entrance
+200
Tulip Garden(March-April)

異なる活動の舞台が異なる地形に用意され、動接縁としての建築はその規模やヴォリュームを変えながら
巨大な一つの「流れ」をつくる。

部分平面図　S:1/800



部分平面図　S:1/800



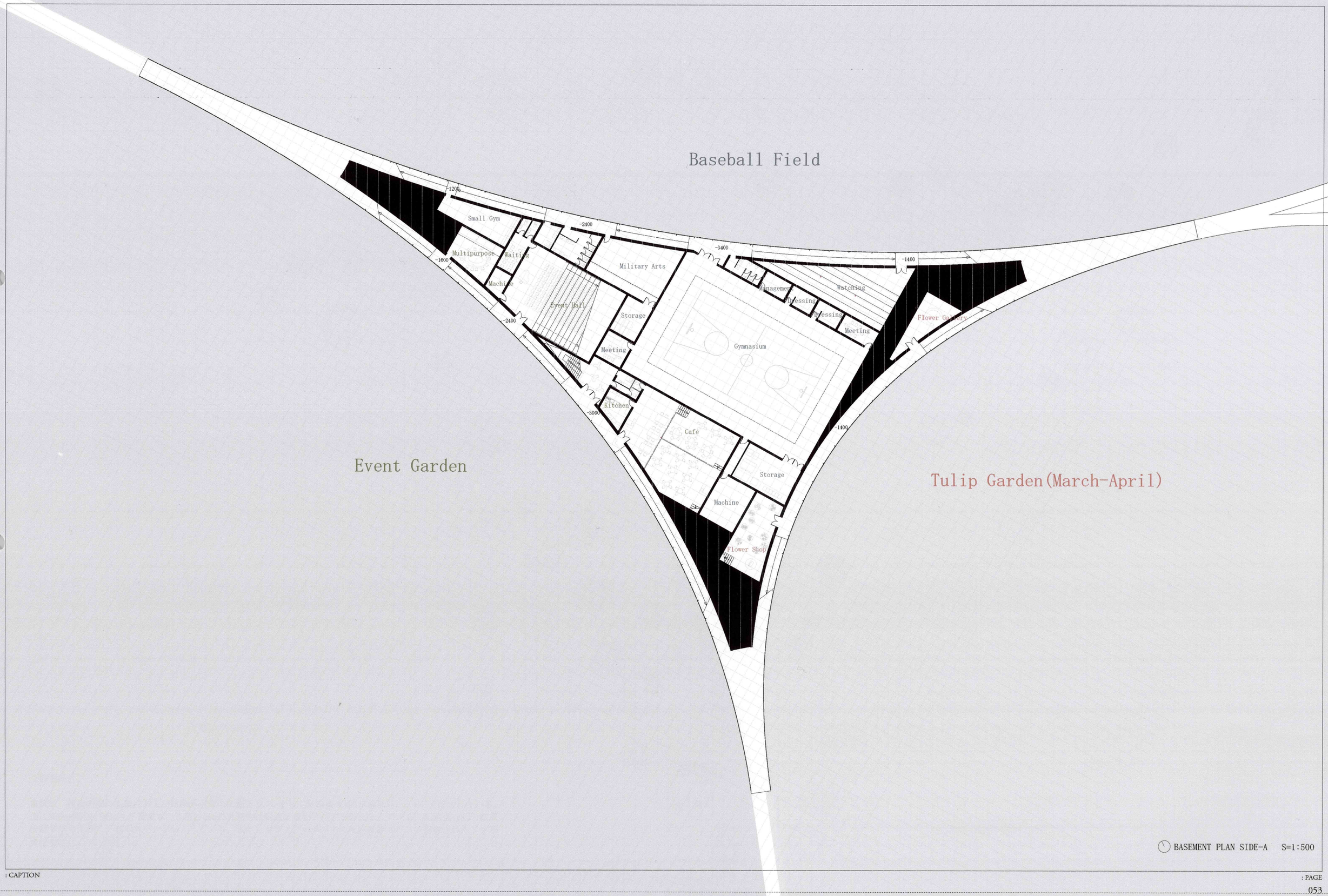
接縁が揺らいで動接縁を形成する

外部空間を補完し、関係づける機能の配置

GROUND PLAN SIDE-A S=1:500

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.2
Part of Plan



BASEMENT PLAN SIDE-A S=1:500

GROUND PLAN SIDE-A S=1:500

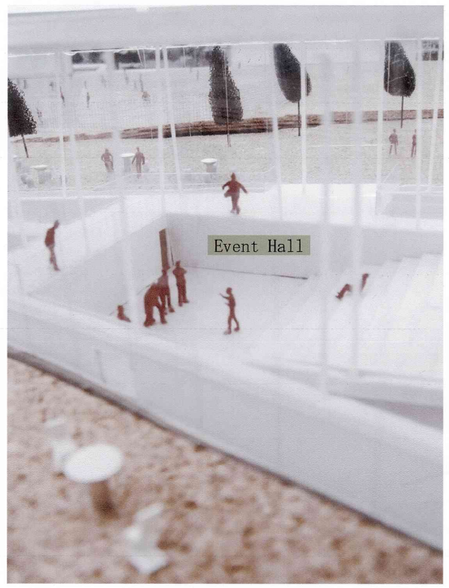
＜構造計画＞

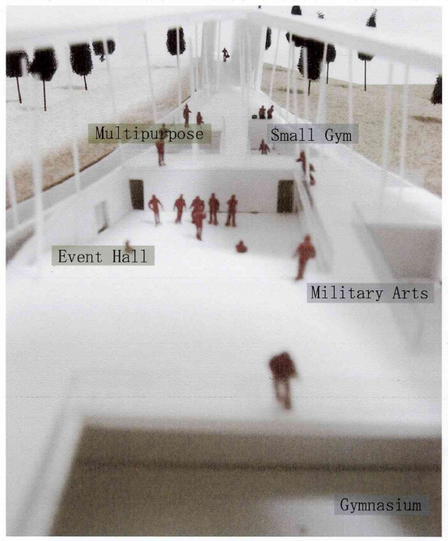
屋根は、建物内部の丸鋼柱および建物外周部のRC壁とリブ,そして屋根接地部(赤線部)によって支持されている。主に400㎜厚のRC壁は水平荷重を、直径240㎜の丸鋼柱は鉛直荷重を負担する計画としている。丸鋼柱は図の赤点線部が示すように、基本スパンを6mとしている。また、ガラスファサードの風圧は3mスパンで配置されたリブが負担する。

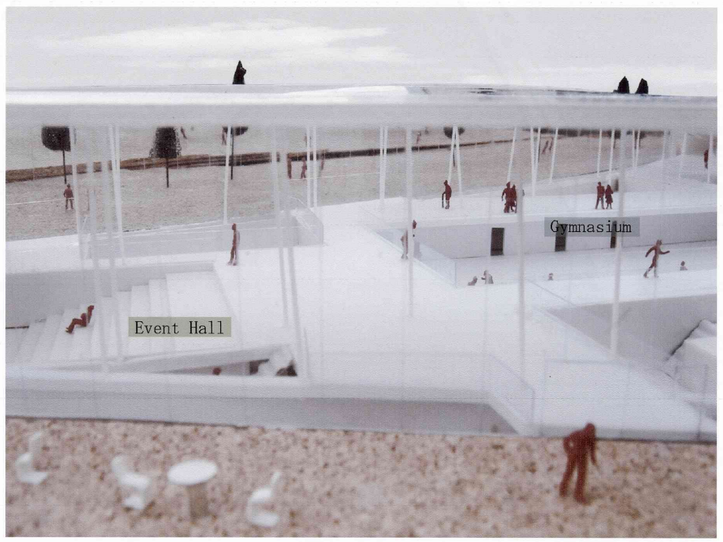
Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

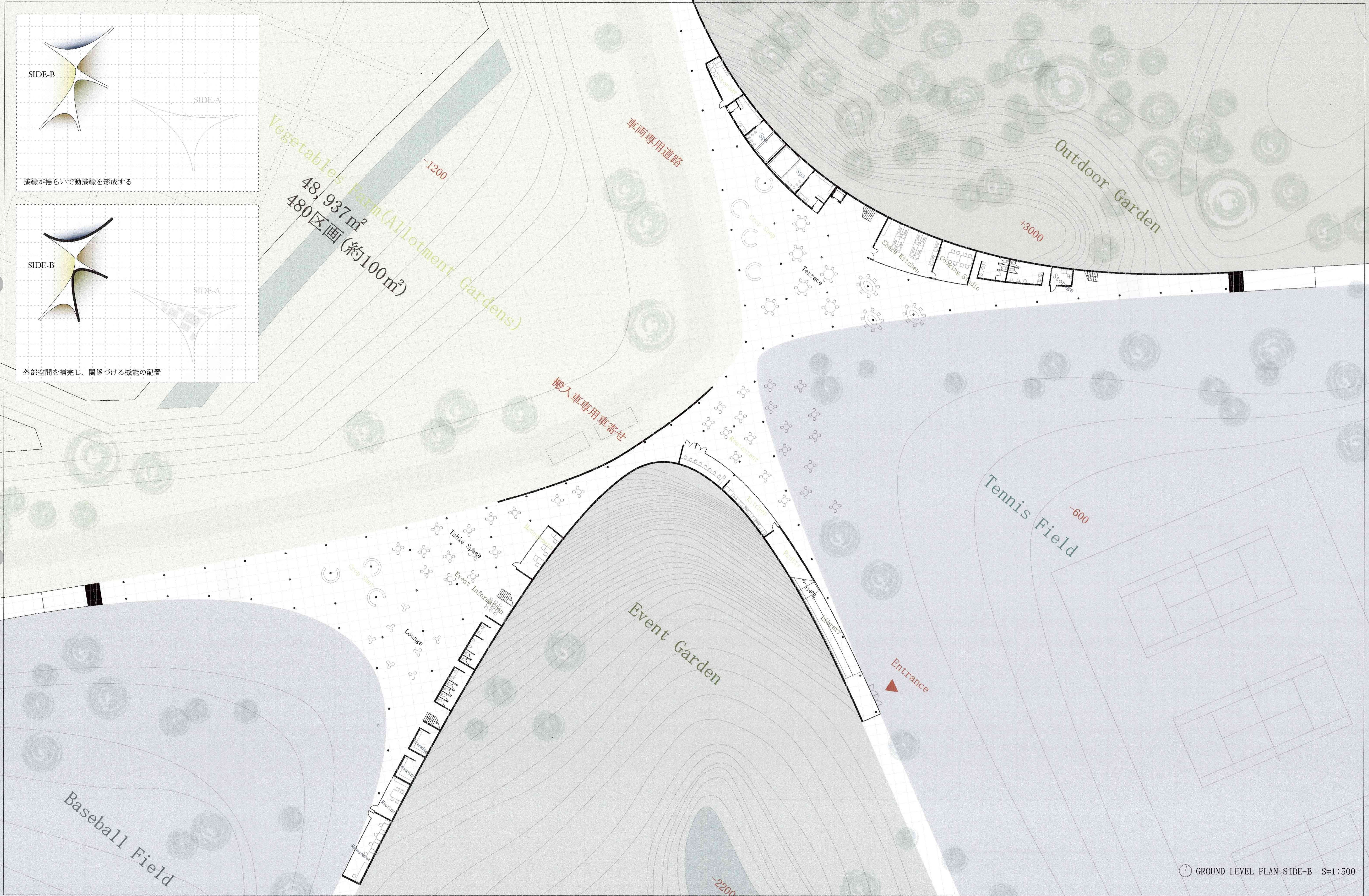
＜異なる機能の同居体＞

異なる活動領域の結節点に、それぞれの機能が同居することで、動接縁は新たな活動を誘発する場を形成する。








SIDE-B
SIDE-A
接縁が揺らいで動接縁を形成する
SIDE-B
SIDE-A
外部空間を補完し、関係づける機能の配置
Vegetables Farm(Allotment Gardens)
48,937m²
480区画(約100m²)
-1200
車両専用道路
搬入車専用車寄せ
Outdoor Garden
+3000
Terrace
Table Space
Event Information
Lounge
Event Garden
Tennis Field
-600
Entrance
Baseball Field
-2200
GROUND LEVEL PLAN SIDE-B S=1:500

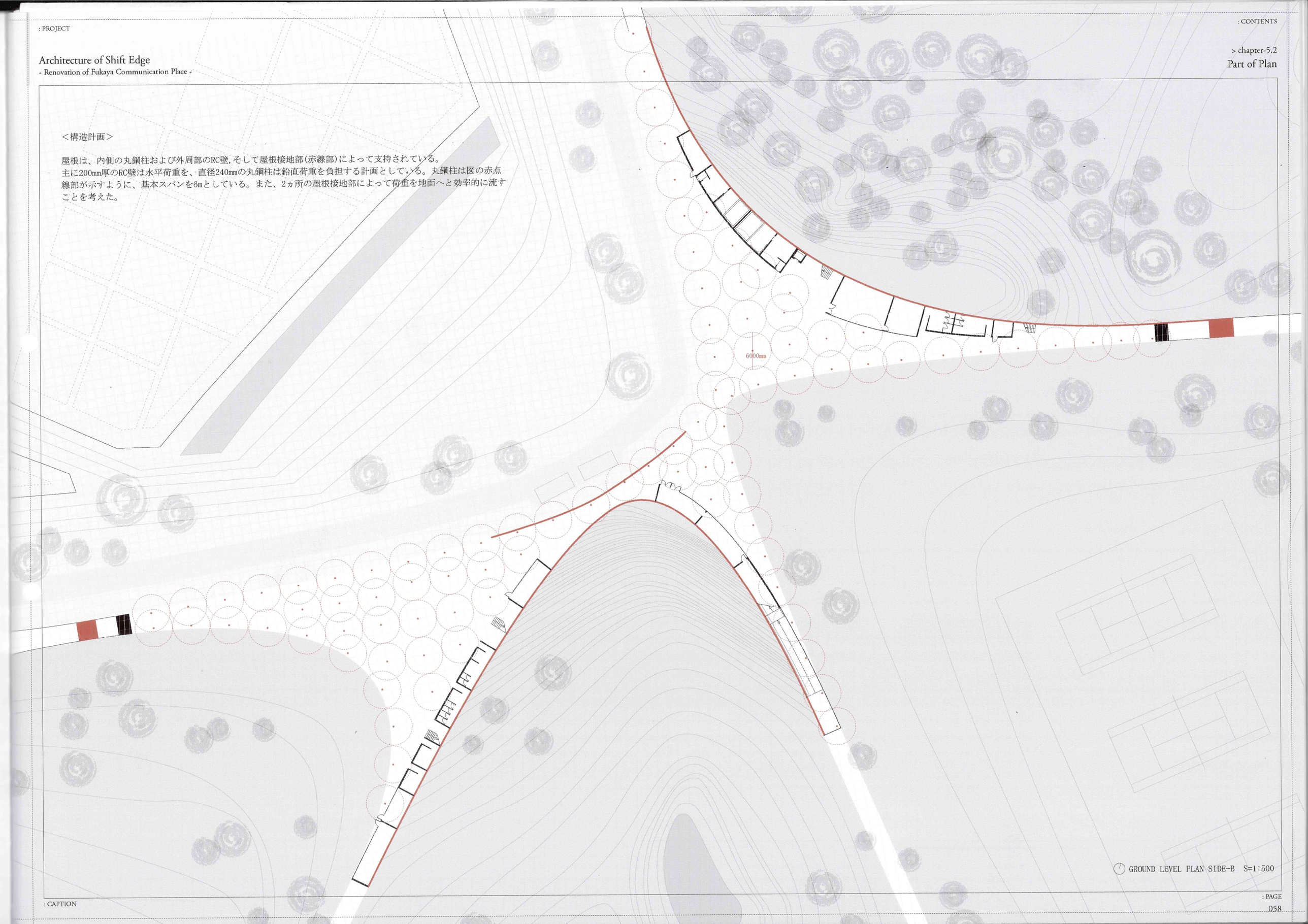
Vegetables Farm(Allotment Gardens)
48,937m²
480区画(約100m²)
-1200
車両専用道路
搬入車専用車寄せ
Studio
Management
Shop
Common Kitchen
Watching
Terrace
+3000
Outdoor Garden
Restaurant
Library
Table Space
Mini Theater
Lounge
Gallery
Gallery
Toilet
Event Garden
-2200
-600
Tennis Field
Baseball Field

UPPER LEVEL PLAN SIDE-B S=1:500

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

＜構造計画＞

屋根は、内側の丸鋼柱および外周部のRC壁, そして屋根接地部(赤線部)によって支持されている。
主に200㎜厚のRC壁は水平荷重を、直径240㎜の丸鋼柱は鉛直荷重を負担する計画としている。丸鋼柱は図の赤点線部が示すように、基本スパンを6mとしている。また、2ヵ所の屋根接地部によって荷重を地面へと効率的に流すことを考えた。



GROUND LEVEL PLAN SIDE-B S=1:500

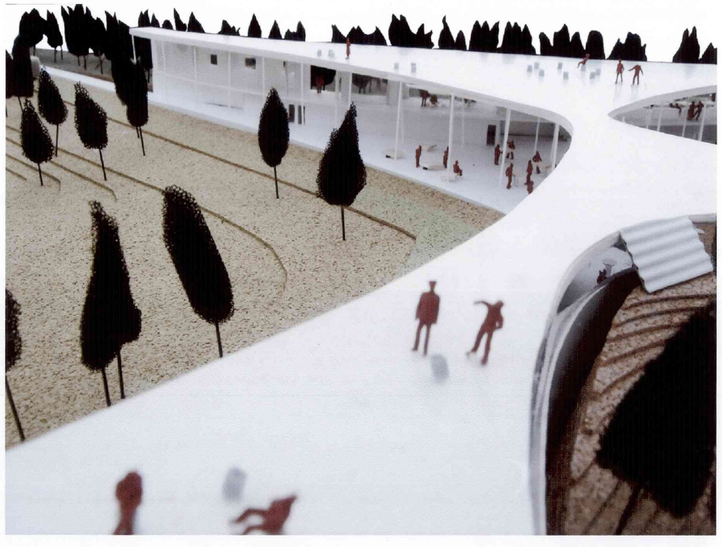
: CAPTION

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.2
Part of Plan

＜異なる機能の同居体＞

異なる活動領域の結節点に、それぞれの機能が同居することで、動接縁は新たな活動を誘発する場を形成する。



Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

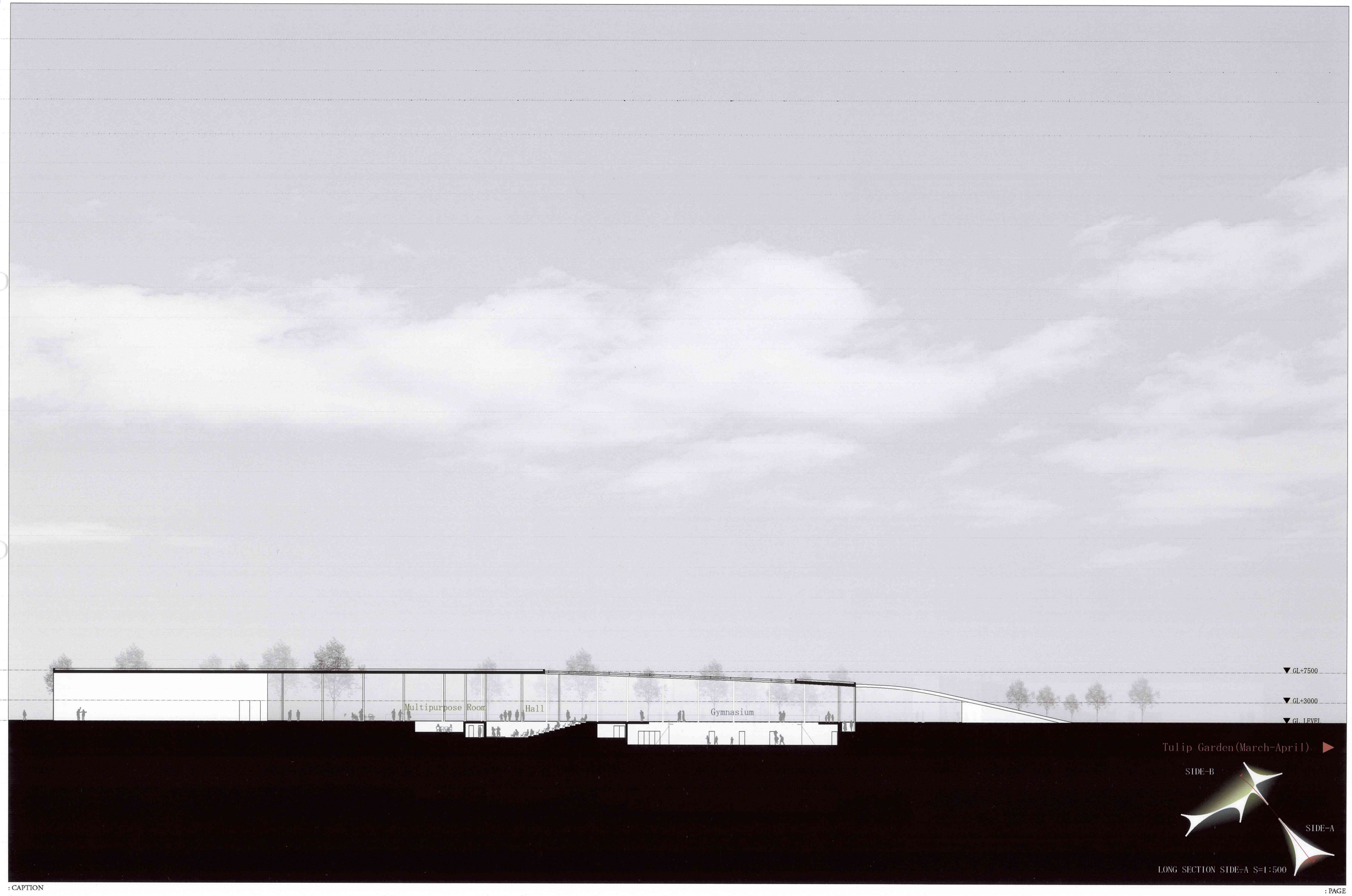
> chapter-5.2
Part of Plan

LONG SECTION SIDE-B S=1:500

: CAPTION

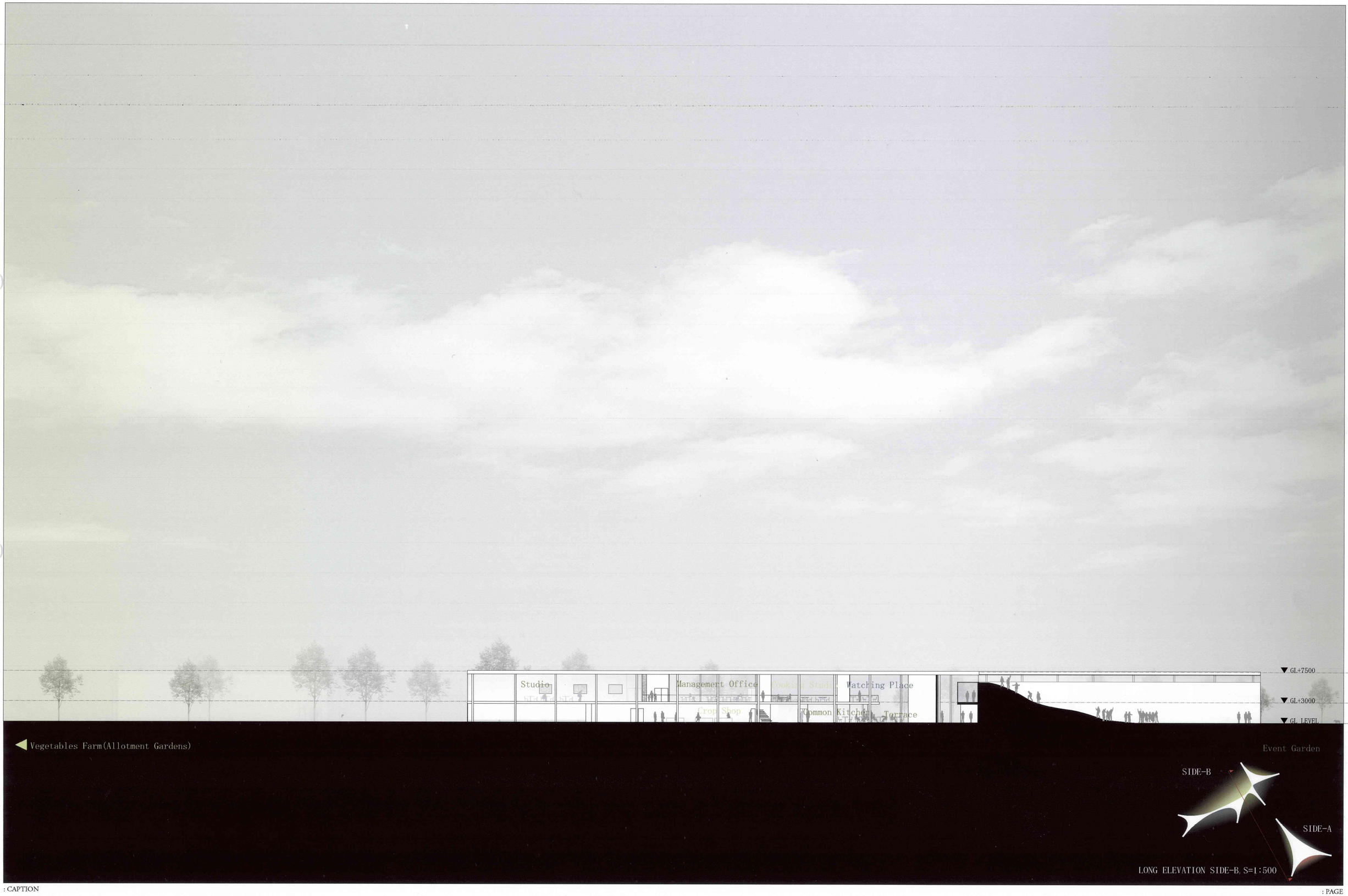
Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.2
Part of Plan



LONG SECTION SIDE-A S=1:500

: CAPTION



LONG ELEVATION SIDE-B S=1:500

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Part of Plan

LONG ELEVATION SIDE-A S=1:500

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

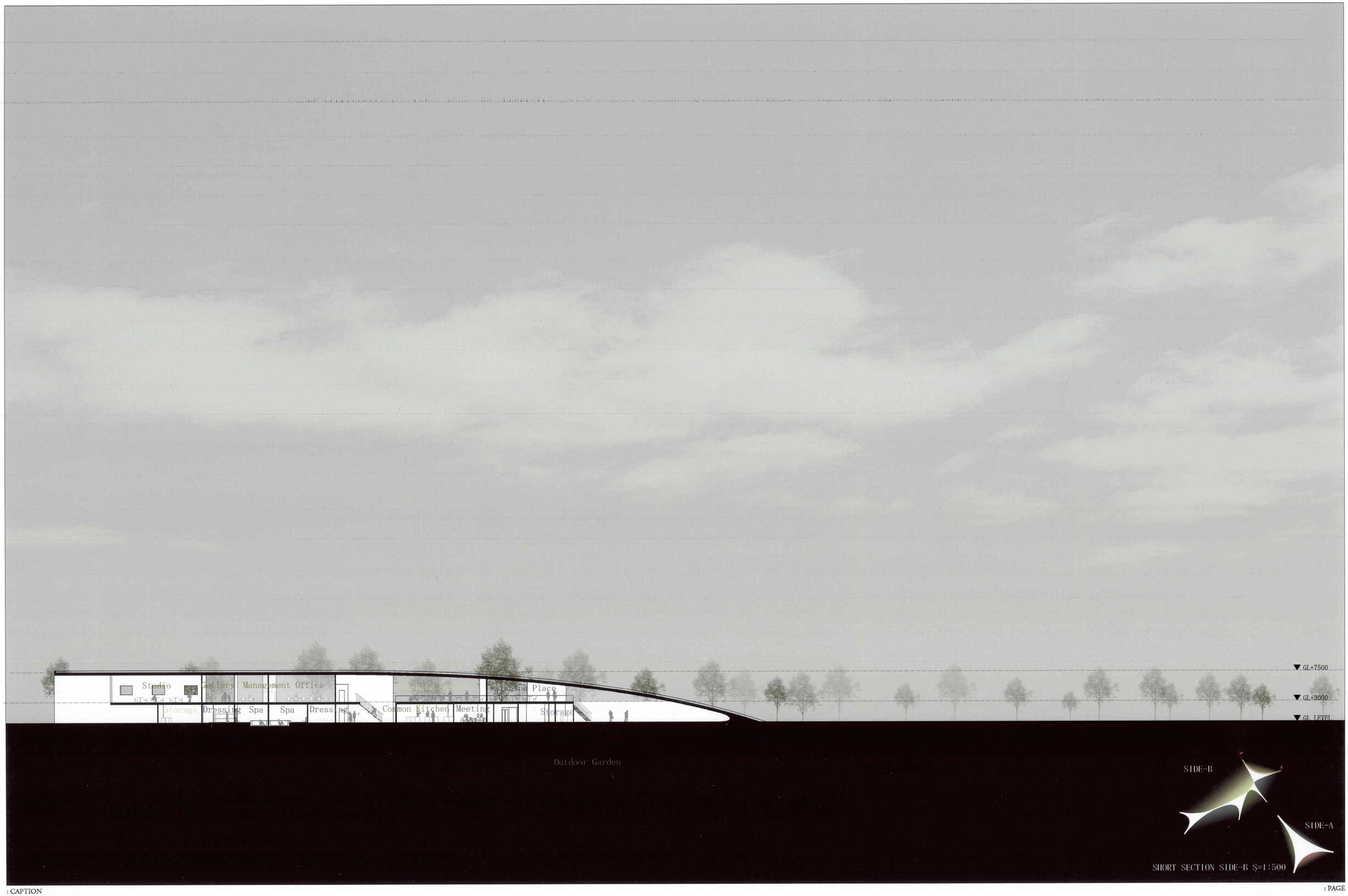
> chapter-5.2
Part of Plan

SHORT SECTION SIDE-A S=1:500

: CAPTION

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

Part of Plan

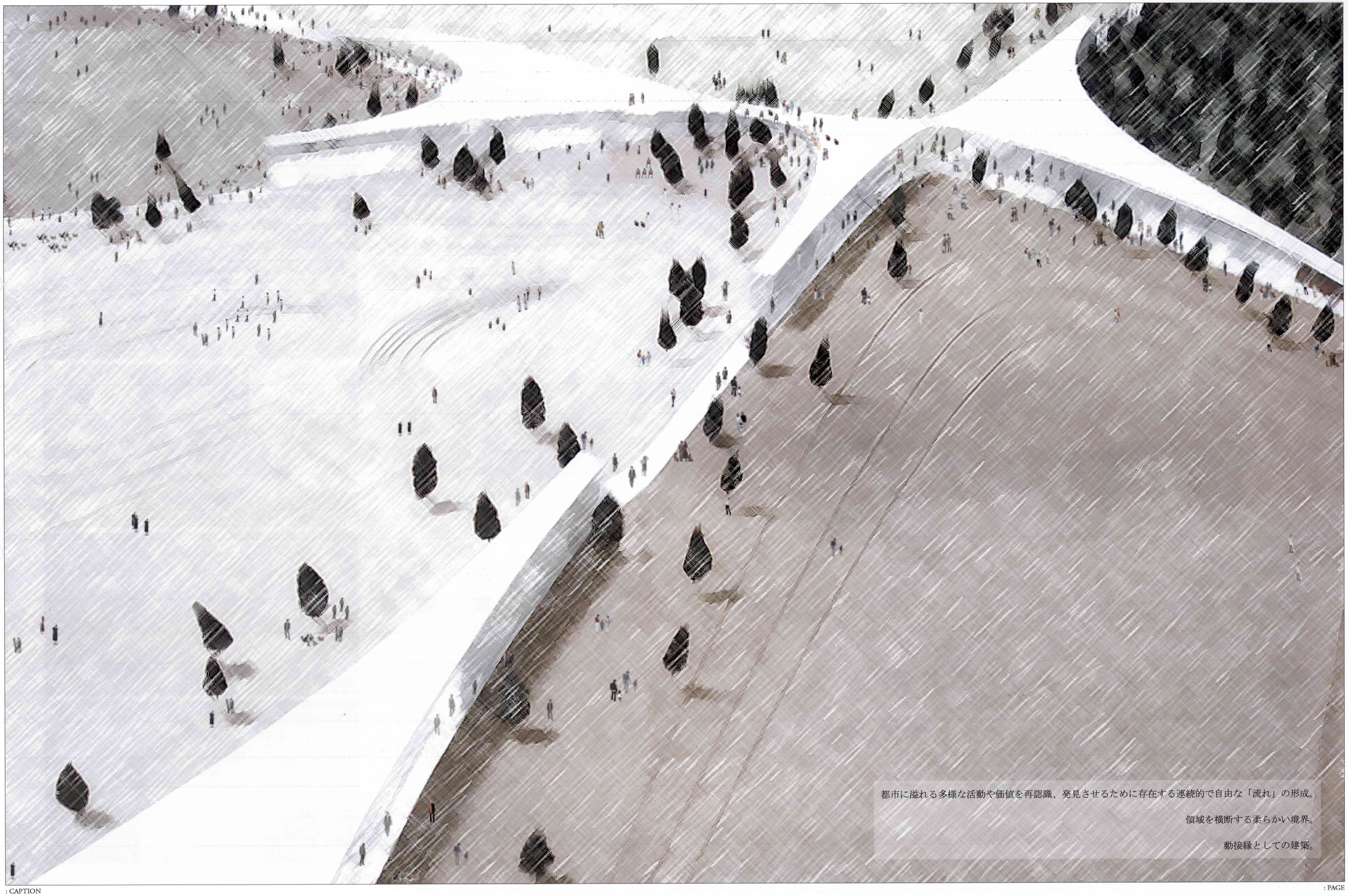


SHORT SECTION SIDE-B S=1:500

: CAPTION

Architecture of Shift Edge
- Renovation of Fukaya Communication Place -

> chapter-5.2
Part of Plan



都市に溢れる多様な活動や価値を再認識、発見させるために存在する連続的で自由な「流れ」の形成。

領域を横断する柔らかい境界。

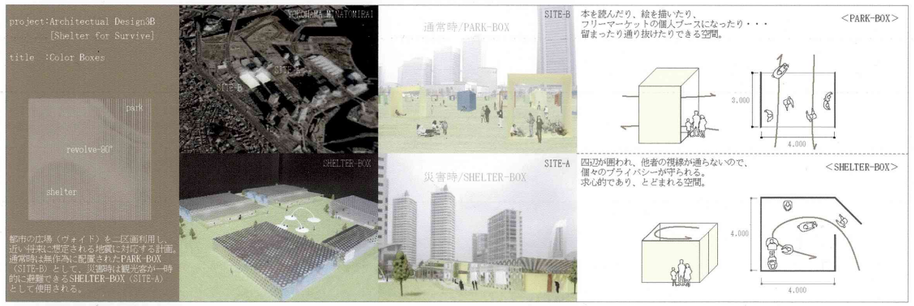
動接縁としての建築。

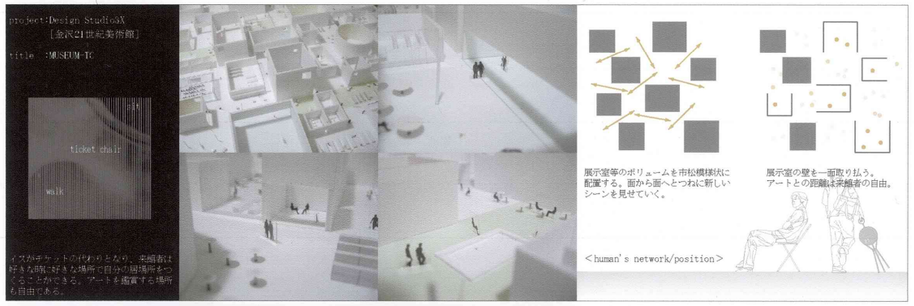
: CAPTION

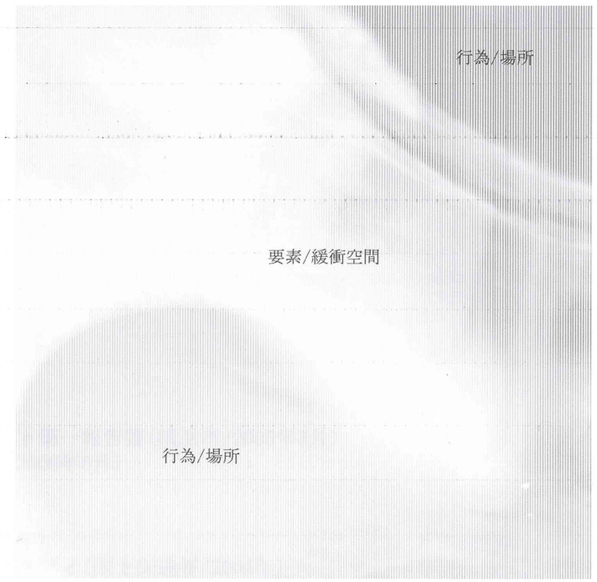
Architecture of Shift Edge

- Renovation of Fukaya Communication Place -

Afterword







「行為のつながるところ」

-後書-

都市には人によって無数の「行為」が展開されている。それと同時に無数の「場所」がその舞台となっている。私はその「行為」と「行為」をつないでいる要素や「場所」と「場所」の緩衝空間に興味を持ち、そこを軸に設計してきた様に思う。そしてその緩衝空間を操作することで、新たな「行為」や「場所」が生まれ、風景になることを信じている。ここで言う「場所」とは都市のようなマクロなものから、建築内部の部屋といったミクロなものまで広い範囲を想定している。

「行為のつながるところ」は常に意識していたテーマであった。この修士設計においての接縁もまさにそうであった。おそらく自分の中で建築の設計は、様々な要素との関係性でつくられているという意識があったからである。

最後になりましたが、この場を借りて今までご指導して下さった渡辺真理先生には心から感謝いたします。また、忙しい中研究の相談に乗って下さった副査の富永譲先生、佐々木睦朗先生にも感謝いたします。そして研究室の仲間や後輩、家族には幾度となく励まされました。特にこの修士設計では多くの後輩に助けられました。自身の卒業設計が終わった瞬間から怒涛のワントップ体制で作業してくれた小林くん、飯塚と板挟み状態でありながら、寒い中模型写真を撮ってくれた新倉、模型を華やかに楽しい雰囲気にしてくれたゴンちゃん、思ったよりも来てくれなかったけど、1日で相当な仕事をこなしてくれた大場、道に迷いながらも、帰れないという空気を読んで泊まってくれた鈴木くん、森元気隊でありながら快く来てくれた阿部くん、今度行こうぜスノボ、ヨーロッパ旅行から帰ってきた直後におみやげ持参で駆けつけてくれた鈴木さん、インフルエンザの原因があの家の布団だったらごめん、宇津木くん、1年生ながらかなりのペースで来てくれた大塚くん、模型写真良かったよ、大きい体でありながら、こじんまりした作業を嫌な顔せずやってくれた遠藤くん、みんなありがとう。

2008年2月　戸佐佑輔

-参考文献-

■序章
・横浜市返還施設跡地利用プロジェクト第一報告書(横浜市/2005年3月)
・米軍施設返還跡地利用指針(横浜市/2006年6月)

■第2章
・国土施策創発調査(国土交通省/2007年)
・ヒートアイランド現象緩和ケーススタディ(国土交通省/2004年)
・食料自給率の部屋 http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/index.html(農林水産省/2007年)
・緑視景観調査(国土交通省/2004年)
・「BRUTUS」No.622(2007年8月号)
・「建築文化」Vol.55 No.649(2000年11月号)
・「S,M,L,XL」レム・コールハース/ブルース・マオ(1995年)

■第3章
・横浜市航空写真 横浜市中央図書館
・横浜市都市経営局基地対策部 http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/kichitaisaku/
・総務省統計局 http://www.stat.go.jp/
・横浜市都市経営局経営企画調整部 http://www.city.yokohama.jp/me/keiei/

■第4章
・「パーマカルチャー--農的暮らしの永久デザイン-」ビル・モリソン(農文協/1993年)